

HIROIDE SITE

# 広井出遺跡

—平成6年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995. 3

茅野市教育委員会

HIROIDE SITE

# 広井出遺跡

——平成6年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1995. 3

茅野市教育委員会



広井出遺跡遠景



広井出遺跡全景

## 序 文

長野県の中央に位置する茅野市は古くから人々の活躍した舞台であり、市内には300を超える遺跡が発見されています。なかでも茅野市の東部を占める八ヶ岳の広大な裾野は、縄文文化の最も発達した地域です。国の特別史跡である尖石遺跡をはじめとする多数の遺跡があり、今回調査された広井出遺跡もその一つです。

広井出遺跡の調査は芹ヶ沢地区の県営圃場整備事業に伴い、茅野市教育委員会が緊急発掘調査したものであります。調査の結果、広井出遺跡に先土器時代から縄文時代に亘たる長い期間の痕跡をみることができました。その中で遺跡を最も特徴づけるのは集落が築かれた縄文時代の前期前半です。

集落が出現する縄文時代前期初頭には東海地方からの文化の流入が顕著にみられます。今から6,000年程前になるこの時期は、後氷期の最温暖期を迎え、現在より平均気温が3～5℃も高かったと推定されています。もしかすると東海地方の人々が暑さを逃れ、この地を訪れたのかもしれません。

さて、広井出遺跡に近い神ノ木遺跡は神ノ木式土器の標識遺跡として著名であり、考古学史に大きな役割を果たした重要な遺跡です。神ノ木遺跡は試掘調査により縄文時代前期前半を中心とする大集落であることがわかっています。その存続時期から広井出遺跡との関係も注目されるところです。

最後に、発掘調査及び遺物整理作業等、長期間にわたりご尽力いただきました方々、地元の皆さんをはじめ関係者の方々に、心より感謝いたします。

平成7年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

## 例 言

1. 本書は、平成6年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う、長野県茅野市所在の広井出遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、諏訪地方事務所の委託を受け、国庫及び県費の補助を得て、茅野市教育委員会が実施した。
3. 試掘調査は平成5年12月20日から平成5年12月22日にかけて、本発掘調査は平成6年7月26日から平成6年11月21日まで実施した。出土品の整理及び報告書の作成は、平成6年11月22日から平成7年3月24日まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 本調査において、基準点測量を株式会社両角測量に、航空写真測量を中央航業株式会社に、遺物実測の一部を株式会社東京航業研究所に委託した。
5. 本調査に係わる出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管している。
6. 本調査の体制は第I章第3節に記している。
7. 本報告書の作業分担は以下のとおりである。
  - (1)原稿執筆 小林健治 (2)遺物復元 金子清春 (3)遺物実測 武居八千代 伊藤千代美
  - (4)遺物拓本 太田友子 (5)遺構トレース 伊藤千代美 (6)石器写真 小林健治 伊藤千代美
  - (7)版組み 伊藤千代美 太田友子 (8)編集 小林健治
8. 出土遺物の注記、挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
  - (1)住居址→住 (2)竪穴状遺構→竪 (3)土坑→土 (4)ロームマウンド→ロ
9. 挿図の遺構縮尺は以下のとおりである。
  - (1)竪穴住居址・竪穴状遺構=1:60 (2)土坑=1:40
10. 挿図の遺物縮尺は以下を原則とする。
  - (1)土器=1:3、1:4 (2)石器=2:3
11. 遺構平面図中の一で示した数値は最寄りの床面から最深部までの比高を示している。単位はcmである。
12. 住居址の規模及び長軸方向の求め方、遺構の重複、建て替え、拡張の概念は阿久遺跡における方法を用いている。
13. 石礫の大きさの記載は土壌学的区分基準による。
14. 遺物の観察に際し、賛田明・奥野麦生の両氏には貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

# 目 次

第 I 章 発掘調査の概要	1
第 1 節 発掘調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の方法	1
第 3 節 調査の体制	1
第 4 節 調査の経緯	2
第 5 節 遺構・遺物の概要	3
第 II 章 遺跡の環境	6
第 1 節 遺跡の位置	6
第 2 節 遺跡の地理的環境	8
第 4 節 遺跡の層序	8
第 III 章 遺構と遺物	13
第 1 節 先土器時代の遺物	13
第 2 節 縄文時代の住居址	13
(1) 第 1 号住居址	13
(2) 2 号住居址	15
(3) 3 号住居址	16
(4) 4 号住居址	17
(5) 5 号住居址	20
(6) 6 号住居址	22
(7) 7 号住居址	24
(8) 8 号住居址	26
(9) 9 号住居址	27
(10) 10 号住居址	28
第 3 節 竪穴状遺構	29
第 4 節 土 坑	29
第 IV 章 ま と め	48

## 挿図目次

第1図	遺跡全体図(1/600)	5
第2図	周辺の遺跡(1/25,000)	6
第3図	地形と発掘区域及びグリッド設定図(1/4,000)	8
第4図	A地点層序(1/40)	9
第5図	B地点層序(1/40)	10
第6図	遺構分布図(1/400)	11・12
第7図	先土器時代の遺物(2/3)	13
第8図	1号住居址(1/60)	14
第9図	2号住居址(1/60)	15
第10図	3号住居址(1/60)	17
第11図	4号・10号住居址(1/60)	19
第12図	5号住居址(1/60)	21
第13図	6号住居址(1/60)	23
第14図	7号住居址(1/60)	25
第15図	8号住居址(1/60)	26
第16図	9号住居址(1/60)	27
第17図	1号竪穴状遺構(1/60)	29
第18図	土坑(1)(1/40)	35
第19図	土坑(2)(1/40)	36
第20図	土坑(3)(1/40)	37
第21図	出土土器(1)(1・5・6・7・8は1/4、2・3・4・9は1/3)	38
第22図	出土土器(2)(1/3)	39
第23図	出土土器(3)(1/3)	40
第24図	出土土器(4)(1/3)	41
第25図	出土土器(5)(1/3)	42
第26図	出土土器(6)(1/3)	43
第27図	出土石器(1)(2/3)	44
第28図	出土石器(2)(2/3)	45
第29図	出土石器(3)(2/3)	46
第30図	出土石器(4)(2/3)	47
第31図	住居址長軸方向	48
第32図	住居址の形態(1/120)	50

## 図 版 目 次

巻頭図版	広井出遺跡遠景・広井出遺跡全景	図版12-1	23号土坑(東から)
図版1	広井出遺跡全景	図版12-2	24号土坑(東から)
図版2-1	調査前	図版12-3	25号土坑(南東から)
図版2-2	調査後	図版12-4	26号土坑(南東から)
図版3-1	1号住居址(西から)	図版12-5	27号土坑(北東から)
図版3-2	1号住居址遺物出土状況(西から)	図版12-6	39号土坑(南から)
図版3-3	32号土坑(北西から)	図版12-7	45号土坑(北東から)
図版4-1	2号住居址(南西から)	図版12-8	52号土坑(南から)
図版4-2	2号住居址遺物出土状況(南西から)	図版13-1	53号土坑(南東から)
図版5-1	3号住居址(南西から)	図版13-2	54号土坑(南から)
図版5-2	3号住居址遺物出土状況①(南西から)	図版13-3	56号土坑(南東から)
図版5-3	3号住居址遺物出土状況②	図版13-4	57号土坑(南東から)
図版5-4	47号土坑(西から)	図版13-5	59号土坑(北から)
図版6-1	4号・10号住居址(南西から)	図版13-6	64号・65号土坑(南から)
図版6-2	4号住居址遺物出土状況(南西から)	図版13-7	66号土坑(南から)
図版6-3	4号住居炉址(南西から)	図版13-8	66号土坑底部検出状況(南から)
図版6-4	50号土坑(東から)	図版14-1	67号土坑(南東から)
図版7-1	5号住居址(南西から)	図版14-2	67号土坑底部検出状況(南東から)
図版7-2	5号住居址遺物出土状況(南西から)	図版14-3	69号土坑(北から)
図版7-3	5号住居炉址(南西から)	図版14-4	73号土坑(北東から)
図版7-4	49号土坑(東から)	図版14-5	遺跡より蓼科山を臨む
図版8-1	6号住居址(南西から)		
図版8-2	6号住居址遺物出土状況(南西から)		
図版8-3	75号土坑(南から)		
図版9-1	7号住居址(南から)		
図版9-2	8号住居址(北西から)		
図版10-1	8号住居址遺物出土状況(北西から)		
図版10-2	8号住居址盤状石皿周辺		
図版10-3	9号住居址(北から)		
図版10-4	9号住居址盤状石皿		
図版11-1	1号竪穴状遺構(南東から)		
図版11-2	1号土坑(東から)		
図版11-3	1号土坑土層断面(東から)		
図版11-4	2号土坑(南東から)		
図版11-5	22号土坑(東から)		

# 第 I 章 発掘調査の概要

## 第 1 節 調査に至る経緯

田畑経営の合理化を目的とする県営圃場整備事業が、長野県諏訪地方事務所により平成 6 年度に芹ヶ沢地区に計画された。事業範囲に広井出遺跡が位置することから、茅野市教育委員会文化財調査室により、平成 5 年 12 月 20 日から 22 日にかけて、試掘調査が実施された。平成 6 年 1 月 18 日、試掘調査の報告を受け、長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会の四者により保護協議がもたれた。協議結果を受け、平成 6 年 2 月 14 日付 5 教文第 7-12-54 号「県営圃場整備事業茅野市芹ヶ沢地区にかかる埋蔵文化財の保護について(通知)」が長野県教育委員会から提出された。それによると、広井出遺跡の保護については、発掘調査による記録保存とし、発掘調査は茅野市教育委員会に委託する。調査にかかる経費については事業主体者が負担する。ただし、農家負担分については、文化財保護側が負担するというものであった。発掘調査計画書では、4,200㎡以上を発掘調査するものとし、その事業費総額は、13,700,000円(農政部局負担 88%12,056,000円、文化財保護側負担 12% 1,644,000円)であった。この計画を受けて、茅野市教育委員会では平成 6 年度文化財関係補助事業計画を上げ事業に備えた。平成 6 年 6 月 22 日をもって「平成 6 年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区埋蔵文化財発掘業務委託」の契約が締結され、同年 7 月 26 日から現地発掘調査に着手した。

## 第 2 節 調査の方法

- (1) 表土剥ぎ作業 本調査に先立ち、試掘調査をトレンチ法によって実施した。トレンチは重機により台地の走向に対し概ね直角に入れている。この結果、自然地形及び遺跡の遺存状況と範囲の概要が把握された。本調査では試掘調査の結果に基づき、調査範囲の全部の表土を重機により除去した。
- (2) グリッド設定 発掘区にグリッドを設定し、遺構、遺物の記録、遺物取上げの基準とした。グリッドの設定は国家座標第 VIII 系を用い、 $x = 2,357.000$ (北緯 $36^{\circ} 1' 22''$ )  $y = -2,3840.000$ (東経 $138^{\circ} 14' 7''$ )を基準軸として、10m 四方の大グリッドの中に 2m 四方の小グリッドを配置した。大グリッドの名称は南から北に向かって 1・2・3～、西から東に向かって A・B・C～とした。小グリッドの名称は南から北に向かって 1・2・3・4・5、西から東に向かって a・b・c・d・e とした。(例 A 1 a 1 第 1 図参照)

## 第 3 節 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会文化財調査室が実施した。組織は以下のとおりである。

調査主体者	両角昭二 (教育長)			
事務局	宮下安雄 (教育次長)			
文化財調査室	両角英行 (室長)	鵜飼幸雄 (係長)	守矢昌文	小林深志
	大谷勝己	功刀 司	小池岳史	百瀬一郎
	小林健治	柳川英司	大月三千代	
調査担当	小林健治			
調査補助員	赤堀彰子	伊藤千代美	武居八千代	

発掘調査・整理作業参加者

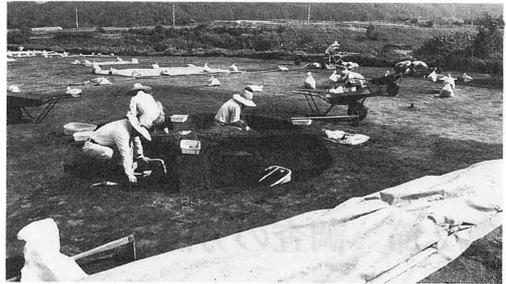
伊藤京子 伊藤さゆり 伊東みさを 太田友子 金子清春 北原きよゑ 白簾スエ子  
関 秀樹 関島敏夫 立木利治 立岩貴江子 長田 真 花岡照友 保科貞一  
保科常夫 保科ひろ子 保科まさる 森 圭子 柳平あい 柳平いつ子 柳平年子  
吉田 勇 渡辺久章

## 第4節 調査の経緯

- 7月26日 表土剥ぎ作業、遺構検出作業を開始。  
8月2日 表土剥ぎ作業終了。  
8月10日 基本層序の観察と記録。  
8月23日 グリッド杭の設置。土坑の発掘を開始。  
8月26日 1号住居址発掘開始。  
8月31日 北山小学校6年生44名が来跡し、遺構検出・住居址発掘作業を体験。(八ヶ岳総合博物館主催体験学習第1回目)  
9月1日 2号住居址発掘開始。  
9月2日 湖東小学校6年生26名が来跡し、遺構検出・住居址発掘作業を体験。(八ヶ岳総合博物館主催体験学習第2回目)  
9月6日 3号住居址発掘開始。  
9月19日 4・5号住居址発掘開始。これより発掘を住居址優先とする。  
10月4日 6・7号住居址、竪穴状遺構の発掘を開始。  
10月15日 8号住居址発掘開始。  
10月18日 9号住居址発掘開始。  
10月25日 土坑の発掘を再開。  
10月31日 4号住居址よりナイフ型石器が確認されたため、周辺の深掘作業を開始する。  
11月7日 航空写真測量の準備。  
11月8日 航空写真測量を実施、天候に恵まれ無事終了。  
11月10日 6号住居址の東側崖部を発掘。  
11月11日 1号住居址の床面を再度精査。  
11月16日 航空写真測量の補備測量を実施。  
11月21日 遺構平面図の確認。すべての発掘機材を搬出し、現地調査を終了する。



遺構検出作業



遺構発掘作業



体験学習会



調査を終えて

## 第5節 遺構・遺物の概要

広井出遺跡の調査面積は、4825㎡(本調査部にかからない試掘部を含む)である。この範囲より、下記の遺構と遺物が検出された。第1図遺跡全体図(1/600)ではこの調査の対象としたものをすべて示している。調査により遺構とみなされないと判断したものを省き、遺構のみを示したものが第6図遺構分布図(1/400)である。

### (1) 遺構

①**住居址** 10軒の竪穴住居址が検出されている。これらの帰属時期は出土土器の様相から1～7号住居址の7軒を縄文時代前期前葉、8・9号住居址の2軒を縄文時代前期初頭とした。10号住居址からは時期決定資料を得られていないが、4号住居址との重複関係やその他の諸様相から、これも縄文時代前期初頭と判断した。4号住居址は建て替えられていると判断され、旧住居址・新住居址とに分けた。また、6号住居址は拡張されていると考えられ、a住居址・b住居址とに分けた。

②**竪穴状遺構** 直径2.5～2.6mの円形を呈する遺構が1基検出されている。調査当初は小型の住居址ではないかと考えていたが、居住遺構とする根拠が得られなかったため、この遺構番号を付した。これからも縄文時代前期前葉の土器が出土している。

③**土坑** 土坑は75番まで番号を付している。以下のものがある。

a 自然による攪乱とみられるもの…植物の混入、小動物の潜入等が考えられるものである。シミ状のものもこれに含めた。29・34・38・40・55・68・70・72号土坑の8基である。

b 人為的な攪乱とみられるもの…それ自体の構築を目的としないとみられるものである。これに属すると思われるものは基本層序確認B地点で観察された攪乱層の②層(第2章第4節参照)を覆土とするものである。30・31・35・36・37・41・42・43・44号土坑の9基である。

c 構築が近・現代とみられるもの…覆土の観察から2タイプに分かれる。一つは覆土が大量のロームブロックを含む暗褐色土の単一層のものである。覆土内から農業用石灰が出ることもあり、掘り方には鋭利な痕がみられる。平面形は円形、楕円形、隅丸長方形の3つに分けられる。円形の規模は径70～90cm程、楕円形の規模は長径90～110cm・短径60～115cm程、隅丸長方形の規模は長軸100～130cm・短軸70～85cm程である。これらはF2・G2グリッドを中心とし、集中的に検出されている。基本層序確認A地点では、同様なものが耕作土面から落ち込んでいることが観察されており、近・現代のものと判断した。もう一つは耕作土を主たる覆土とするものである。両方とも住居址等の遺構に比べ、はるかに検出状況が明瞭である。前者は、3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・28号土坑の20基、後者は51・58・60・61・63・71・74号土坑の7基である。

d 炭焼穴とみられるもの…遺跡内に散炭用の穴を掘ったと地元の方より証言を得ており、これとみられるものが検出されている。これもcの土坑と同様に近・現代の所産とみられる。46・62号土坑の2基である。

e 住居址に付属するもの…土坑番号を付したものの、その住居址の施設ではないかとみられる土坑がある。1号住居址の32号土坑・3号住居址の47号土坑・4号旧住居址の50号土坑・5号住居址の49号土坑・6号の住居址の75号土坑の5基である。住居址の施設と考える理由については、第IV章で一括して触れることとし、各住居址の記述においては詳述していない。その他に、住居址と重複する1号住居址の33号土坑・3号住居址の48号土坑の2基は土坑とする根拠がない。

f 独立して機能していたとみられるもの…上記のa・b・c・d・eを除いたもの。この土坑は、1・

2・22・23・24・25・26・27・39・45・52・53・54・56・57・59・64・65・66・67・69・73号土坑の22基である。これは即ち、遺構と認識される土坑のうち、近・現代のものを除いた、独立して機能していたとみられるものである。

これらのうち、第Ⅲ章第4節の土坑の項では、fの22基の土坑を対象として報告する。また、遺構分布図にはfのみを残し示した。

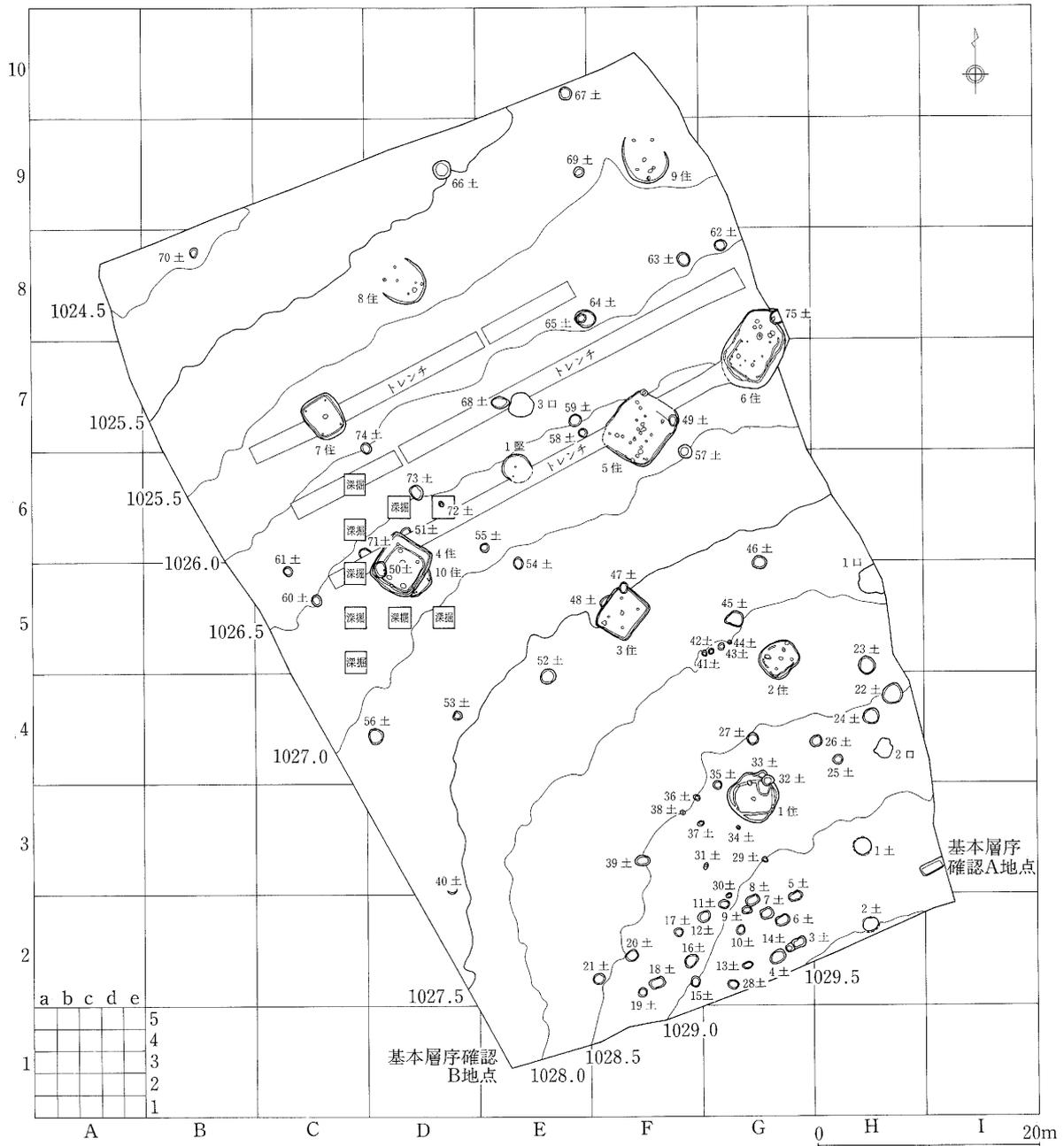
④ロームマウンド 3基が検出されている。倒木痕と判断し遺構分布図からは削除した。

## (2) 遺物

①土器 土器は、縄文時代早期、前期、後期のものが検出されている。この中のほとんどは住居址時期決定の左証となった縄文時代前期前半の資料である。この時期のものは大きく2時期に区分が想定可能であり、前出とみられるものを前期初頭、後出とみられるものを前期前葉として、帰属時期を示した。前期は他に末葉のものが少量検出されている。早期のものには押型文、貝殻沈線文、絡条体圧痕文、条痕文土器がみられ、後期は前半のものとみられる。いずれも破片が少量検出されている。

②石器 石器は、ナイフ形石器、有樋尖頭器、石鏃、石匙、打製石斧、磨石、凹石、盤状石皿、石錐、スクレイパー、ピエスエスキーユ、滑石製品、使用痕のある剥片、加工痕のある剥片、剥片・碎片、石核、原石等が検出されている。先土器時代のナイフ形石器と有樋尖頭器は共に住居址の発掘に伴い検出されたものである。今回の調査では先土器時代とみられる石器ブロック等の検出はない。剥片、碎片等に当該期のものが含まれている可能性があるが、石器のほとんどは縄文時代前期前半に属するものとみられる。石材は黒耀石が多く、コンテナに1箱ある。今回の報告には石器の器種分類が間に合わず、分析報告するに至っていない。その為、各遺構の項目で記述しているものは、資料化することができたものだけであり、検出されたすべてではない。資料化は石鏃、石錐、石匙の大部分を行ったが、今後、破損品等が追加される可能性がある。改めて報告の機会を期したい。

③陶磁器 近世に属するとみられるものが少量検出されているが、資料化できていない。この時期の遺構とみられるものは検出されていないが、fの土坑22基以外にはこれに属するものもあるかもしれない。



第1図 遺跡全体図 (1/600)

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

広井出遺跡（遺跡番号236）は、東経138度14分7秒、北緯36度1分22秒に位置する。ここは八ヶ岳西麓にあたり、遺跡は山麓の先端に近い尾根状台地に展開している。茅野駅から北東へ8km程の場所であり、茅野市湖東金山の集落に隣接する。遺跡の中程が茅野市の北山地区と湖東地区の境界となっている。遺跡の場所の字名は「裏尾根」「金山」「広井出」とあり、「広井出」が遺跡名とされている。



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

50長峰遺跡・51聖石遺跡・53神ノ木遺跡・54上ッ原遺跡・55下ッ原遺跡・56下島遺跡・233矢倉田遺跡・  
234山之神沢遺跡・235北山菖蒲沢A遺跡・236広井出遺跡・237北山菖蒲沢B遺跡

## 第2節 遺跡の地理的環境

八ヶ岳西南麓の裾野は、大泉山と小泉山の山間を流れる柳川の溪谷によって南北に区分される。大泉山・小泉山・柳川の以北は北八ヶ岳の火山活動によって形成された地域である。標高約900～1,200mの裾野部は小河川が浸食し、長く平坦な台地が東—西・南東—北西へと放射状に広がる。台地は先端に向かうにしたがって湧水や小溪流の浸食により、次第に複雑に分岐し、上川・渋川の形成する沖積地へと達する。この地域は北山浦と呼ばれ、豊平・米沢・湖東・北山・泉野の集落が立地している。縄文時代の遺跡が濃密に分布する地域であり、広井出遺跡もその一つである。

広井出遺跡は八ヶ岳西麓の先端に近い尾根状台地にある。山麓台地は本遺跡の北、直線距離にして約600mで渋川の形成する溪谷に達し、八ヶ岳西麓の端部となる。遺跡の立地する台地は平坦部の幅が約50m、標高1,042m付近より派生し1,010m付近の末端まで、約600mに亘って南東から北西へと伸びている。遺跡は標高1,026～1,030mの場所にあり、現在は畑地として利用されている。台地の西側は緩斜面であるのに対し、東側は開析が進み急峻な崖となり、崖下の谷部との比高差が約4～5mある。

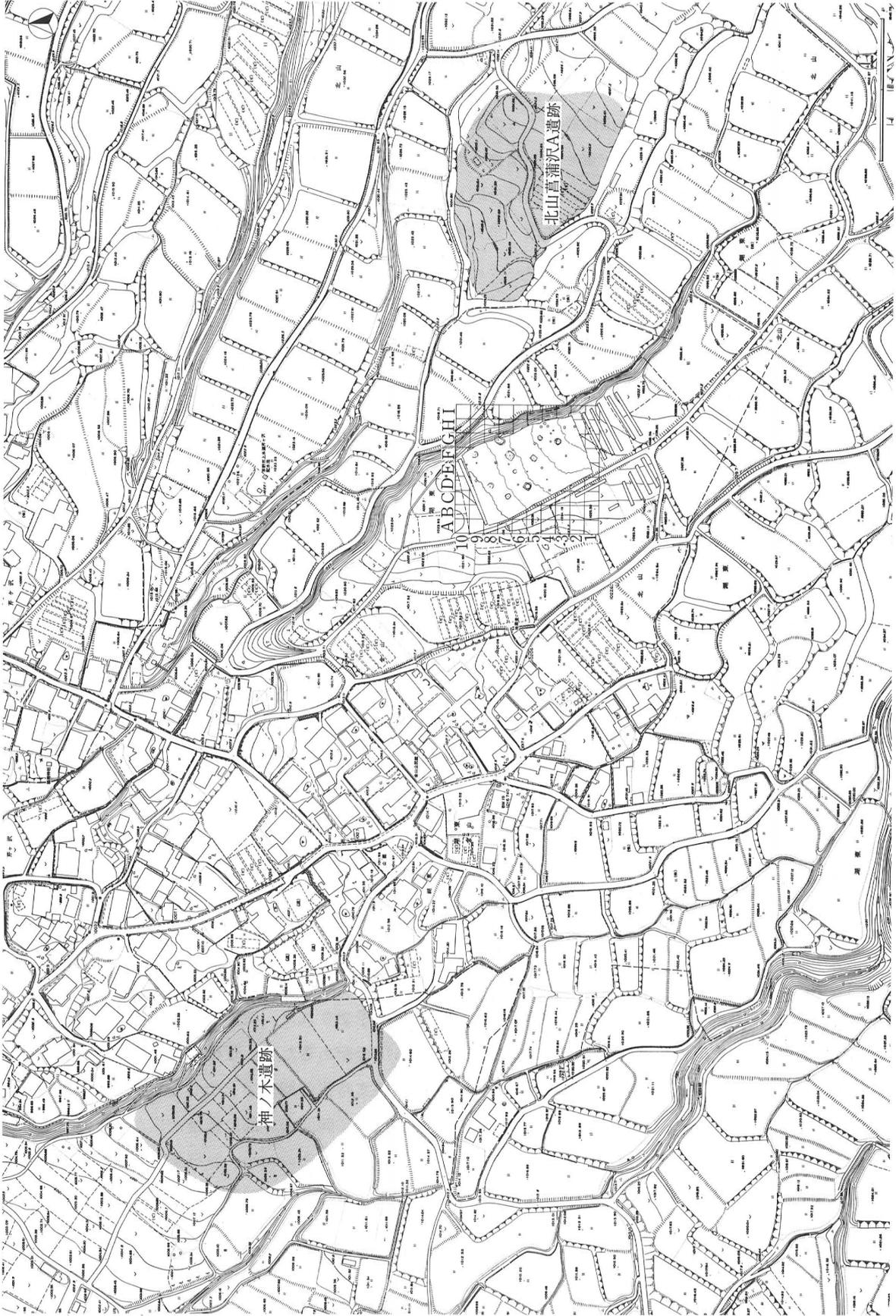
遺跡の周辺には「広井出」とされる場所が幾つかあり、その字名の示すように、周辺には用水となる湧水、小溪流がある。遺跡を東へ下り130m程進んだ谷部には、現在の芹ヶ沢上水道水源地があり、この付近を潤している。

本遺跡から西南西へ450m、浅い谷を二つ隔て湖東金山の集落を挟み神ノ木遺跡がある。本遺跡との関連が最も注目される遺跡である。また東へ200m、谷を一つ隔て隣接する台地にある北山菖蒲沢A遺跡が最寄りの遺跡となる。

## 第3節 周辺の遺跡

(1)神ノ木遺跡 (53) 昭和27年に調査、竪穴住居址1軒と土器・石器が発掘されている。これが茅野市域における縄文前期の最初の学術的発掘である。昭和31年、この時の資料をもとに縄文時代前期前葉の形式として神ノ木式土器が設定された。昭和37年、住居址を確認するが、完掘されていない。神ノ木遺跡は学術的にまた標識遺跡として極めて重要な遺跡と考えられてきたものの、遺跡規模等については不明であった。平成6年5月、県営圃場整備事業芹ヶ沢地区の計画に伴い、茅野市教育委員会により試掘調査が実施される。遺跡範囲のなかで圃場整備事業計画にかかわる部分に、33本のトレンチが入れられた。その結果、圃場計画部分が神ノ木遺跡の東端より中央部にむけてかかっていると判明し、多数の遺構の存在が確認された。これら大部分の時期は、出土遺物から縄文時代前期前半のものであると予想された。遺構の数については、多数の重複が予想される部分と遺物包含層で掘り下げを中止している部分があるため、正確に把握されなかったが、少なくとも30軒以上の住居址が試掘で確認され、神ノ木遺跡が縄文時代前期前半を中心とする大遺跡となることは間違いない。また、試掘調査の結果、平成6年度圃場整備事業範囲の一部に遺跡が広がると懸念されたため、立会い調査を実施したところ、竪穴住居址1軒が検出された。そのため、試掘調査と並行し、緊急発掘調査を行った。調査の結果、この住居址は集落の東端に位置する縄文時代前期前半のものであった。住居址の遺構番号は、昭和27年調査の住居址を1号住居址と位置づけ、2号住居址とした。2号住居址は圃場整備事業により、上面を10cm程カットされているが、その下は埋め戻され保存されている。神ノ木遺跡は広井出遺跡と指呼の間にあり、その存続時期から最も関係が注目される遺跡である。

(2)上ッ原遺跡 (54) 神ノ木遺跡の西に連続する遺跡である。縄文中期中葉から後半にかけての土器片と石



第3図 地形と発掘区域及びグリッド設定図 (1/4,000)

鍬・打製石斧・石匙が表面採集されている。

(3)下ッ原遺跡 (55) 上ッ原遺跡の西に連続する遺跡である。縄文中期後半の土器片と石鍬・打製石斧・石匙・石錐が表面採集されている。

(4)下島遺跡 (56) 下ッ原遺跡の西に連続し、渋川溪谷に臨む台地舌状部に位置する。昭和25年、縄文時代前期末諸磯C式併行の土器及び弥生時代の竪穴住居址と弥生土器が発見されている。後に、出土した縄文土器は下島式土器として形式設定されている。昭和40年代に材木置場がつくられ遺跡の大部分は失われている。

(5)矢倉田遺跡 (233) 平成5年県営圃場整備事業に伴い調査。縄文時代前期末以降と考えられる建物址1基、土坑8基が検出され、ある時期に生産域とされたものである。

(6)北山菖蒲沢A遺跡 (235) 平成6年、県営圃場整備事業の計画に伴い試掘調査。竪穴住居址5軒（内2軒は不確定）、土坑45基が検出されている。住居址・土坑等から出土した土器は縄文時代前期末から前期最終末のものともみられる。その他、縄文時代早期押型文土器、平安時代灰釉陶器も発見されており、該期の遺構の存在も予想されている。広井出遺跡と谷一つ隔てて最寄りの位置にある。

(7)北山菖蒲沢B遺跡 (237) 平成6年、県営圃場整備事業の計画に伴い試掘調査。先土器時代遺物集中1基、縄文時代の住居址5軒（中期初頭1、中期末葉1、時期不詳3）、平安時代の住居址1軒、土坑約50基が検出されている。遺物は、先土器時代の石核と剥片、縄文時代の前期末葉・中期初頭・中期末葉の土器、石鍬、黒耀石剥片、平安時代の黒色土器片が出土している。

## 第4節 遺跡の層序

本遺跡の層序は、耕作土の直下にローム漸移層もしくはローム層が位置するのがほとんどである。基本層序の記録は、土層堆積の最も厚い調査区の南側隅の東壁（第1図A地点）と西壁（第1図B地点）の2箇所を対象とした。なお、耕作土以下の攪乱は調査区の北側で比較的少なく、南側が多い。そのため重機による表土剥ぎ作業は、北側をローム漸移層上部から中部にかけて行い、南側では大部分をローム漸移層下部からローム層上部まで行っている。

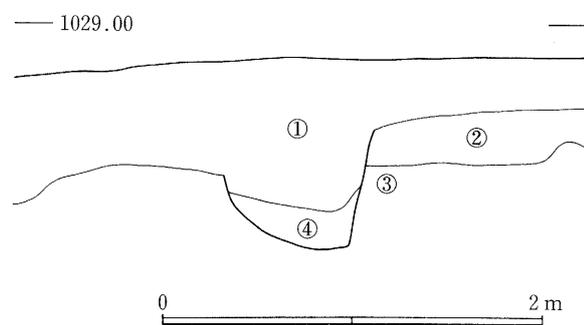
### (1)A地点

①黒褐色土 耕作土。粒子は細かく、締まりと粘性は共にない。ローム粒子、ロームブロックを僅かに含む。

②褐色土 ローム漸移層。①に比してやや粒子粗い。締まりは弱く、粘性はない。ローム粒子、ロームブロックが斑状に混入する。

③黄褐色土 ローム層。粒子は細かく、締まりがあり、粘性はない。

④暗褐色土 締まりがあり、粘性はない。ロームブロックを多量に含む。土坑番号を付したもので、構築時期を近・現代（第1章第5節(1)③c参照）と判断したものは、本層を覆土とするものである。構築時期の判断は耕作土層面からの落ち込みが観察されたことによる。



第4図 A地点層序 (1/40)

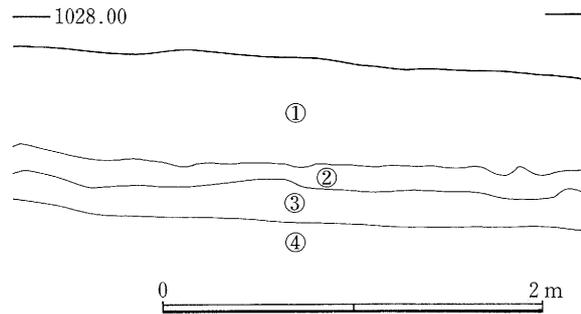
(2)B地点

①黒褐色土 耕作土。

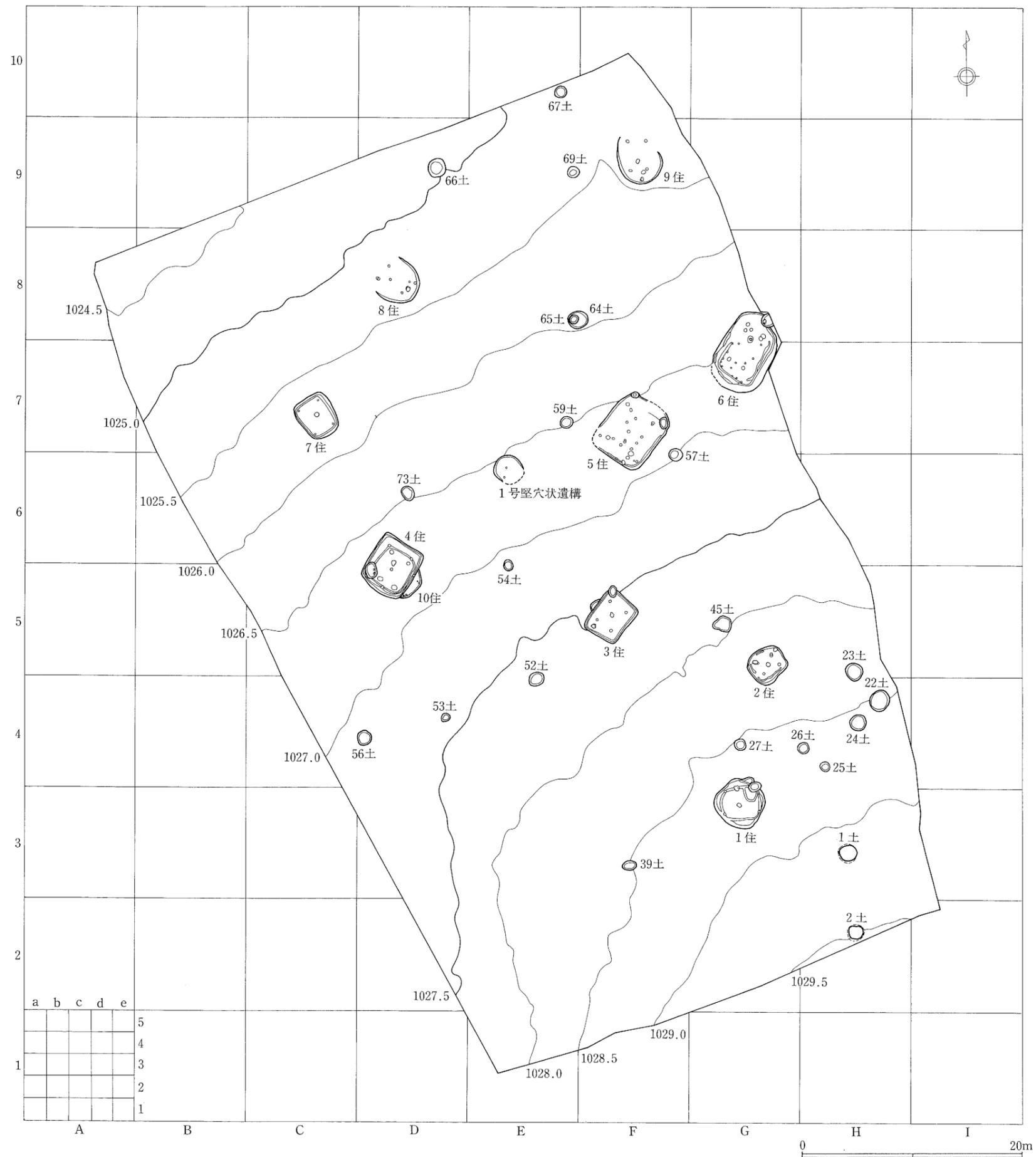
②黒色土 粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性は乏しい。ローム粒子を僅かに含む。下層を削平している。本層は調査区の南側を中心に部分的に観察された。耕作土と同様に攪乱層と考えられる。土坑番号を付したものの中で人為的な攪乱による成因（第I章第5節(1)③b参照）と判断したものは、本層を覆土とするものである。

③褐色土 ローム漸移層。

④黄褐色土 ローム層。



第5図 B地点層序 (1/40)



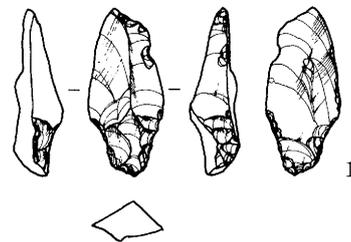
第6図 遺構分布図 (1/400)

### 第Ⅲ章 遺構と遺物

#### 第1節 先土器時代の遺物

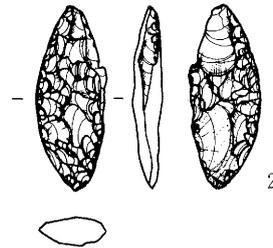
##### (1) ナイフ形石器 (第7図1)

4号住居址覆土内より出土したものである。長さ3.3cm、幅1.4cm、厚さ1.0cmを測る。縦長剥片を素材とし、基部と先端に調整が施される。石材は黒耀石である。これが検出されたことにより4号住居址の周囲9箇所小グリッド(第1図参照)を設定し深掘りしたが、ブロック等は検出されなかった。



##### (2) 有樋尖頭器 (第7図2)

9号住居址覆土上面から検出されたものである。長さ3.6cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。両面加工され、先端に樋状剥離を有する。石材は黒耀石である。



第7図 先土器時代の遺物

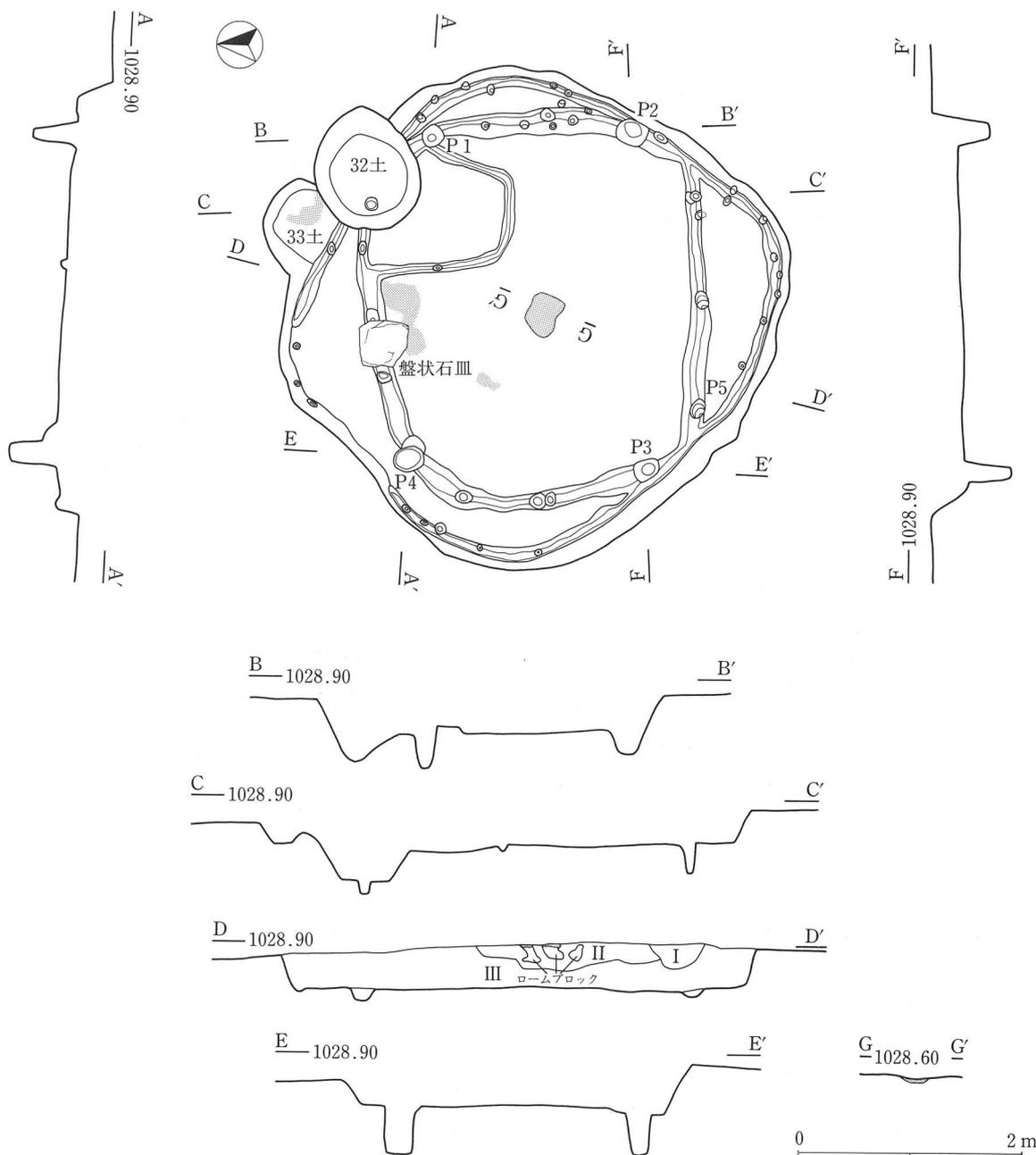
#### 第2節 縄文時代の住居址

##### (1) 1号住居址

###### 遺構 (第8図・図版3)

G3グリッドを中心に位置する。遺存状況は良好である。北東部には32・33号土坑がある。32号土坑は検出状況から本址の施設と考えられるものである。掘り方はしっかりしている。33号土坑は焼土を伴い掘り方は不整、不鮮明である。土層観察の結果、覆土II層に類似するものであり、本址廃棄後に生じたものとみられる。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸434cm、短軸428cmを測る。長軸方向はN-89°-Eを指す。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁23cm、東壁26cm、南壁28cm、西壁23cmを測る。周溝が北壁の一部を除き壁下を巡る。これは幅10cm、深さ4cm程を測り、やや不鮮明な掘り込みである。この内側に隅丸長方形を呈する間仕切状の溝があり、主柱穴間を結ぶ。これは長軸357cm、短軸310cm、幅17~20cm、深さ6~9cmを測り、しっかり掘り込まれている。この北東部分には台形状の溝が分岐して内部に張り出している。間仕切状の溝の外側の床は内側よりやや高く内部に向けて緩やかに傾斜する。堅緻であるがやや凹凸がある。内側の床はほぼ水平で、堅緻であり凹凸は少ない。主柱穴はP1~P4の4本と推定される。主柱穴と同等の規模であるP5も間仕切状の溝から検出されている。床面からの深さはP1が40cm、P2が28cm、P3が43cm、P4が42cm、P5が43cmを測る。この他に周溝と間仕切状の溝にある小ピットは、ほとんどが植物等の侵入と観察されたが、いくつか見過ごせないものがあったため、確実に攪乱と思われるものを除いて示した。炉は地床炉で中央部にある。床面に



第8図 1号住居址 (1/60)

盤状石皿が据えられている。盤状石皿の近辺と炉の北西部に焼痕がみられる。

覆土は3層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりが弱く、粘性は乏しい。炭化物(3mm)・ローム粒子を僅かに含む。本層からは陶器片が出土しており、後世の攪乱とみられる。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、炭化物(3~8mm)を僅かに含む。本層中央部、上面には焼土があり、焼土の下にはロームブロックの著しい混入箇所がみられた。I層に切られている。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、炭化物(2~14mm)・ロームブロック(2~8mm)を疎らに含む。

本址は平面プランと間仕切状の溝の長軸方向が角度にして50°程ずれており、2軒の住居址がすっぽりと重複した結果のようにもみえた。しかし、支柱穴の組合せが1セットしか検出されなかったこと(完掘後に床面下を10cm程掘り下げたが検出は1セットのみである)、覆土、土層断面に切り合いが観察されなかった

こと、貼床が検出されなかったことから、1軒の住居址の形態と判断したものである。なお、内側の溝の北東部分にみられた台形状の溝も性格は不明であるが、本址に伴うものと考えられる。

**遺物** (第21・22・27・28図)

土器の出土は僅かである。3点(第21図1・第22図1・2)を示した。第21図1は小型の丸底土器で半完形品である。繊維を含まない。この他に無文の繊維土器が1点出土している。第22図1・2は32号土坑出土のものである。1は繊維を含まない。2は繊維を含み、縄文が羽状構成に施文される。

石器は3点を示した。第27図1の石鏃、第28図7・8の石匙である。3点とも黒曜石製である。

**時期**

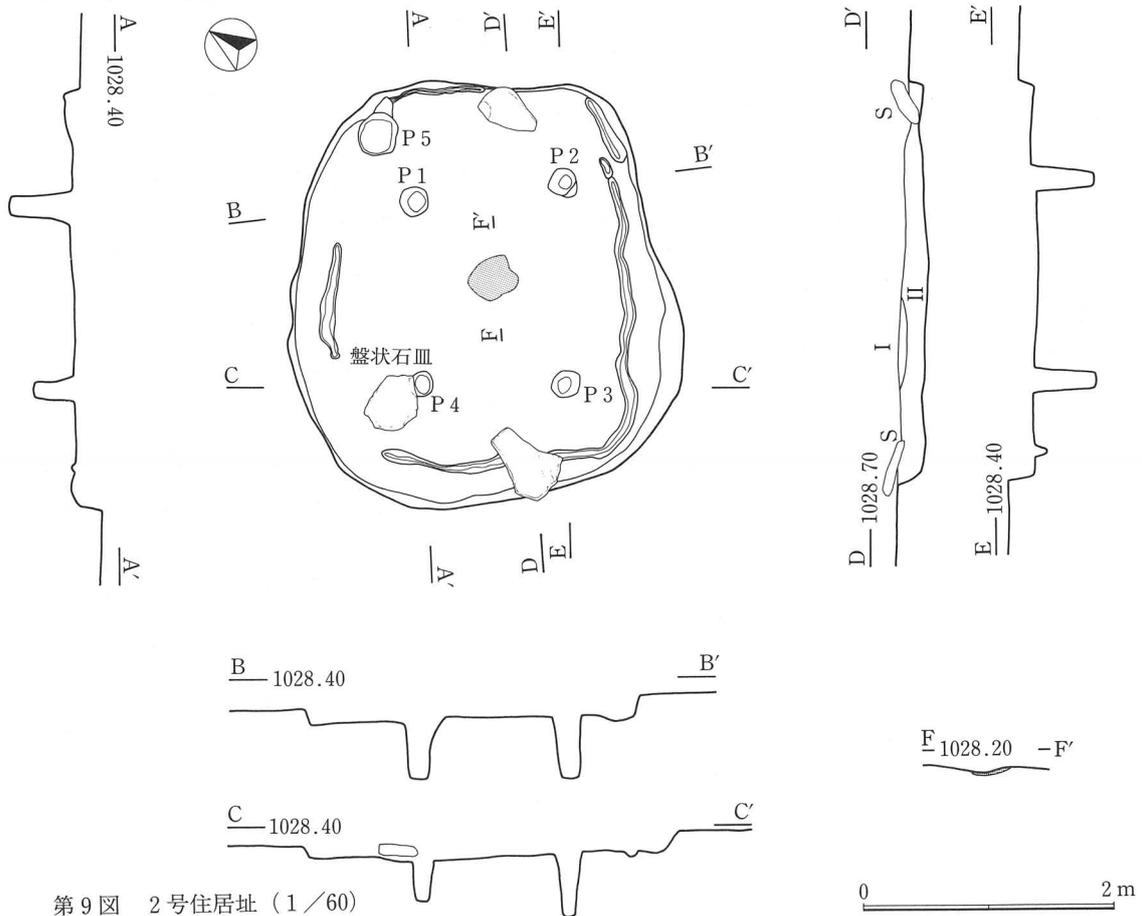
縄文時代前期前葉とみられる。

(2) 2号住居址

**遺構** (第9図・図版4)

G5グリッドを中心に位置する。遺存状況は良好である。

平面形は東壁・西壁がやや張る隅丸長方形を呈し、長軸325cm、短軸291cmを測る。長軸方向はN-58°-Eを指す。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁11cm、東壁16cm、南壁22cm、西壁12cmを測る。床面はかなり凹凸あるが堅緻である。床面は植物等による攪乱が多く、凹凸はこの結果と考えられる。周溝は不鮮明なものが途切れがちに検出され、幅5~12cm、深さ2~3cmを測る。東壁部・南壁部・西壁部の周溝は壁下よりやや内部に寄った位置で検出されている。支柱穴はP1~P4の4本と考えられる。その他にピットは北隅にP5が検



第9図 2号住居址 (1/60)

出されている。床面からの深さはP1が48cm、P2が50cm、P3が52cm、P4が33cm、P5が19cmを測る。炉は地床炉で中央部にある。床面には盤状石皿が据えられている。この他に、北壁と南壁に寄り掛かる様に盤状の礫が出土している。

覆土は2層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子・炭化物（2～3mm）を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック（2～10mm）を疎らに、炭化物（2～9mm）を僅かに含む。

#### 遺物（第21・22・27・28図）

土器の出土は少なく、小破片のみである。6点（第21図2・第22図3～7）を示した。第22図3～6は無繊維である。6には円形の刺突文がみられる。7は繊維土器で縄文が施文される。第21図2の土製品は土偶の腕部ともみえる。この他には、焼成粘土かと思える不整形な塊が出土している。

石器は3点示した。第27図2の石鏃、第28図1の石錐、第28図9の石匙である。いずれも黒耀石製である。

#### 時期

縄文時代前期前葉とみられる。

### (3) 3号住居址

#### 遺構（第10図・図版5）

F5グリッドに位置する。遺存状況は良好である。北隅にある47号土坑は検出状況から本址の施設と考えられるものである。西壁にある48号土坑も新旧関係は認めらず、本址の張り出し部とみられる。

平面形は長方形を呈し、長軸414cm、短軸336cmを測る。長軸方向はN-37°-Eを指す。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁14cm、東壁29cm、南壁25cm、西壁14cmを測る。床面は僅かに凹凸があるが堅緻である。周溝が壁下を全周する。しっかりと掘り込まれ、幅10～14cm、深さ3～5cmを測る。主柱穴はP1～P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が39cm、P2が46cm、P3が53cm、P4が30cmを測る。周溝内からP5～P15の11本のしっかりとしたピットが検出されている。床面からの深さはP5が25cm、P6が30cm、P7が34cm、P8が27cm、P9が33cm、P10が18cm、P11が22cm、P12が30cm、P13が30cm、P14が30cm、P15が28cmを測る。P5とP11、P6とP9、P7とP14、P8とP13は住居址を挟んで対峙する関係にあり、主柱穴間を結んだ直線の延長上に近い位置に設けられている。炉は地床炉で中央部にある。床面には盤状石皿が据えられている。

覆土は3層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子を疎らに、炭化物（2mm）を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック（2～15mm）・炭化物（2～4mm）を疎らに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子を多く、ロームブロック（2～20mm）・炭化物（4mm）を疎らに含む。

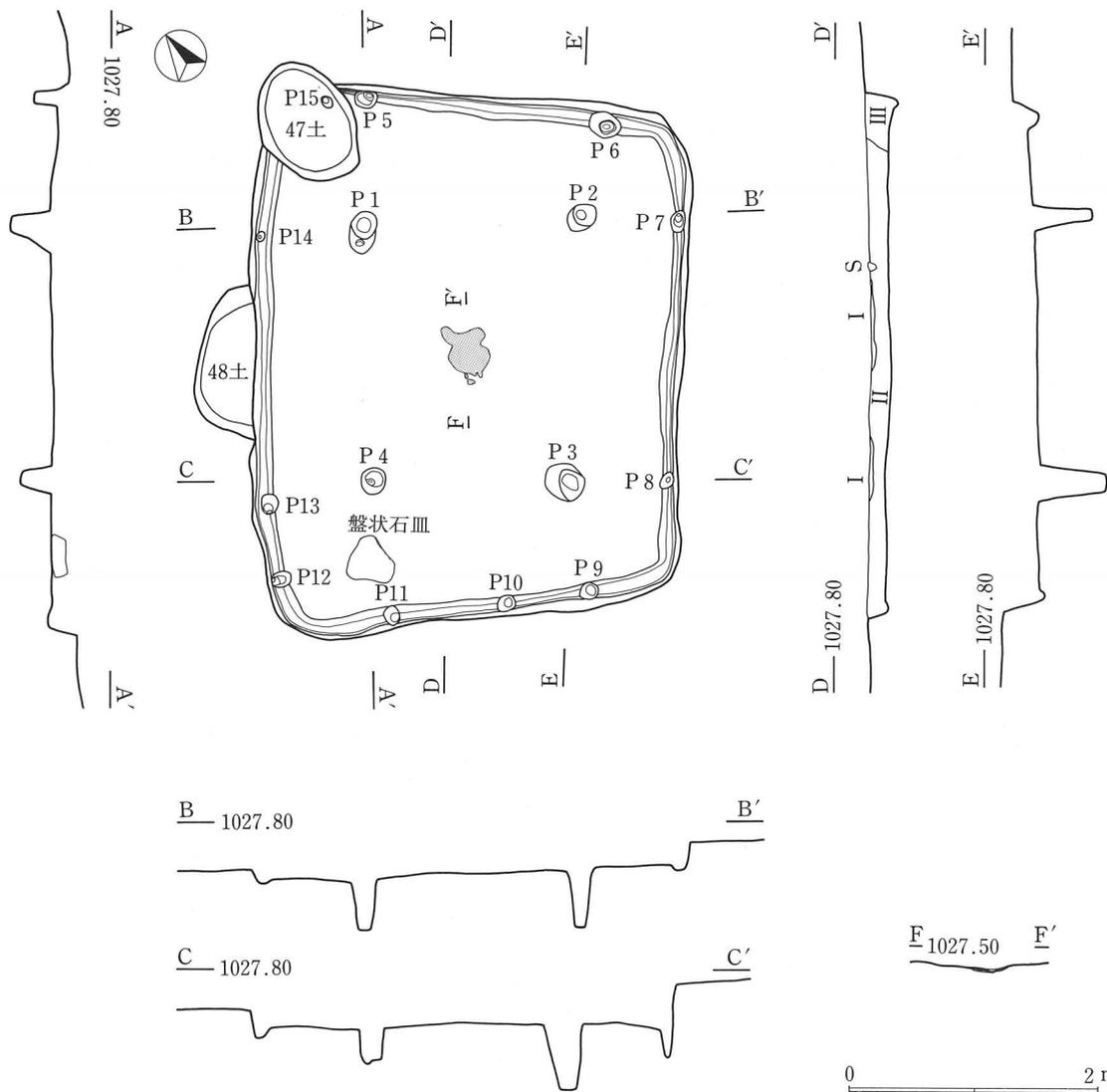
#### 遺物（第21・22・27・30図）

土器は10点（第21図3・4、第22図8～15）を示した。第21図3はミニチュア土器、4は土器尖底部で共に無繊維である。第22図8～12も無繊維である。12は口縁部に垂紐が貼付される。13～15は繊維土器で縄文が施文される。13・14の縄文は羽状に構成される。

石器は2点を示した。第27図3の石鏃、第30図1のスクレイパーである。2点とも黒耀石製である。

#### 時期

縄文前期前葉とみられる。



第10図 3号住居址 (1/60)

(4) 4号住居址

遺構 (第11図・図版6)

D 5・6 グリッドに位置する。本址は一回建て替えられていると考えられるので、旧住居址と新住居址とに分けて報告する。遺存状況は周辺に少し攪乱を受けているが概ね良好である。試掘トレンチによって新住居址の北壁から西壁にかけての上部を一部切られている。東で10号住居址と重複し、本址の方が新しい。北壁の一部に51号土坑があり新住居址覆土を切っている。内部に50号土坑があるが、検出状況から旧住居址の施設と考えられるものである。

旧住居址 新住居址の内側より検出された溝が、建て替え前の周溝と考えられることから、平面形はやや南北に長い隅丸方形とみられ、長軸363cm、短軸340cmを測る。長軸方向はN-33°-Eを指す。周溝はしっかりと掘り込まれ全周し、幅7~14cm、深さ2~10cmを測る。床面は凹凸なく堅緻である。支柱穴はP1~P4の4本と考えられる。床面からの深さは、P1が58cm、P2が58cm、P3が63cm、P4が57cmを測る。中央部に僅かな焼痕 (F1) があり、本址の地床炉の痕跡とみられる。これら本址の周溝、柱穴、炉は新住居址の薄い貼床下から検出されたものである。本址の西隅にある50号土坑は旧住居址の施設とみられるものである。覆土上面には僅かであるが貼床部が認められた。新住居構築時には埋められたものとみられる。このことは、

新住居址の主柱穴とみられるP8は坑底からの深さが4cm程しかなく、埋め戻されなければ柱穴としての機能を果たせないことから裏付けされる。

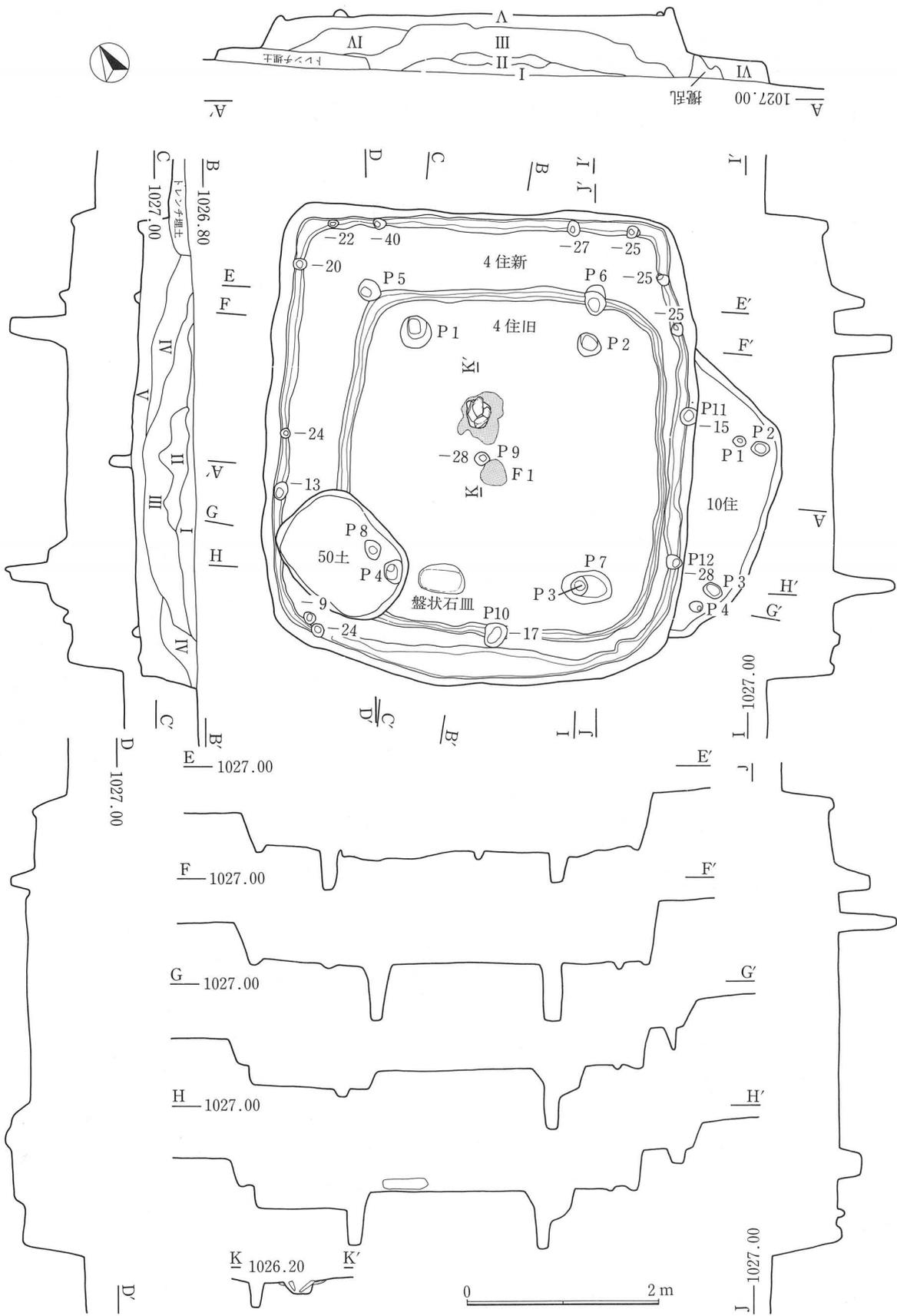
新住居址 平面形は旧住居址と同様にやや南北に長い隅丸方形を呈し、長軸481cm、短軸419cmを測る。長軸方向はN-30°-Eを指す。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁49cm、東壁56cm、南壁52cm、西壁39cmを測る。壁は上部1/4程がローム漸移層中、この下部がローム層中のものである。床面は凹凸なく堅緻であり、内部に向けて緩く傾斜する。床面には部分的な貼床が施されており、この下から旧住居址の施設は検出されている。貼床はごく薄いロームによるもので地山のロームとほとんど大差ない。周溝が壁下を全周する。これは幅8~18cm、深さ3~9cmにしっかりと掘り込まれているが、南壁部においては幅広となり床面と段差の少ない不明瞭な状態となっている。また、南壁部を除いて周溝内からは間隔をおいて小ピットが検出されており、この部分が出入口部であった結果とも考えられる。主柱穴はP5~P8の4本と考えられる。床面からの深さは、P5が44cm、P6が32cm、P7が25cm、P8が26cmを測り、旧住居址のもの比べて掘り込みが浅い。P9・P10は新旧どちらに属するものか判然としない。また周溝内のP11・P12は10号住居址の施設とも考えられる。炉は中央部に小型の石囲炉があり周囲が焼けている。偏平な安山岩を4辺に斜状に配して構築されている。床面には盤状石皿が据えられている。

覆土は6層に分層された。V層までが本址の覆土であり、VI層は10号住居址の覆土であるが、一括して報告する。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~3mm)を疎らに、炭化物(3mm)を僅かに含む。II層は褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~4mm)を僅かに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子・炭化物(1~7mm)を疎らに、ロームブロック(2~3mm)を僅かに含む。IV層は暗褐色土でIII層に比して土色やや明るく、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~7mm)・炭化物(2~12mm)を疎らに含む。V層は暗黄褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性はある。ローム粒子・ロームブロック(2~30mm)を多く、炭化物(3~4mm)を僅かに含む。VI層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~4mm)を疎らに、炭化物(3mm)・パミス(12mm)を僅かに含む。セクション面ではV層とVI層の層界は攪乱されはっきりしなかったが、V層がVI層を切っているようにみられた。本址検出時にも同様に観察されていたので、VI層部分を10号住居址とし、4号住居址構築以前のものと判断した。

遺物は多量に出土している。その出土状況は吹上パターンを示し、覆土上部より一括土器が出土し、3個体復元することができた(第21図5・6・7)。破片のほとんども覆土の上部から中部にかけて出土している。床面上に一括品はなく、破片もほとんどなかった。石器も覆土から多量に出土している。床面には微細な黒耀石片の集中箇所が2箇所みられた。

#### 遺物(第21・22・23・27・28・29図)

土器は60点(第21図5~7・第22図16~36・第23図1~33)を示した。復元された第21図5・6・7の3個体はいずれも無繊維である。5は波状口縁部に垂紐が貼付される。6は指頭圧痕を残す薄手土器で、口縁部を2段の刺突文が巡る。内外に成形痕が観察される。7は地文が無節縄文、口縁部に補修孔が2ヶある。第22図16~32も無繊維である。24・25は口縁部に垂紐が貼付される。26~28は沈線による格子目文が施される。32は指頭圧痕を残す薄手土器で細線文が描かれる。第22図33~36・第23図1~29は繊維土器である。第22図33・34は無文、35・36は表面が条痕状である。第23図1~7は縄文、沈線文、ボタン状貼付文によって



第11図 4号・10号住居址 (1/60)

施文される。8～29は地文に縄文が施される。8～17は羽状構成となる。23の底部は上げ底となり、接地面にも縄文が施される。28の縄文原体は反撚り、29はループ文である。第23図30～33は50号土坑から出土したものである。いずれも無繊維である。30・31は無文、32は指頭圧痕を残す薄手土器である。33は貝殻腹縁により施文されるもので、縄文早期に比定されようか。

石器は23点を示した。第27図4～21の石鏃、第28図2の石錐、第28図10・第29図1～3の石匙である。石鏃は11以外は黒耀石製である。21は雁股鏃とした。石錐は黒耀石製、石匙は2のみ黒耀石製である。

#### 時期

縄文時代前期前葉とみられる。

### (5) 5号住居址

#### 遺構 (第12図・図版7)

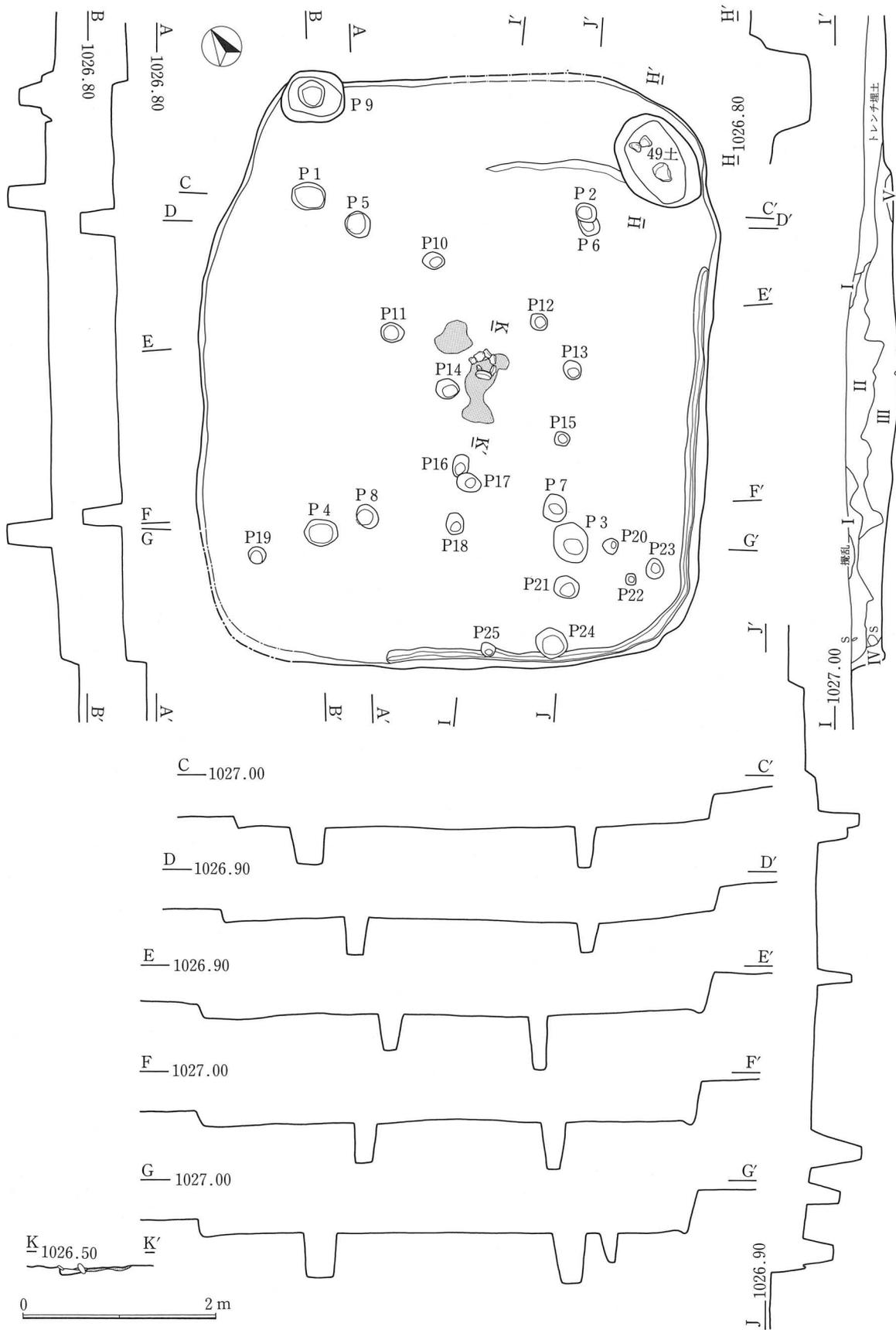
F7グリッドを中心に位置する。北壁から南西隅にかけて試掘トレンチによって切られ、壁の一部を失う。覆土の一部に攪乱を受ける。北東隅にある49号土坑は本址の施設とみられ、坑底から礫が3点出土している。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸598cm、短軸515cmを測る。長軸方向はN-34°-Eを指す。北側がややすぼまり、この部分の床面は段差がつきやや高い。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁15cm、東壁45cm、南壁32cm、西壁17cmを測る。床面は植物等による攪乱が著しい。部分的に貼床が施されたとみられる箇所もあったが、攪乱と渾然としており判然としない。これらを掘り下げた結果、かなり凹凸の激しいものとなったが、遺存状態の良い箇所は凹凸が少なく堅緻なものであった。周溝は東壁から南壁にかけて検出されている。不鮮明な掘り込みで、幅8～12cm、深さ1～3cmを測る。ピットは25本検出されている。主柱穴はP1～P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が37cm、P2が42cm、P3が51cm、P4が47cmを測る。この内側に検出されているP5～P8の4本も方形に配列する。これは住居址の拡張もしくは建て替えに伴う主柱穴の立て替えともみれるが、覆土に差異を見出すことはできず判断できない。床面からの深さはP5が35cm、P6が30cm、P7が48cm、P8が39cmを測る。その他のピットの深さはP9が22cm、P10が41cm、P11が33cm、P12が55cm、P13が34cm、P14が24cm、P15が26cm、P16が44cm、P17が37cm、P18が33cm、P19が34cm、P20が36cm、P21が35cm、P22が34cm、P23が28cm、P24が30cm、P25が23cmを測る。炉は住居址中央部に小型の石囲炉があり周囲が焼けている。偏平な円礫1点と偏平な角礫6点により作られる。

覆土は5層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ロームブロック(2mm)・炭化物(2～5mm)を僅かに含む。II層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック(2～5mm)・炭化物(2～5mm)を僅かに含む。III層は暗褐色土でI層に比して土色やや明るく、粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性はある。ローム粒子を多く、ロームブロック(2～35mm)・炭化物(3mm)を疎らに含む。IV層は褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2～12mm)を疎らに、炭化物(2～8mm)を僅かに含む。V層は暗褐色土で、粒子は粗く、締まりが強く、粘性がある。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

#### 遺物 (第24・27・28・29図)

土器は一括性のあるものはなく、破片のみの出土である。24点(第24図1～24)を示した。第24図1～8は無繊維である。1・2は無文、3・4には口縁部に垂紐が貼付される、本群に属するとみられるものが主体となる。5は胎土硬質な薄手の土器である。6～8は縄文が施される。6は無節、7は異原体による羽状



第12図 5号住居址 (1/60)

構成、8は単節である。9～20は繊維土器である。9は無文、その他は縄文が施される。10の口縁部は片口付のものとみられる。11～16は羽状構成となる。17～19は単節、20は無節である。21は沈線と貼付文によって施文される。22は結節浮線文が施される。21・22は縄文前期末に位置づけられよう。23・24は49号土坑より出土したものである。2点とも繊維を含まず、無文である。

石器は10点を示した。第27図22～27の石鏃、第28図3の石錐、第28図6の滑石製品、第29図4・5の石匙である。石鏃はすべて黒耀石製である。27の石鏃は雁股鏃とした。4の石匙は黒耀石製である。

#### 時期

縄文時代前期前葉とみられる。

### (6) 6号住居址

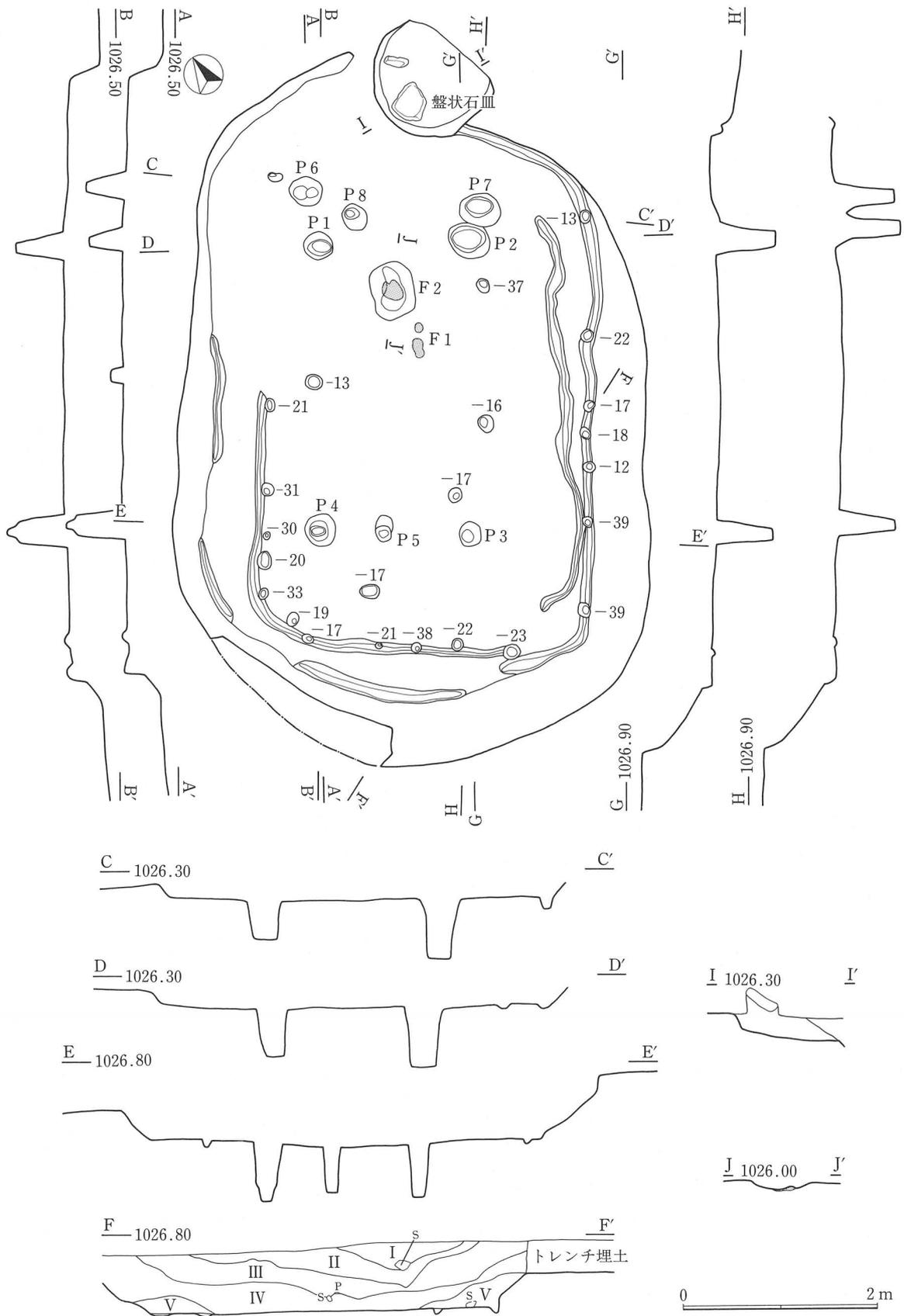
#### 遺構(第13図・図版8)

G7・8グリッドに位置する。住居址の西方向には攪乱箇所が多く、試掘の際に南壁の上部一部を壊されている。北壁部は台地東の崖部に突き出しており、多くを流失して徐々に低くなっている。北壁の先端部に75号土坑があるが、検出状況から本址の施設と考えられ、この上部から盤状石皿が斜状に出土している。本址は拡張されているものとみられ、以下に拡張前のものをa住居址、拡張後のものをb住居址として報告する。

a住居址 拡張前の支柱穴はP1～P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が50cm、P2が60cm、P3が58cm、P4が61cmを測る。P1・P2の上面には貼床が施されていた。P5も貼床され拡張前のものとみられ、深さは48cmを測る。長軸方向はN-31°-Eを指す。壁のやや内側に沿う溝を拡張前の周溝とみることが可能である。これを想定した場合、拡張前の平面形は隅丸長方形あるいは長楕円形で、規模は長軸550cm前後、短軸320cm前後のものとみることができる。ただし、この溝は拡張後の間仕切状の施設の可能性も否定できない。溝は東・南・西壁に沿って不鮮明に検出され、幅8～15cm、深さ2～6cmを測る。溝の南壁・西壁側では小ピットが検出されている。床面に僅かに検出された焼痕(F1)が拡張前の地床炉残存部とみられる。

b住居址 拡張後の平面形は長楕円形を呈し、長軸600cm、短軸390cmを測る。長軸方向はN-31°-Eと変わらない。壁は外に向けて開き傾斜は緩い。残存壁高は北壁26cm、東壁67cm、南壁73cm、西壁31cmを測る。床面はやや凹凸あるが堅緻である。中央部に向けて僅かであるが緩やかに低くなる傾向にある。周溝が北壁東側より東壁と南壁に、そして西壁の一部に検出されている。西壁の一部を除き比較的鮮明に検出され、幅7～15cm、深さ2～6cmを測る。東壁部には周溝内から小ピットが検出されている。支柱穴はP6・P7・P3・P4の4本と考えられ、P3・P4の2本が継続し、P6・P7の2本が新しく立てられている。P6に隣接するP8もそれと同等の規模をもつ。床面からの深さはP6が41cm、P7が61cm、P8が50cmを測る。炉は地床炉(F2)で長軸線上の北寄りに位置する。

覆土は5層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は強い。ローム粒子・ロームブロック(3mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック(2～4mm)を僅かに含む。III層は褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性が乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2～10mm)を多く、炭化物(3～7mm)を僅かに含む。IV層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが非常に強く、粘性がある。ローム粒子・ロームブロック(~15mm)を多く、炭化物(2～7mm)を疎らに含む。V層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが非常に強く、粘性がある。ローム粒子・ロームブロック(2～15mm)を多く、炭化物(2～5mm)を疎らに



第13図 6号住居址 (1/60)

含む。ロームブロックの混入はIV層より多い。また、セクション面にはかからなかったがロームブロックの混入が著しい箇所がみられた。これは本址の中央部に不整形に固まって、IV層の上に載っていた。

#### 遺物 (第24・25・27・29図)

土器は42点 (第24図25~42・第25図1~24) を示した。第24図25~34は無繊維である。25~29は無文である。30・31は櫛状工具による刺突がなされる。32は平底の底部である。33は指頭圧痕を残す薄手土器で、細線が施される。34は縄文が施される。第24図35~42・第25図1~18は繊維土器である。35~37は無文である。38は竹管状工具による連続爪形文と縄文が施される。39~42は縄文が羽状構成に施される。第25図1~5は単節縄文、6~17は無節縄文である。18の原体は反撚りである。本址出土の土器は縄文施文の繊維土器が主体であるが、その中でも無節縄文の占める割合が高い。19・20は結節浮線文が施されるもので、縄文前期末に位置付けられよう。21には口縁部に渦巻状の沈線が描かれるが、帰属が判然としない。22~24は75号土坑出土のものである。いずれも繊維を含む。22・23は無節縄文・24は単節縄文が施こされる。

石器は12点を示した。第27図28~36の石鏃、第29図6~8の石匙である。石鏃は31が水晶製、その他は黒曜石製である。36は雁股鏃とした。石匙は6が水晶製、8が黒曜石製である。

#### 時期

縄文時代前期前葉としたが、時期はやや下るかもしれない。

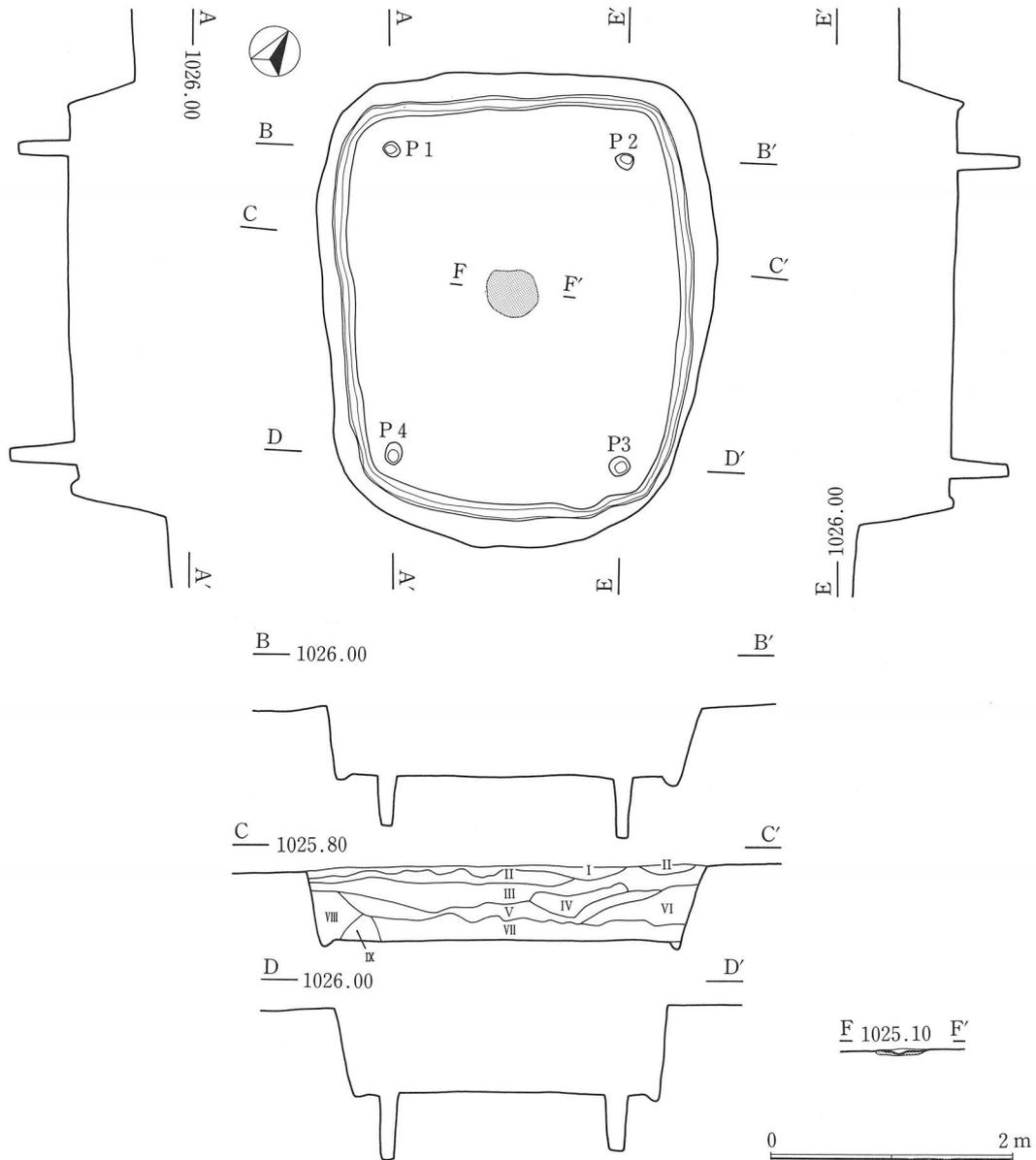
### (7) 7号住居址

#### 遺構 (第14図・図版9—1)

C7グリッドに位置する。遺存状況は良好である。西壁から東壁にかけて上部を試掘トレンチによって切られている。

平面形は南壁がやや張る隅丸長方形を呈し、規模は長軸350cm、短軸287cmを測る。長軸方向はN-33°-Eを指す。壁は垂直に近く、残存壁高は北壁52cm、東壁74cm、南壁74cm、西壁71cmを測る。床面は凹凸なく平坦で堅緻である。周溝が壁下を全周する。しっかりと掘り込まれ、幅9~14cm、深さ5~10cmを測る。支柱穴はP1~P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が42cm、P2が50cm、P3が47cm、P4が54cmを測る。炉は地床炉で中央部にある。

覆土は9層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を僅かに含む。II層は黒褐色土でI層に比して土色やや明るく、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック(2~25mm)を僅かに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~25mm)を疎らに含む。IV層は黄褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性は乏しい。炭化物(1mm)を僅かに含む。ローム粒子と褐色土の混合土である。V層は暗黄褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~7mm)を疎らに、炭化物(3~5mm)を僅かに含む。VI層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが非常に強く、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~16mm)を多く、炭化物(2~7mm)を僅かに含む。VII層は暗黄褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性がややある。ロームブロック(2~75mm)を非常に多く、ローム粒子を多く、炭化物(5~10mm)を僅かに含む。VIII層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性はある。ローム粒子・ロームブロック(2~110mm)を疎らに含む。IX層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが非常に強く、粘性はややある。ロームブロック(2~25mm)を疎らに、ローム粒子を僅かに含む。



第14図 7号住居址 (1/60)

**遺物 (第25・27・30図)**

土器は小破片が出土している。17点 (第25図25~41) を示した。25~30は無繊維で無文である。本群に属するとみられるものが圧倒的多数を占める。31~36は指頭圧痕を残す無繊維の薄手土器である。31~33は細線文が施される。37~41は繊維土器である。37は無文とみられナデ調整される。38~41には縄文が施される。

石器は4点を示した。第27図37・38の石鏃、第30図2・3のスクレイパーである。石鏃は2点とも黒耀石製、スクレイパーは2が黒耀石製である。

**時期**

主体となる土器群より、縄文時代前期前葉とみたい。

(8) 8号住居址

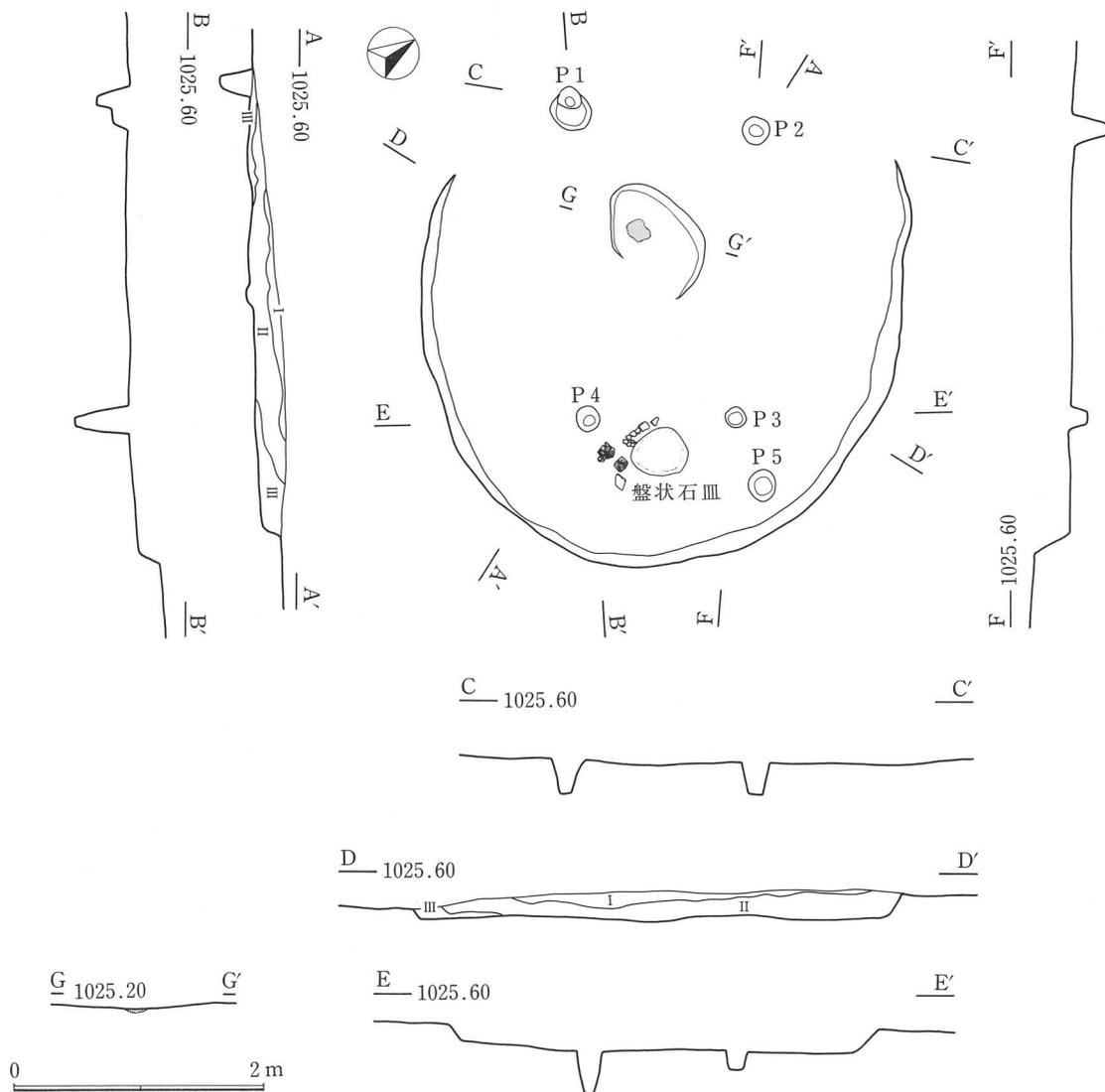
遺構 (第15図・図版9—2,10—1・2)

D 8 グリッドに位置する。遺存状況は良好である。

掘り込みが浅く北壁側が未検出であるが、平面形は楕円形とみられ、規模は長軸460cm前後、短軸365cm前後と推定される。長軸方向はN-56°-Wを指す。残存壁高は東壁18cm、南壁27cm、西壁13cmを測る。床面は凹凸があり軟弱である。周溝はない。支柱穴はP1~P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が29cm、P2が26cm、P3が15cm、P4が43cmを測る。南壁際にP5があり、深さ20cmを測る。炉は地床炉で中央部にある。浅い不整の掘り込みに焼痕が僅かに残る。床面には盤状石皿が据えられている。

覆土は3層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・炭化物(2~5mm)を僅かに含む。II層は黒褐色土でI層に比して土色やや明るく、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・ロームブロック(2~5mm)を疎らに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性がややある。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~60mm)を疎らに含む。

盤状石皿の周辺床より土器がまとめて出土し、半完形に復元(第21図8)することができた。



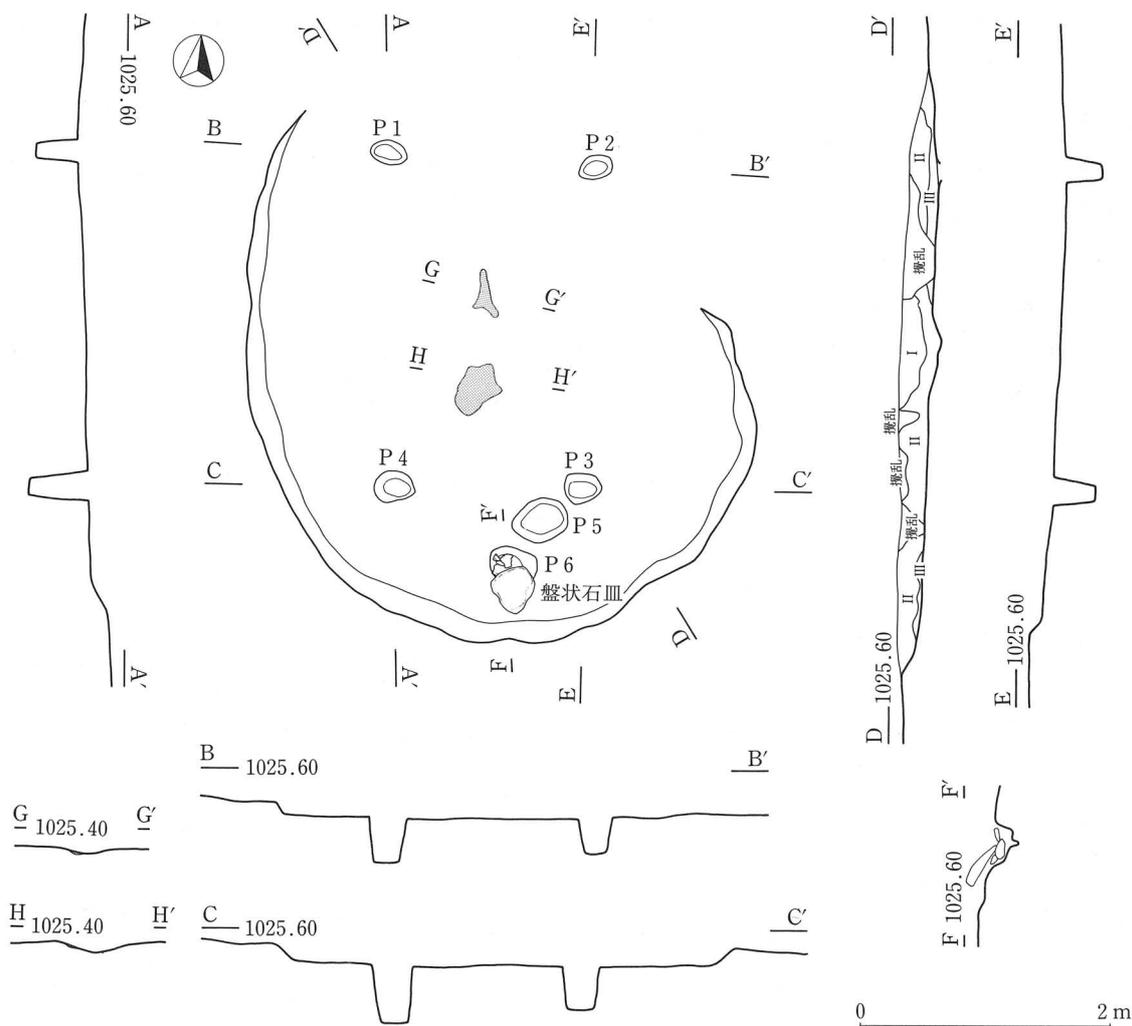
第15図 8号住居址 (1/60)

遺物 (第21・26図)

土器は10点 (第21図8・第26図1~9) を示した。復元することのできた第21図8は指頭圧痕を内外に残す無繊維の薄手土器である。器厚は約5mmであるが口唇部は約9mmと肥厚する。上部への施文は隆帯の貼付から縦位の細線、そして横位の山形の細線へと進む。第26図1~4は同じく無繊維である。1は中厚手である。2~4は第21図8と同様な属性を持つが別個体とみられる。いずれも薄手で指頭圧痕を残し、細線文が施される。2は粘土紐の貼付によって肥厚した口唇部に爪形文が施される。5~9は繊維土器である。5は無文、6・7は縄文が施される。8・9は地文が絡条体条痕である。9は裏面に絡条体圧痕が観察される。

時期

縄文時代前期初頭とみられる。



第16図 9号住居址 (1/60)

(9) 9号住居址

遺構 (第16図・図版10—3・4)

F9グリッドに位置する。周辺に攪乱が多く覆土に至っている。覆土上面の中央部には焼土ブロックの点在が認められた。

掘り込みが浅く北壁側が未検出であるが、平面形は楕円形とみられ、規模は長軸480cm前後、短軸360cm前後と推定される。長軸方向はN-5°-Wを指す。残存壁高は東壁9cm、南壁12cm、西壁12cmを測る。床面は凹凸は少ないが軟弱である。周溝はない。支柱穴はP1～P4の4本と考えられる。床面からの深さはP1が36cm、P2が46cm、P3が34cm、P4が45cmを測る。P3に近接してP5があり、深さ14cmを測る。炉は中央部に地床炉が2基構築されている。両基とも浅い凹みに焼痕が僅かに残る。凹みは攪乱の影響もあり不鮮明である。南壁際で盤状石皿が床面に一部接し斜状に出土している。この下には不整な掘り方のP6があり、礫が3点出土している。

覆土は3層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。焼土ブロック・焼土粒子を多く、ロームブロック(10mm)を僅かに含む。覆土上面の中央部に分布する。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性はある。ロームブロック(2～3mm)を疎らに、ローム粒子を僅かに含む。III層は暗黄褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ロームと暗褐色土が混合する。

#### 遺物(第21・26・27・28図)

土器の出土量は少なく、小破片のみである。14点(第21図9・第26図10～22)を示した。第26図10～18は指頭圧痕を残す無繊維の薄手土器である。10～14には細線文が施される。19～22と第21図9は繊維土器である。19には縄文が施される。第21図9は土器尖底部で僅かに縄文施文の痕跡が残る。20には条痕がみられる。21・22は絡条体条痕と絡条体圧痕が施される。

石器は4点示した。第27図39・40の石鏃2点は黒耀石製である。第28図4・5の2点は黒耀石製である。この2点と類似する形態のものは、今回の調査ではこの他に検出されていない。

#### 時期

縄文時代前期初頭とみられる。

### (10) 10号住居址

#### 遺構(第11図・図版6—1)

D5グリッドに位置する。4号住居址と重複し、本址の方が古く、切られている。大部分を失い支柱穴とみられるピットも未検出のため、平面形、規模、長軸方向等は不明である。壁は垂直に近く、残存壁高は25cmを測る。床面は凹凸があり軟弱である。ピットは4本検出されている。床面からの深さはP1が35cm、P2が31cm、P3が14cm、P4が23cmを測る。4号住居址の2本のピットP11・P12は本址に属するものとも考えられる。周溝と炉は検出されていない。

覆土は第11図に示したVI層が本址の覆土であり、分層はされなかった。VI層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2～4mm)を疎らに、炭化物(3mm)・パミス(12mm)を僅かに含む。4号住居址のV層に切られている。

#### 遺物

土器の出土はなく、石器は黒耀石剥片等が出土している。

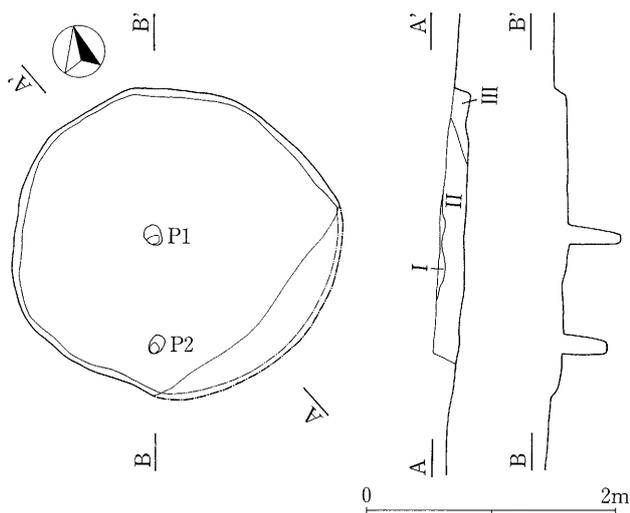
#### 時期

時期決定資料を欠くが、4号住居址との新旧関係、掘り方、周溝の検出されない点等から、縄文時代前期初頭とみておきたい。

### 第3節 堅穴状遺構

#### (1) 1号堅穴状遺構 (第17図・図版11—1)

E 6グリッドに位置する。試掘トレンチによって南東部を失う。平面形は円形を呈し、口径269×245cm、深さ30cmを測る。底部は植物等による攪乱が多く凹凸がある。底部から2本の小ピットが検出されている。深さはP1が42cm、P2が36cmを測る。覆土は3層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・炭化物(3mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・ロームブロック(2~5mm)・炭化物(2~8mm)



第17図 1号堅穴状遺構 (1/60)

を疎らに含む。III層は褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~8mm)を疎らに含む。

遺物は土器片と石器が出土している。土器は4点(第26図23~26)を示した。23・24は共に無繊維で、23は無文、24には細線により格子目文が描かれる。25・26は繊維土器で縄文が施される。25にはコンパス文が施文される。

本址は出土土器より縄文時代前期前葉の遺構とみられるが、形態に住居・土坑と類似点がみられず、便宜的に堅穴状遺構としたものである。

### 第4節 土 坑

土坑は75まで番号を付し、第I章第5節(1)③でその概要を示した。ここではその内、fに分類された22基を報告する。fの土坑とは、遺構と認識される土坑のうちで、近・現代のものを除く、独立して機能していたとみられるものである。第6図遺構分布図で示す土坑もfのみである。

#### (1) 1号土坑 (第18図1・図版11—2・3)

H 3グリッドに位置する集石土坑である。平面形は円形を呈し、口径160×152cm、深さ48cmを測る。掘り方は底部に向けてやや開くものである。覆土は3層に縦分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。炭化物(2~7mm)を疎らに、ローム粒子を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(5~20mm)・炭化物(2~14mm)を疎らに混入する。III層は褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を非常に多く、ロームブロック(5~10mm)・炭化物(2~16mm)を疎らに含む。

集石は101個の礫より構成される。礫は覆土の上面から中部にかけて6個出土した他は、坑底から10cm程の範囲に集中している。礫の大きさは小礫から大礫までであるが、多くは中礫である。形状は亜角礫がほとんどで亜円礫が僅かにある。これらのなかには、煤けたもの・炭化物の付着したもの・赤化したものが認めら

れたが、焼けは顕著でない。

遺物は繊維土器片が2点(第26図27・28)出土している。27は表面に絡条体圧痕を有する。裏面に条痕等は観察されない。28は表裏に条痕を有する。2点とも縄文早期末に帰属するものと思われる。石器は黒耀石剥片、ピエスエスキュー等が僅かに出土している。その他、集石を構成する礫の一つは磨石とみられる。

#### (2) 2号土坑(第18図2・図版11—4)

H2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径143×120cm、深さ55cmを測る。掘り方は底部に向けてやや開くものである。覆土は4層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子やや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ロームブロック(5~15mm)を多く、ローム粒子を疎らに、炭化物(2mm)を僅かに含む。II層は黄褐色土で、粒子は粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。炭化物(2~5mm)を僅かに含む。褐色土が斑状に混入する。III層は黄褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。炭化物(5~15mm)・パミス(10mm)を僅かに含む。IV層は黄褐色土で、粒子は粗くブロック状で、締まりが強く、粘性は乏しい。炭化物(2~10mm)を僅かに含む。分層しなかったが、床面の直上ではこの炭化物の混入が多くみられた。

遺物は出土していない。

#### (3) 22号土坑(第18図3・図版11—5)

H4グリッドに位置する集石土坑である。平面形は円形を呈し、口径184×174cm、深さ33cmを測る。覆土は褐色土の単一層である。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(3~15mm)を疎らに、炭化物(5~10mm)を僅かに含む。

集石は48個の礫より構成される。礫は土坑東部に集中的に出土している。礫の大きさは中礫から大礫に含まれる。形状は亜角礫が多く亜円礫が幾つかある。礫は焼けとみられる赤化したものが多い。

集石を構成する礫の一つが特殊磨石とみられる他は、遺物は出土していない。

#### (4) 23号土坑(第18図4・図版12—1)

H5グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し、口径158×152cm、深さ70cmを測る。覆土は9層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、炭化物(2~5mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土でI層より土色明るい。粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。III層は褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子を非常に多く、ロームブロック(3~8mm)を多く、炭化物(2~5mm)を僅かに含む。IV層は褐色土でIII層より土色明るい。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を非常に多く、炭化物(2~15mm)・ロームブロック(2~20mm)を多く混入する。V層は暗黄褐色土で、ローム粒子・ロームブロック(2~25mm)を非常に多く、炭化物(2~20mm)を多く混入する。VI層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子を多く、ロームブロック(5~8mm)を疎らに含む。VII層は黄褐色土で、粒子は粗く、締まりがあり、粘性もある。炭化物(20mm)を僅かに含む。褐色土を混入するブロック状のロームである。VIII層は、VII層と同質であるが焼土粒子を僅かに含む。IX層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。炭化物(2~5mm)を疎らに、焼土ブロック(10mm)を僅かに含む。褐色土を混入するブロック状のロームである。

遺物は縄文早期押型文土器片が2点(第26図29・30)出土している。共にポジティブな楕円押型文である。

(5) 24号土坑 (第18図5・図版12—2)

H 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径147×147cm、深さ54cmを測る。坑底から深さ27cmのピットが検出されている。覆土は5層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・ロームブロック(2~10mm)・炭化物(3~7mm)を疎らに含む。II層は暗褐色土でI層より土色明るい。粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性はややある。ローム粒子を多く、ロームブロック(5~10mm)を疎らに、炭化物(5mm)を僅かに含む。III層は褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ロームブロック(5~10mm)を疎らに含む。IV層は暗黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~15mm)を非常に多く含む。褐色土を混入するブロック状のロームである。V層は黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~15mm)を非常に多く含む。IV層同様に褐色土を混入するブロック状のロームである。

遺物は出土していない。

(6) 25号土坑 (第19図1・図版12—3)

H 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径90×83cm、深さ14cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層である。粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ロームブロック(5~15mm)を多く含む。

遺物は出土していない。

(7) 26号土坑 (第19図2・図版12—4)

H 4 グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し、口径101×97cm、深さ16cmを測る。覆土は2層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子・炭化物(5mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック(3~10mm)・炭化物(3mm)を僅かに含む。

遺物は無繊維の無文土器片が1点出土している。

(8) 27号土坑 (第19図3・図版12—5)

G 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径100×99cm、深さ33cmを測る。覆土は2層に分層された。I層は黒褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック(3~7mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子・ロームブロック(2~17mm)を疎らに含む。

遺物は出土していない。

(9) 39号土坑 (第19図4・図版12—6)

F 3 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、口径125×91cm、深さ20cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層である。粒子は細かく、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~7mm)を疎らに、炭化物(2~4mm)を僅かに含む。

遺物は出土していない。

(10) 45号土坑 (第19図5・図版12—7)

G 5 グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈し、口径152×132cm、深さ16cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層である。粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック (5～15mm)・炭化物 (10mm) を僅かに含む。

土器は無繊維の無文土器片 (第26図32) が2点出土している。石器は黒耀石剥片が出土している。

(11) 52号土坑 (第19図6・図版12—8)

E 4 グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し、口径130×125cm、深さ37cmを測る。覆土は2層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性はややある。ローム粒子を疎らに、ロームブロック (2～5mm)・炭化物 (2～5mm) を僅かに含む。II層は暗褐色土でI層より土色やや明るい。粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。ロームブロック (2～15mm) を疎らに、炭化物 (7～10mm) を僅かに含む。

割れた碟が6個出土した他、遺物は出土していない。

(12) 53号土坑 (第19図7・図版13—1)

D 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径80×76cm、深さ24cmを測る。覆土は黒褐色土の単一層である。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック (5～35mm)・炭化物 (2～4mm) を僅かに含む。

遺物は同一個体とみられる土器片 (第26図33) が3点出土している。無繊維の無文土器である。

(13) 54号土坑 (第19図8・図版13—2)

E 5 グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し、口径103×86cm、深さ28cmを測る。覆土は3層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ロームブロック (2～4mm)・炭化物 (2～4mm) を疎らに、ローム粒子を多く含む。II層は暗褐色土でI・III層より土色明るい。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロックを僅かに含む。III層は暗褐色土でI層より土色やや明るい。粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック (4～15mm)・炭化物 (1～6mm) を疎らに含む。

遺物は土器片が5点出土し、4点 (第26図34～37) を示した。34は無繊維の薄手土器で指頭圧痕が残る。35～37は繊維土器である。35・36は無文、36は底部である。37は磨耗しているが縄文施文とみられる。石器は黒耀石剥片が出土している。

(14) 56号土坑 (第19図9・図版13—3)

D 4 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径130×130cm、深さ22cmを測る。覆土は褐色土の単一層である。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を斑状に、ロームブロック (5～10mm) を疎らに、炭化物 (5mm) を僅かに含む。

遺物は出土していない。

(15) 57号土坑 (第19図10・図版13—4)

F 6 グリッドを中心に位置する。平面形は円形を呈し、口径128×118cm、深さ47cmを測る。覆土上面に巨礫がのる。覆土は3層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を疎らに、ロームブロック（4mm）を僅かに含む。II層は暗褐色土でI層より土色やや明るい。粒子は細かく、締まりがあり、粘性は乏しい。ロームブロック（3～10mm）・炭化物を僅かに含む。III層は褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性がある。ローム粒子を多く、ロームブロック（3～7mm）を疎らに含む。

遺物は同一個体とみられる微細な土器片が4点出土している。図示できないが、いずれも無繊維で無文である。石器は黒耀石剥片が出土している。

(16) 59号土坑（第20図1・図版13—5）

E 7 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径113×108cm、深さ45cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層である。粒子は細かく、締まりが強く、粘性はややある。ローム粒子・ロームブロック（2～7mm）・炭化物（1～7mm）を疎らに含む。

遺物は縄文後期前半の土器片が2点（第26図38・39）出土している。石器は黒耀石剥片類が出土している。

(17) 64号土坑（第20図2・図版13—6）

E 8 グリッドを中心に位置する。平面形は楕円形を呈し、口径177×152cm、深さ15cmを測る。65号土坑と重複するが、形態から2基の土坑の重複と判断したものであり、新旧関係は不明である。覆土も分層できず、暗褐色土の単一層である。粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性もある。ロームブロック（3～15mm）を疎らに含む。

遺物は土器片（第26図40）が出土している。繊維土器で縄文とボタン状貼付文が施されている。この他に、微細な無文の繊維土器片が出土している。石器は黒耀石剥片類が出土している。

(18) 65号土坑（第20図2・図版13—6）

E 8 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径92×83cm、深さ33cmを測る。64号土坑と重複するが、形態から2基の土坑の重複と判断したものであり、新旧関係は不明である。覆土も分層できず、64号土坑と同一の単一層である。

遺物は黒耀石剥片類が出土している。

(19) 66号土坑（第20図3・図版13—7・8）

D 9 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径159×157cm、深さ88cmを測る。掘り方は一旦上部ですばまった後、垂直に底部に至る。底部の周囲幅10cm程がやや低いものとなっている。覆土は4層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子・ロームブロック（3mm）を僅かに含む。II層は暗褐色土でI・III層より土色明るい。粒子は細かく、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子を多く、ロームブロック（2～10mm）を疎らに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性はある。ローム粒子・ロームブロック（3～10mm）を疎らに含む。IV層は黄褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性はある。前述したように本址の底部は周囲がやや低いものとなっているが、IV層はこの内側に厚さ8cm程に平たく堆積していた。このことからIV層は底部の周辺を一段低いも

のとするために、掘り方に対して貼ったものとみることできる。

遺物は黒耀石剥片類が出土している。

(20) 67号土坑 (第20図4・図版14—1・2)

E10グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、口径113×110cm、深さ72cmを測る。掘り方は一旦上部でややすぼまり底部に至る。底部の周囲幅10cm程がやや低いものとなっている。覆土は8層に分層された。I層は暗褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性はややある。ローム粒子・ロームブロック(5mm)・炭化物(1mm)を僅かに含む。II層は暗褐色土でI層より土色明るい。粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ローム粒子を多く、ロームブロック(5~10mm)・炭化物(1~3mm)を僅かに含む。III層は暗褐色土で、粒子は細かく、締まりが強く、粘性はややある。ローム粒子・ロームブロック(2~5mm)・炭化物(1~5mm)を僅かに含む。IV層は粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性は乏しい。ローム粒子を多く、ロームブロック(2~7mm)を疎らに、炭化物(1~3mm)を僅かに含む。V層は褐色土で、粒子は粗く、締まりが強く、粘性はややある。ロームブロック(2~10mm)を非常に多く、ローム粒子・炭化物(2~7mm)を多く含む。VI層は褐色土で、粒子は細かく、締まりがあり、粘性もある。ロームブロック(3~12mm)・炭化物(1~5mm)を疎らに含む。VII層は黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりがあり、粘性はややある。炭化物(1~12mm)を多く含む。褐色土を混入するロームである。VIII層は黄褐色土で、粒子はやや粗く、締まりが強く、粘性はある。炭化物(2~5mm)を僅かに含む。褐色土を混入するロームである。前述したように本址の底部は周囲がやや低いものとなっているが、VIII層はこの内側に厚さ8~16cm程に平たく堆積していた。このことからVIII層は底部の周辺を一段低いものとするために、掘り方に対して貼ったものとみることできる。

遺物は出土していない。

(21) 69号土坑 (第20図5・図版14—3)

E9グリッドに位置する集石土坑である。平面形は円形を呈し、口径97×90cm、深さ32cmを測る。

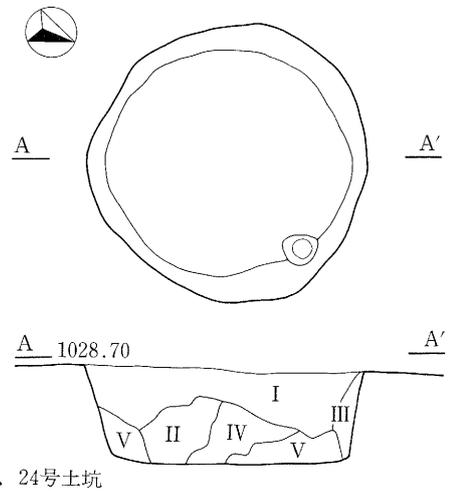
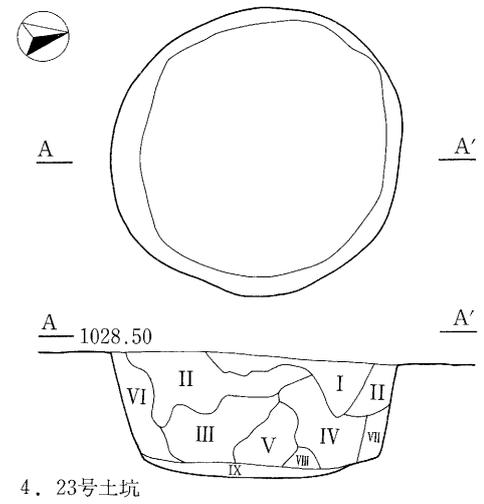
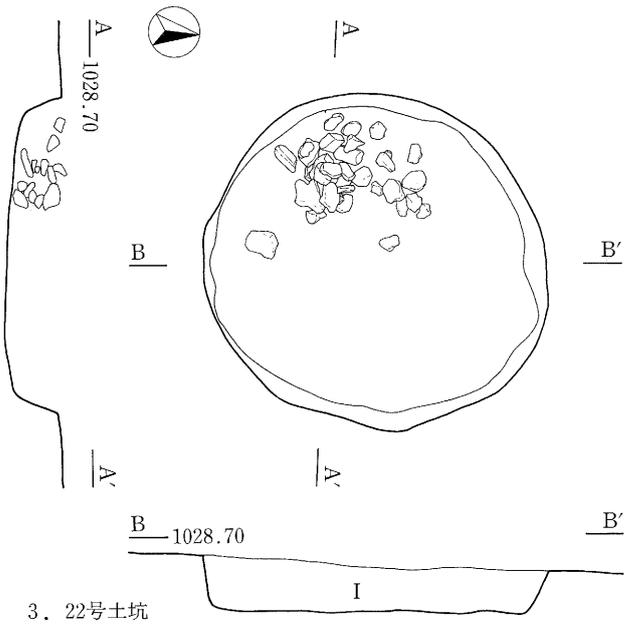
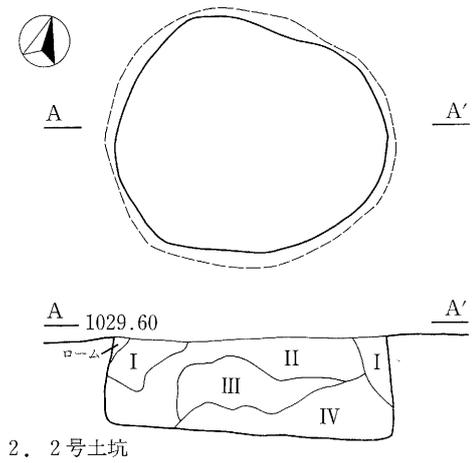
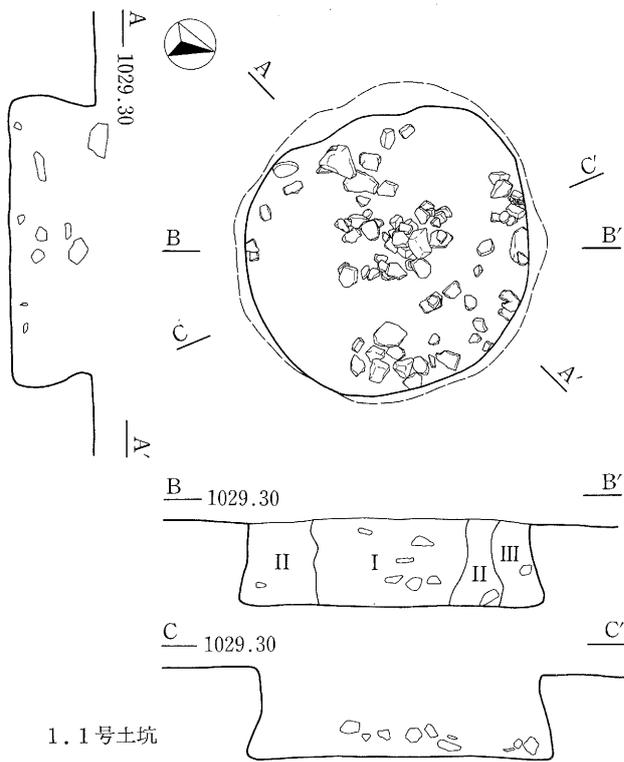
集石は21個の礫より構成される。礫の大きさは巨岩が上部に2個ある他、大礫・小礫もあるが多くは中礫である。形状は直角礫がほとんどである。数点に赤化したもの・煤けたものが認められるが、焼けは顕著でない。礫の一つが凹石である。その他に遺物は黒耀石剥片類が出土している。

(22) 73号土坑 (第20図6・図版14—4)

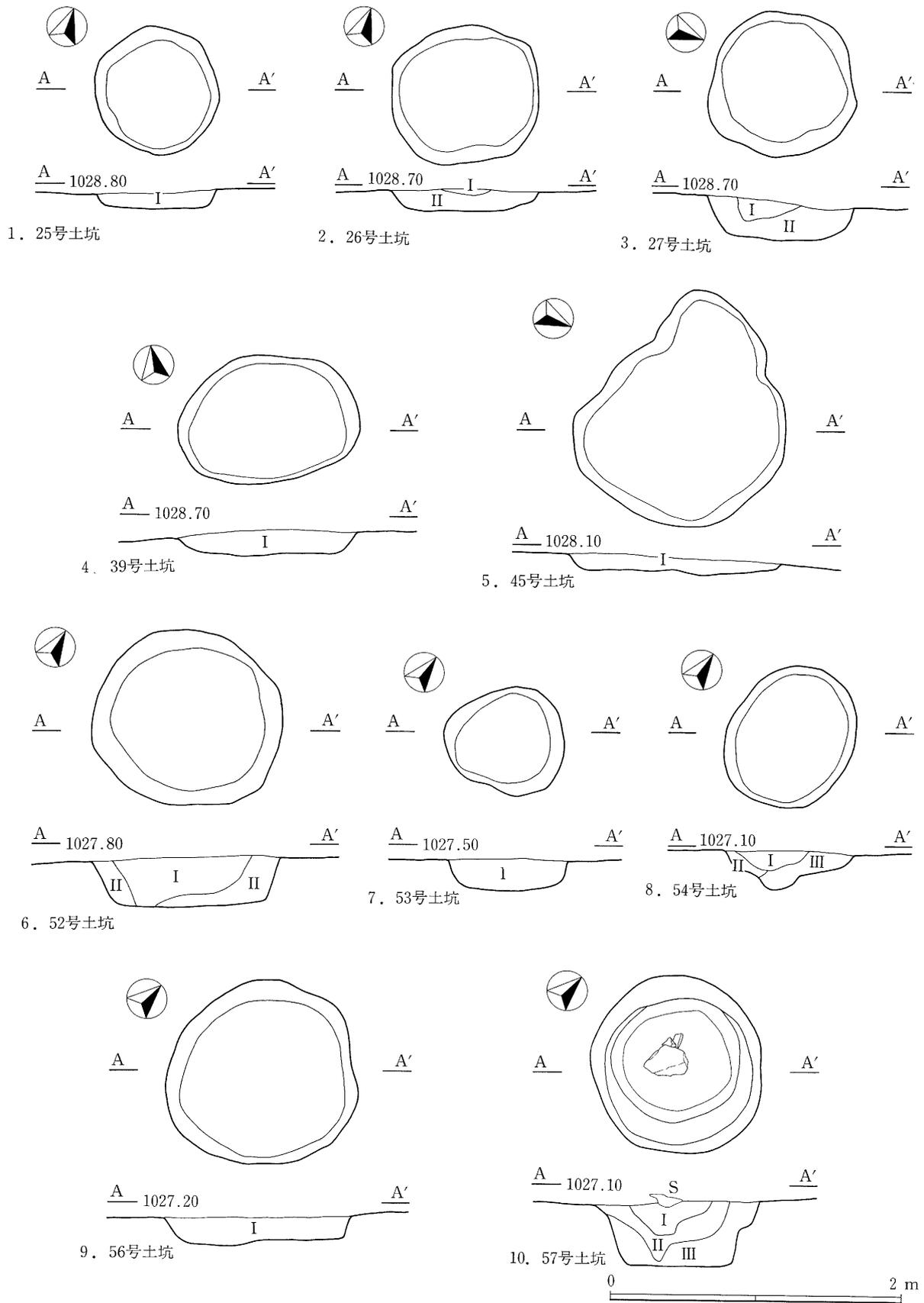
D6グリッドに位置する集石土坑である。平面形は楕円形を呈し、口径130×112cm、深さ32cmを測る。

集石は52個の礫より構成される。礫の大きさは15cm以下の大礫が9個あり残りは中礫と小礫である。礫の形状は直角礫がほとんどである。礫に焼けは観察されない。

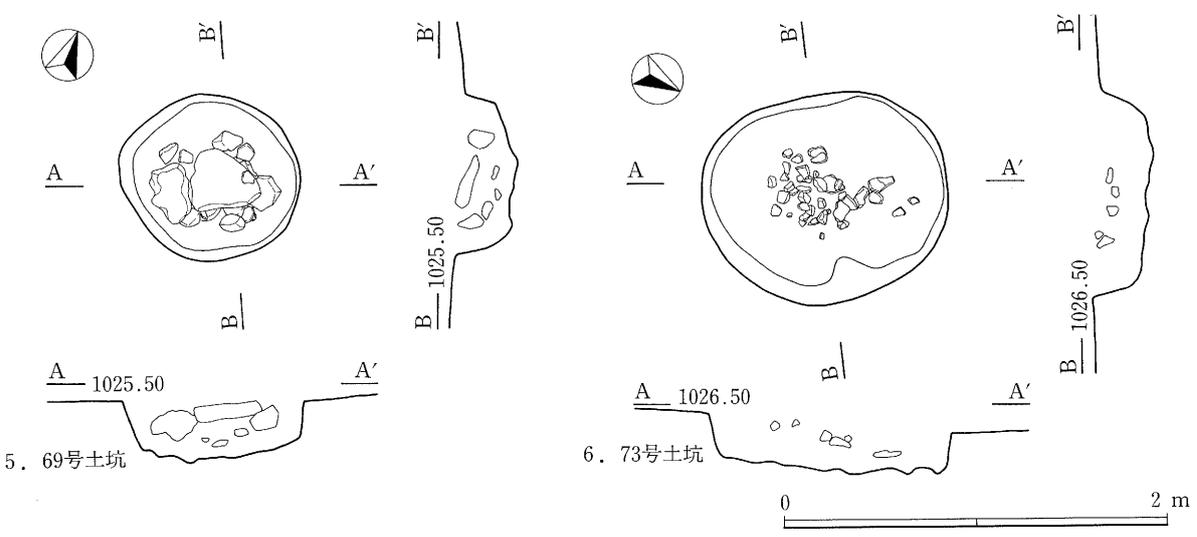
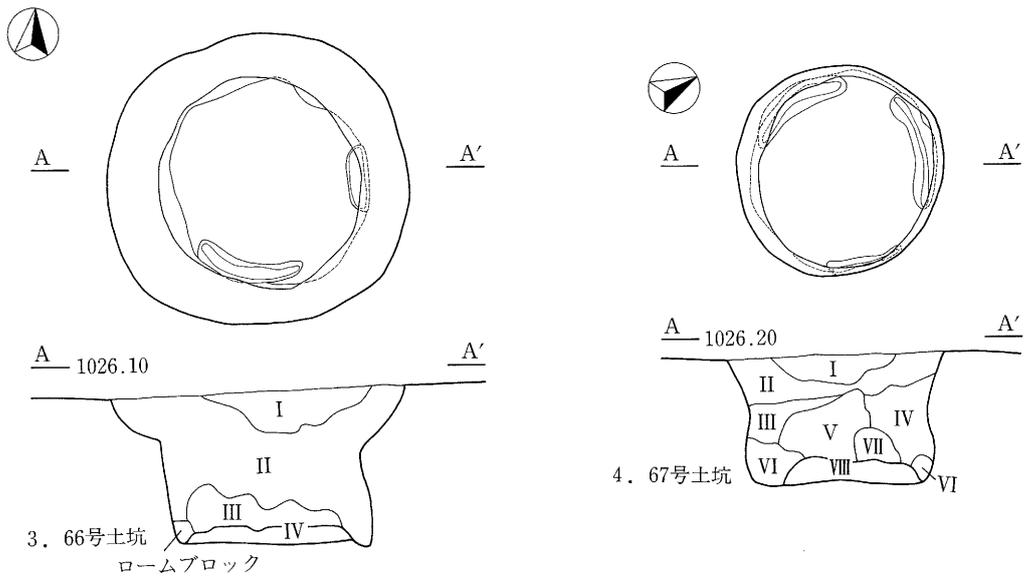
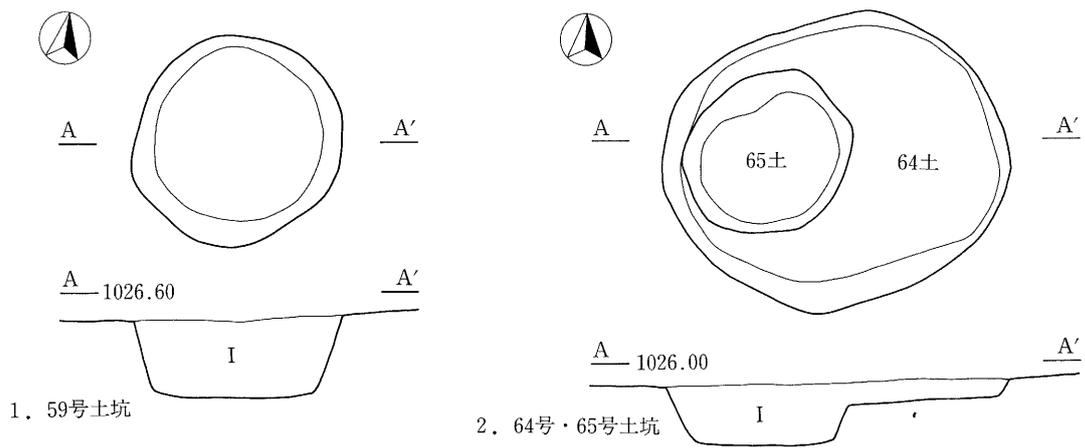
遺物は黒耀石剥片類が出土している。



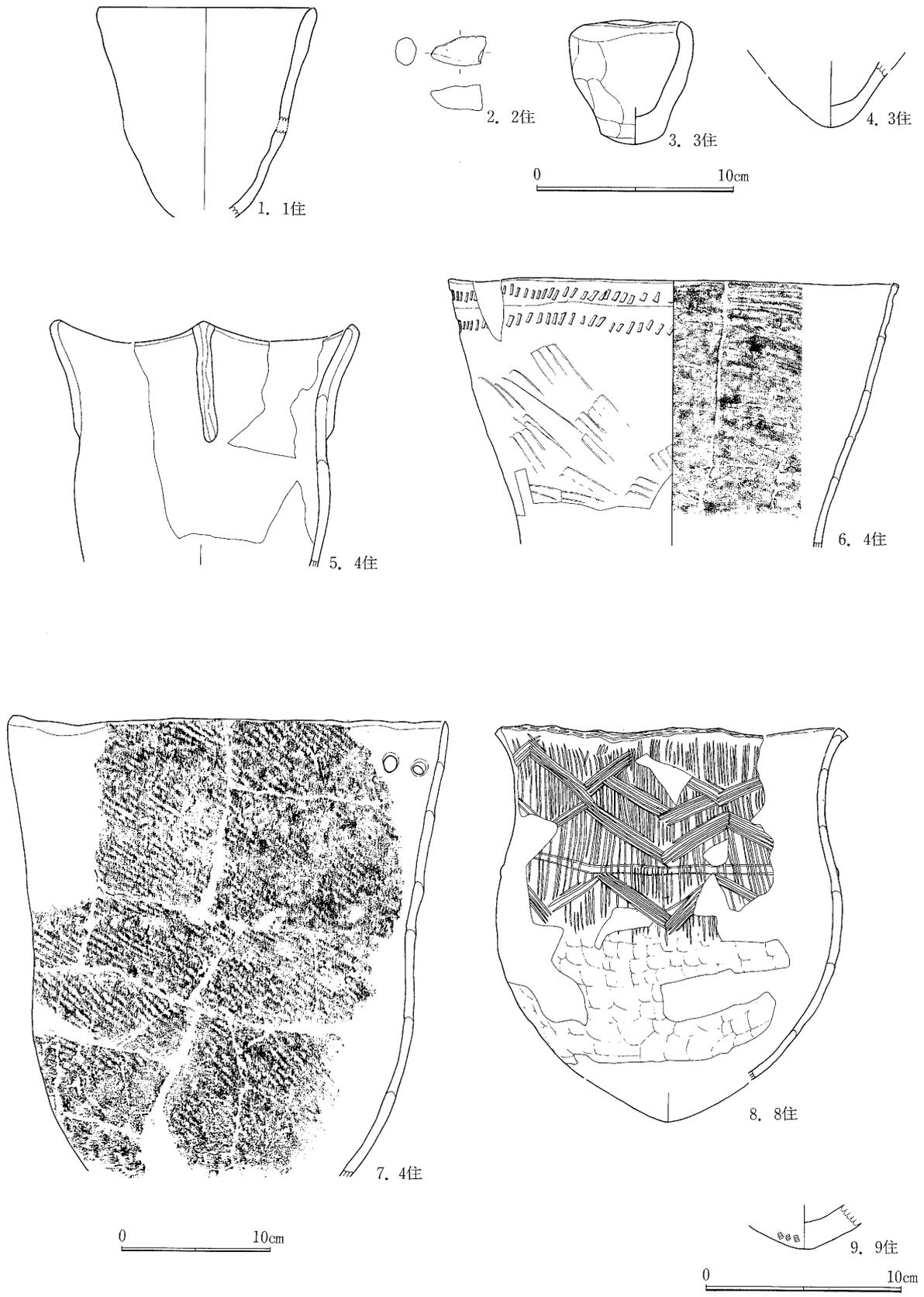
第18图 土坑(1) (1/40)



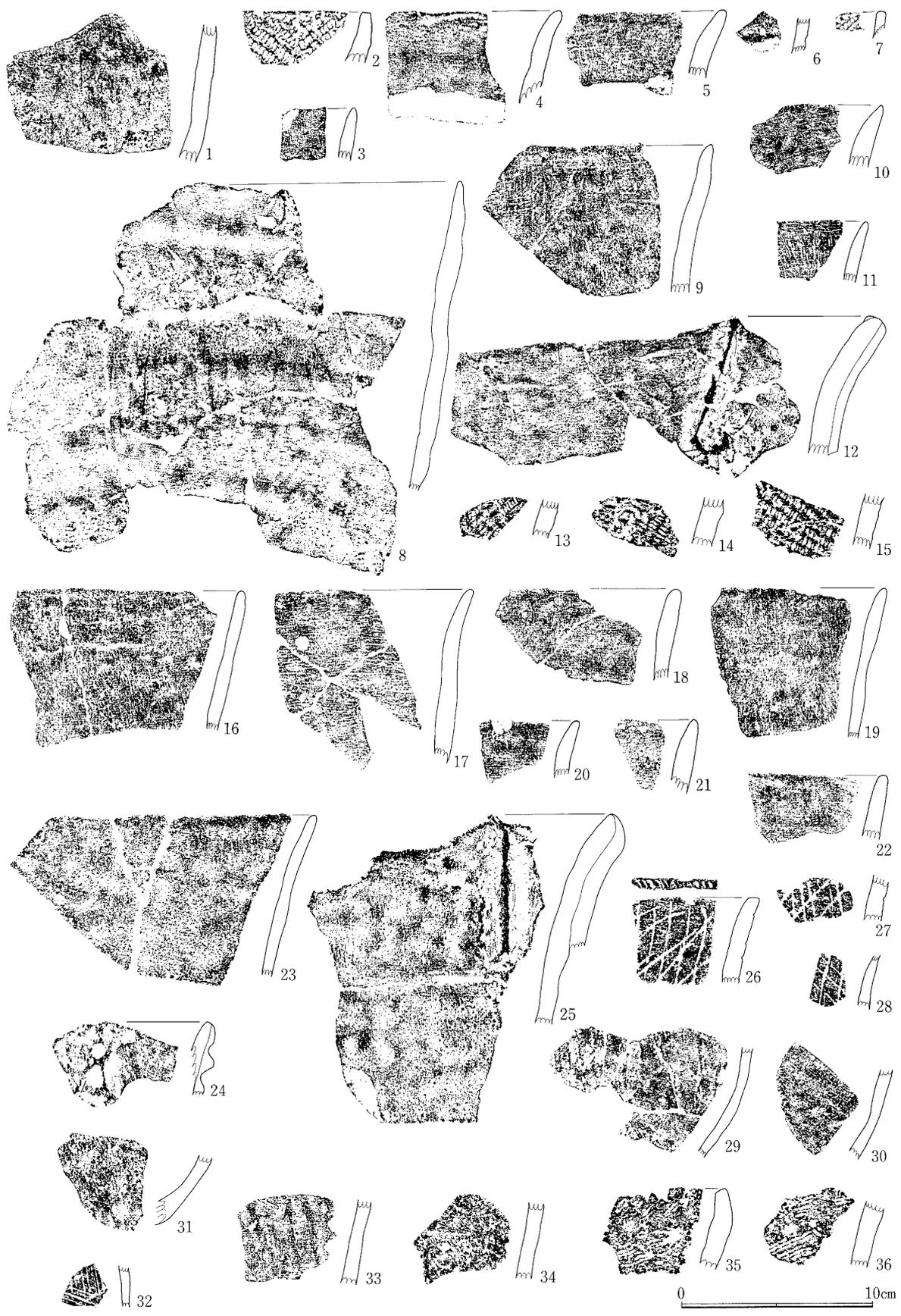
第19图 土坑(2) (1/40)



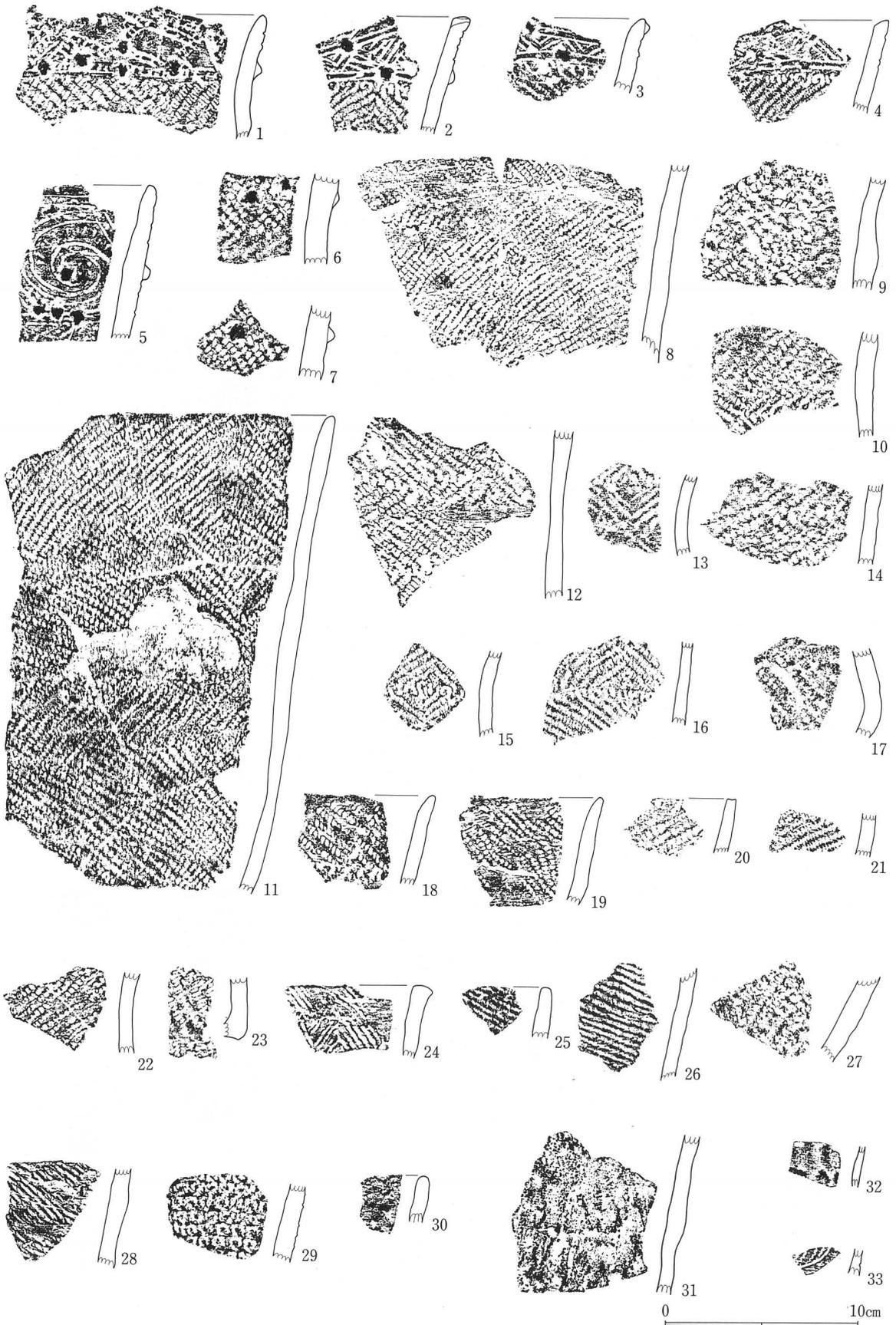
第20図 土坑(3) (1/40)



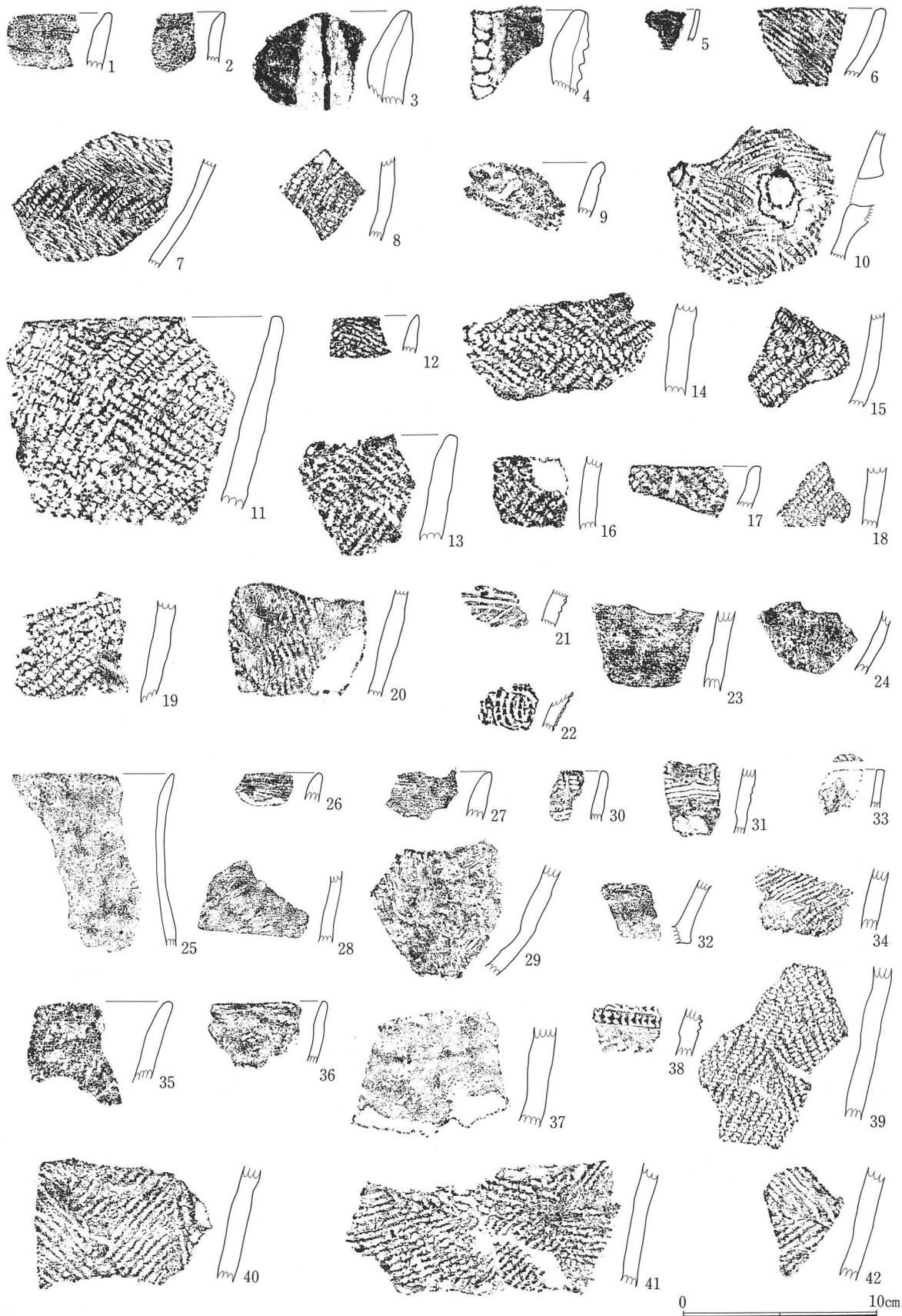
第21図 出土土器 (1・5・6・7・8は4/1, 2・3・4・9は1/3)



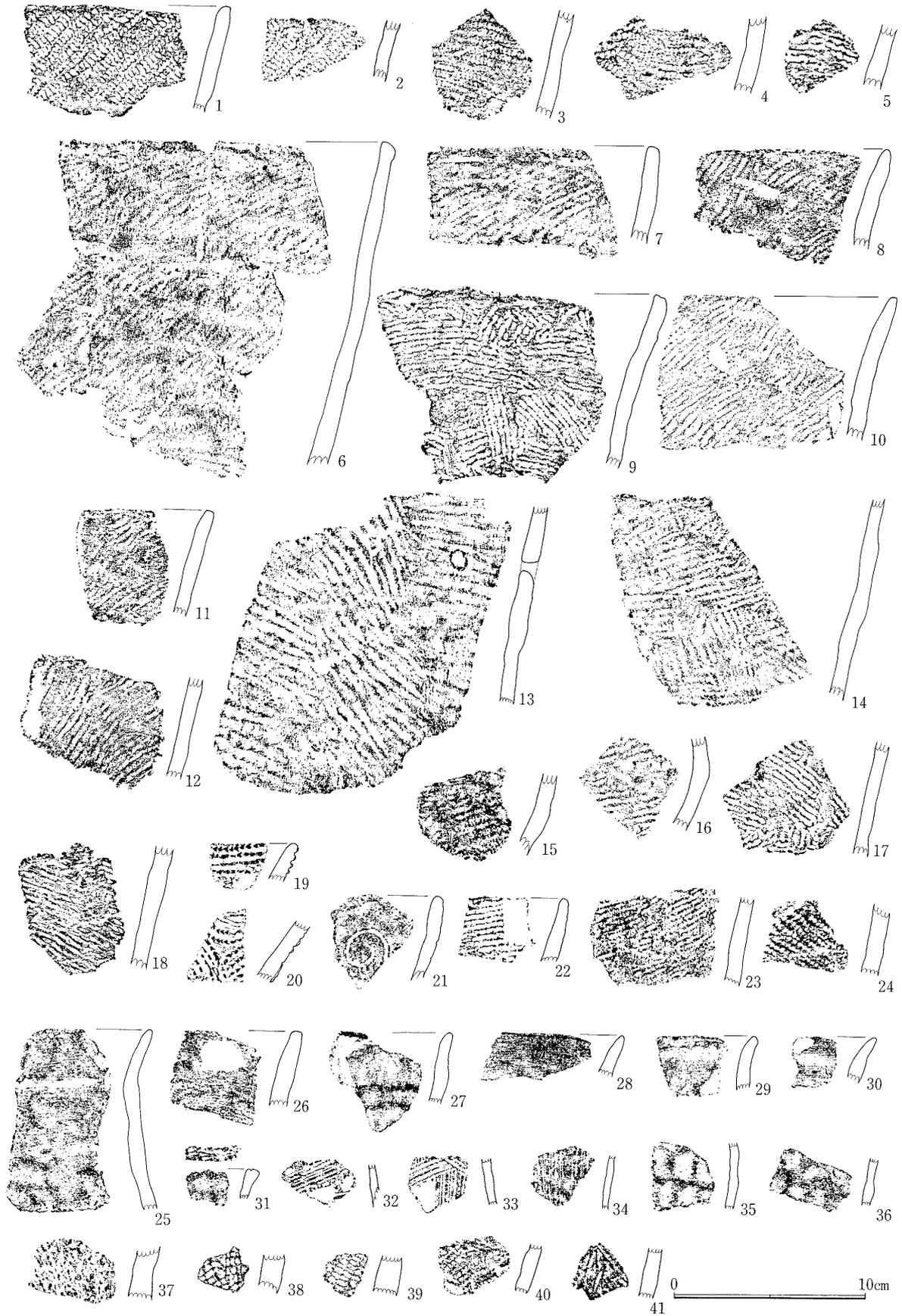
第22图 出土土器(2) (1/3)



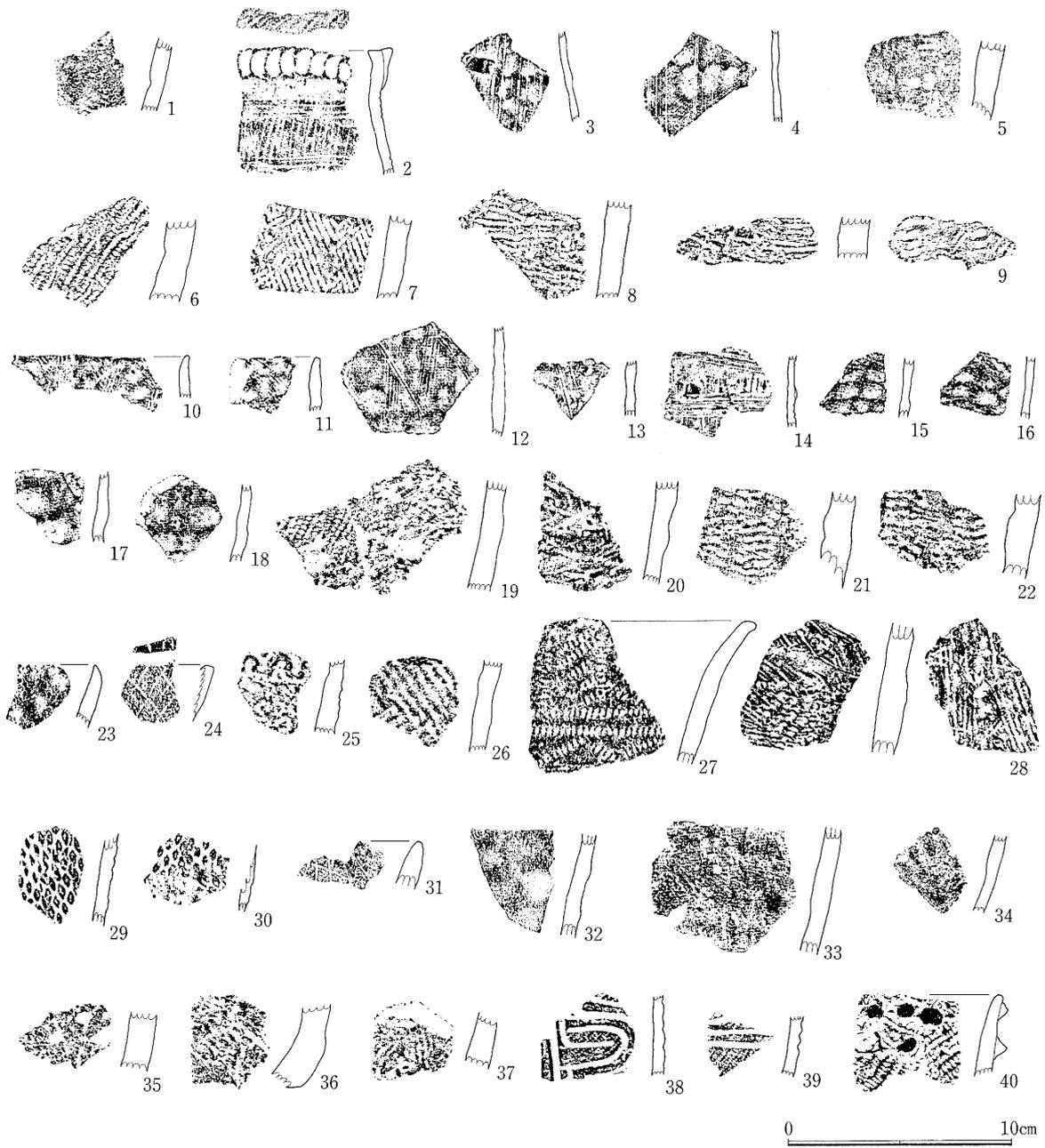
第23图 出土土器(3) (1/3)



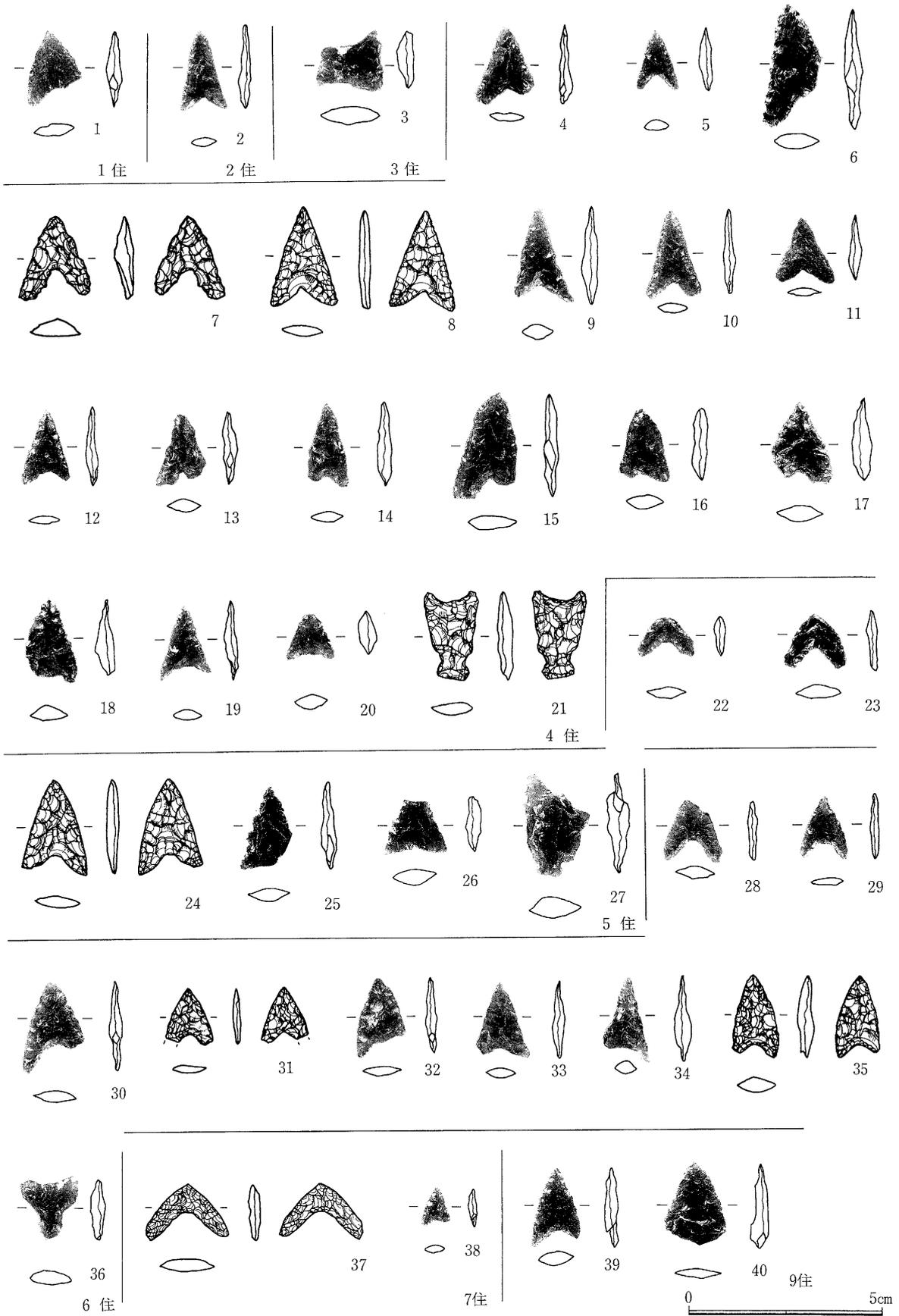
第24图 出土土器(4) (1/3)



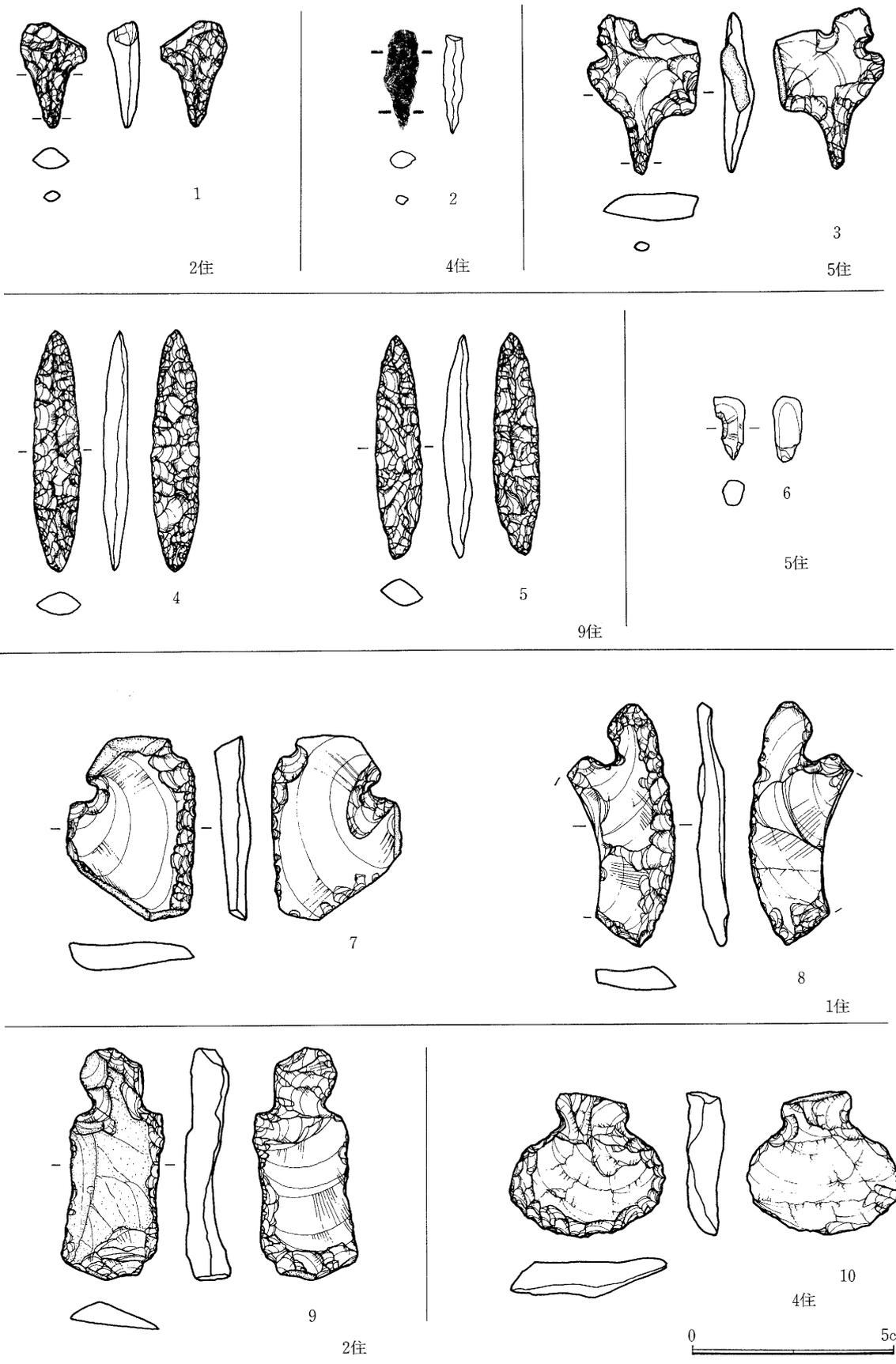
第25图 出土土器(5) (1/3)



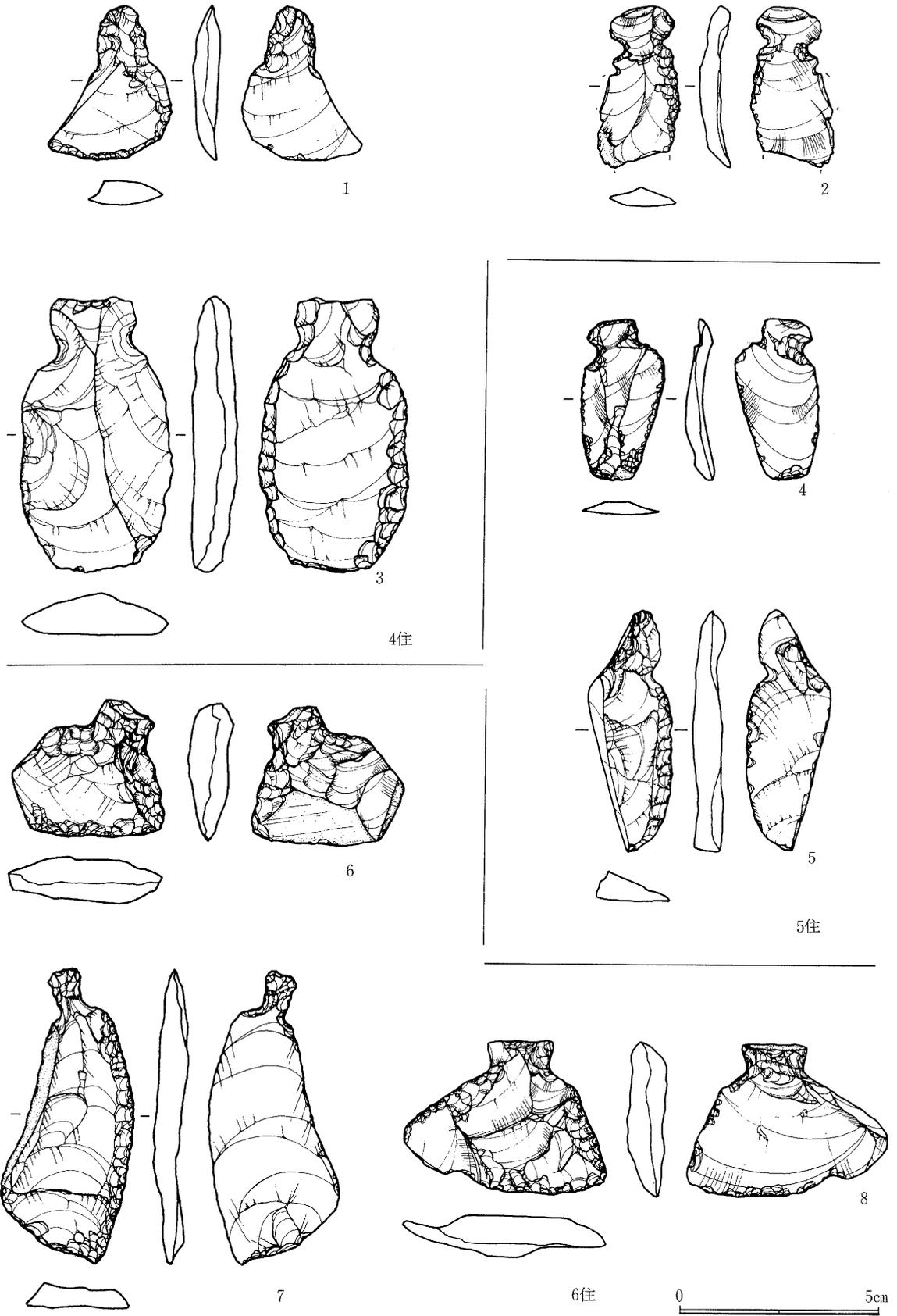
第26图 出土土器(6) (1/3)



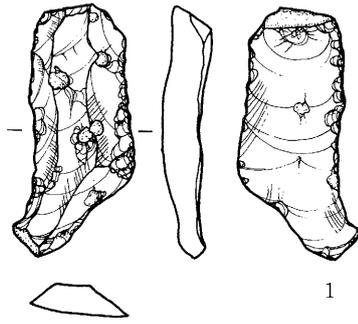
第27图 出土石器(1) (2/3)



第28图 出土石器(2) (2/3)

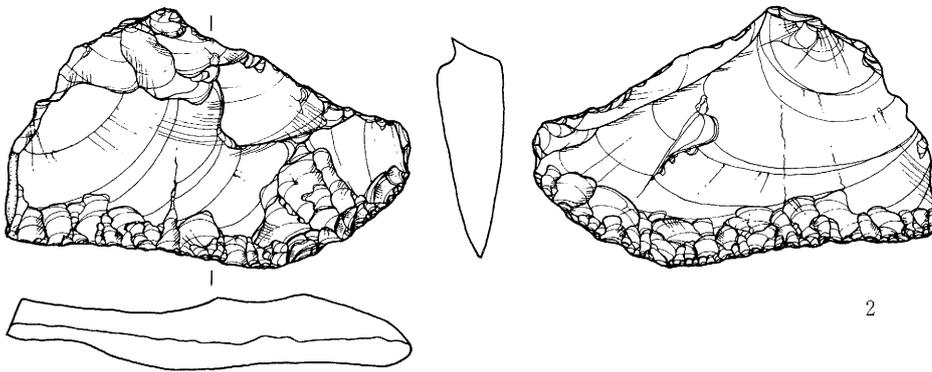


第29图 出土石器(3) (2/3)

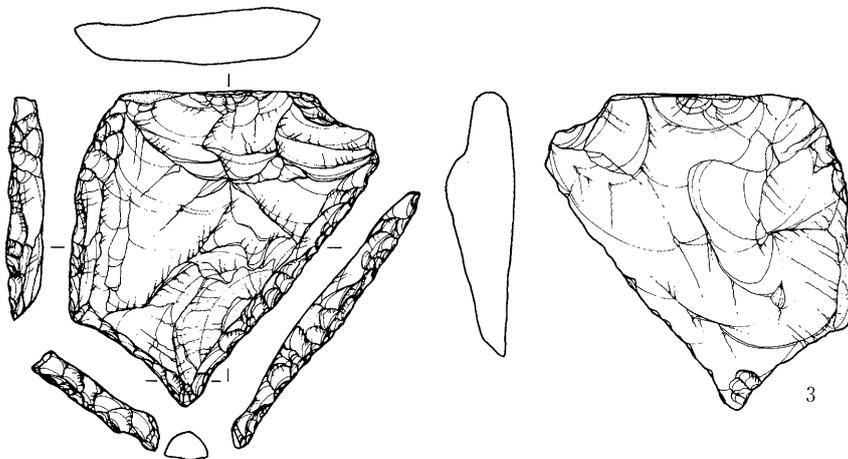


1

3住



2



3

7住



第30図 出土石器(4) (2/3)

## 第IV章 まとめ

### (1) はじめに

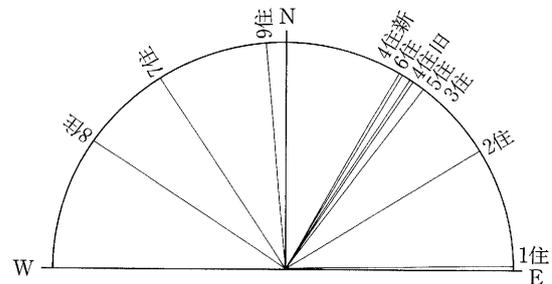
本遺跡の中心となるのは、竪穴住居、竪穴状遺構、土坑から構成される縄文時代前期前半の集落である。住居址の帰属は検出された土器等の様相より2時期に分離され、8～10号住居址を縄文時代前期初頭、1～7号住居址を縄文時代前期前葉とした。本章では当該期の住居構造を概観し、まとめに代えたい。

### (2) 広井出遺跡の住居址

①平面形 前期初頭の8・9号住居址は楕円形を呈し、規模もほぼ同一である。前期前葉の住居址では6号住居址を除き、方形を基調としている。しかし、規模・形は多様であり一括できない。6号住居址は楕円形を呈する。6号住居址の時期はやや下るかもしれないとみているが、時間差による変化であろうか。

②掘り込み 前期初頭の8・9号住居址は共に掘り込みが浅く、プランの一部が未検出である。前期前葉の掘り込みは前期初頭に比べ掘り込みが深く、プランが明瞭に検出されている。

③長軸方向 住居址の長軸の設定は、支柱穴が方形に並ぶ場合、短辺側の支柱穴間の中点を通るものとして求め、その方向は北からのずれで表した。前期初頭の8・9号住居址の長軸方向は西に振られる。しかし、その角度は8号住居址がN-56°-W、9号住居址がN-5°-Wと強い斉一性があるわけではない。前期前葉のものは7号住居址が北西方向を向く。その他の1～6号住居址は東に振られる。3号・4号新・4号旧・5号・6号の5軒の住居址の長軸方向は、4号新のN-30°-Eから3号のN-37°-Eまでの7°間に収束し、強い斉一性がみられる。1号住居址の長軸方向はほぼ東を指す。1号住居址は前述したように、その平面プランの軸方向と長軸方向が異なっているが、平面プランの長軸方向はこの7°間に収まる方向（約N-37°-W）を指している。前述の3～6号の5軒は、平面プランの長軸方向と住居の長軸方向が一致している。したがって平面形の軸方向からみた場合は、この6軒はほぼ同一方向を向いている。この方向、即ちN-30°～37°-Eの広井出遺跡の延長上には、蓼科山山頂が位置する。また、この方向から長軸が外れ、イレギュラーとなっている2号と7号の2軒は、長軸方向の角度差が91°とほぼ直角に異なる点も指摘しておきたい。



第31図 住居址長軸方向

④周溝 前期初頭の2軒には周溝がみられない。前期前葉の住居址からはすべて周溝が検出されている。3号・4号新・4号旧・7号住居址では壁下を全周し掘り方も明瞭である。1号住居址もほぼ全周する。

⑤炉 前期初頭の8・9号住居址は共に地床炉である。前期前葉では4号新住居址と5号住居址が石囲炉であり、その他は地床炉である。石囲炉は二つとも小型である。4号住居址では住居の

建て替えに伴い地床炉から石囲炉へという変化を確認することができた。ほとんどの地床炉は掘り込みを持たず、床面をそのままに使用している様である。焼土上面が床面より僅かに窪むが、使用による掻き出しの結果とみられる。炉の位置は6号住居址を除き中央部にある。6号住居址の炉は長軸線上のやや奥まった位置にある。

⑥ピット 主柱穴はいずれも4本であり、ほぼ長方形に規則的な配列をみせている。また、主柱穴の配置は、1号住居址を除いて平面形に対応するものとなっている。1号住居址の配置は平面形と軸方向が異なり、他の住居址と様相が異なる。主柱穴の位置も壁際にあり、他の住居址の様にやや中央によって位置するのと異なっている。7号住居址の主柱穴の位置は壁に比較的近い。

今回の調査で、主柱穴以外に上屋構造との関連が積極的に考えられるものが、3号住居址の周溝内より検出されたピットである。住居址の項で述べた様に周溝内から検出されたP5とP11、P6とP9、P7とP14、P8とP13は住居址を挟んで対峙する関係にあり、主柱穴間を結んだ直線の延長上にある。周溝内からは4号新・6号住居址からピットが検出されているものの、3号住居址の様な配列はなく規模も小さく、同列に扱われるべきではないと思われる。

⑦付属施設 土坑番号を付したものの、独立した機能を持つものではなく、住居址の施設ではないかと考えられるもの(第32図のスクリーン部分)が、前期前葉の住居から検出されている。1号住居址の32号土坑、3号住居址の47号土坑、4号旧住居址の50号土坑、5号住居址の49号土坑、6号住居址の75号土坑の5基である。これを住居に付属するものとみた理由は、次のとおりである。

a 土層平面及び断面の観察において、切り合い関係、貼床等の検出がみられない。(50号土坑の上面には僅かに貼り床が観察されたが、4号住居址建て替えに伴うものと判断している。)

b これらの土坑は、いずれもしっかりした掘り方をもつものであるが、同様な土坑の検出は多くない。遺跡内に占める面積は低く、分布は散発的である。同様に住居址の立地も散発的であり、遺跡内の遺構の密度は高くはない。この様な遺構の分布状況で、10軒の住居址の半分の5軒で、土坑が重複する確率は低いと考えられる。

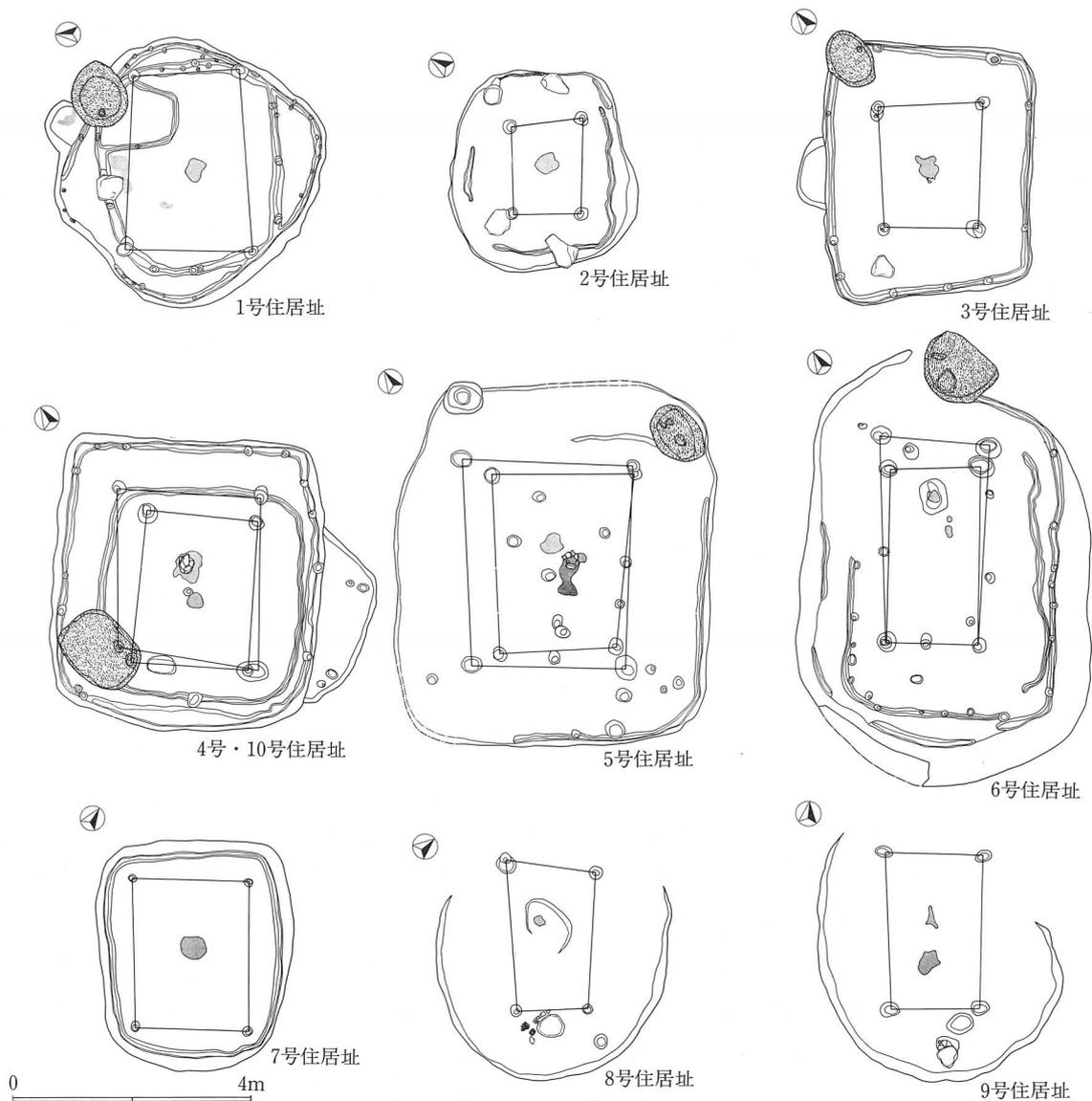
c しかも、それらの土坑のある住居址の時期はいずれも前期前葉であり、前期初頭の8・9・10号住居址の3軒にはみられない。この時期に限れば、8軒中(4号旧住居址を含む)に5軒みられるわけである。即ち、上記の様な条件下にあるにもかかわらず、この時期の住居には6割以上の確率で土坑があるわけである。

d いずれの土坑も住居の隅にあり、居住の妨げになる位置にはない。3号・4号旧・5号住居址の3軒には住居のコーナー部にあり、1号・6号の2軒は住居短辺の中央にある。

e 土坑出土の土器と住居址出土の土器に時期差がみられない。(但し、50号土坑出土の貝殻沈線文土器[第23図33]の1点は別時期とみられる。)

以上の理由から、前期前葉期の住居址に伴う施設とみている。

⑧盤状石皿 盤状石皿は1号・2号・3号・4号新・6号・8号・9号の7軒から出土している。1号～4号新と8号住居址の5軒のものは、床面に密着した状態で出土し、9号住居址のものは僅かに斜状に浮いて出土している。住居の中に占める位置は、住居を第32図の様に設定(長軸を垂線とし、北方向を上にする)した時、左下1/4の部分にある。6号住居址出土のものは75号土坑上より、かなり浮いた状態で出土している。



第32図 住居址の形態 (1/120)

### (3) おわりに

今後の検討課題の一つに本遺跡に近い神ノ木遺跡との関係がある。神ノ木遺跡は本年度試掘調査により、大規模な縄文時代前期前半の集落であることが確認されている。両者の関係が注目されるところであるが、試掘資料が整理途上にあり今回言及するに及ばなかった。両者の遺物の比較を通して、改めて広井出遺跡の性格を考えたい。

本遺跡の縄文前期前半の土器が在地系・東海系・関東系のものからなることは明確である。相互の土器を比較する上に優良な資料を提供したものの、今回は筆者の力不足から極めて便宜的な説明に止まっている。これについても神ノ木遺跡との比較を通して再検討したい。

石器についてはすべてに目を通せず、分類することができなかった。本遺跡から検出された黒耀石の総量はコンテナ1箱に及び、尋常な量とは思われない。石器が遺跡の性格を考える上で欠かせないことは認識している。何らかの方法で発表していきたいと考えている。

多くの課題を残し本稿を閉じるが、順次解明していきたいと思う。多くのご鞭撻をお願いしたい。

参考文献

- 茅野市教育委員会 1986 『茅野市史 上巻 原始古代』
- 茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』
- 茅野市教育委員会 1990 『棚畑遺跡』
- 茅野市教育委員会 1993 『阿久尻遺跡』
- 長野県教育委員会 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市 その4 昭和50年度』
- 長野県教育委員会 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村 その5 昭和51・52・53年度』
- 宮田村教育委員会 1990 『中越遺跡』
- 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂』
- 白州町教育委員会 1993 『上北田遺跡』
- 富士川町教育委員会 1981 『木島』
- 縄文セミナーの会 1994 『早期終末・前期初頭の諸様相』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物』
- 戸田哲也・大矢昌彦 1979 「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」『長野県考古学会誌 34号』
- 笹沢浩 1995 「阿久遺跡」『縄文文化の研究8』
- 戸沢充則 編 1994 『縄文時代研究事典』
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』

# 版 图



広井出遺跡全景



1 調査前



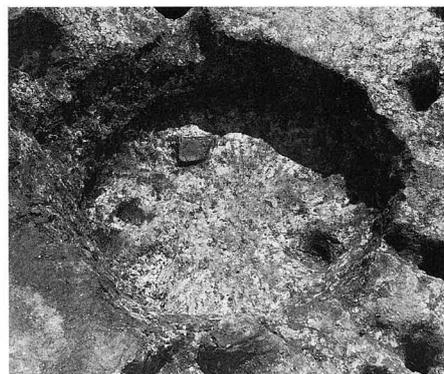
2 調査後



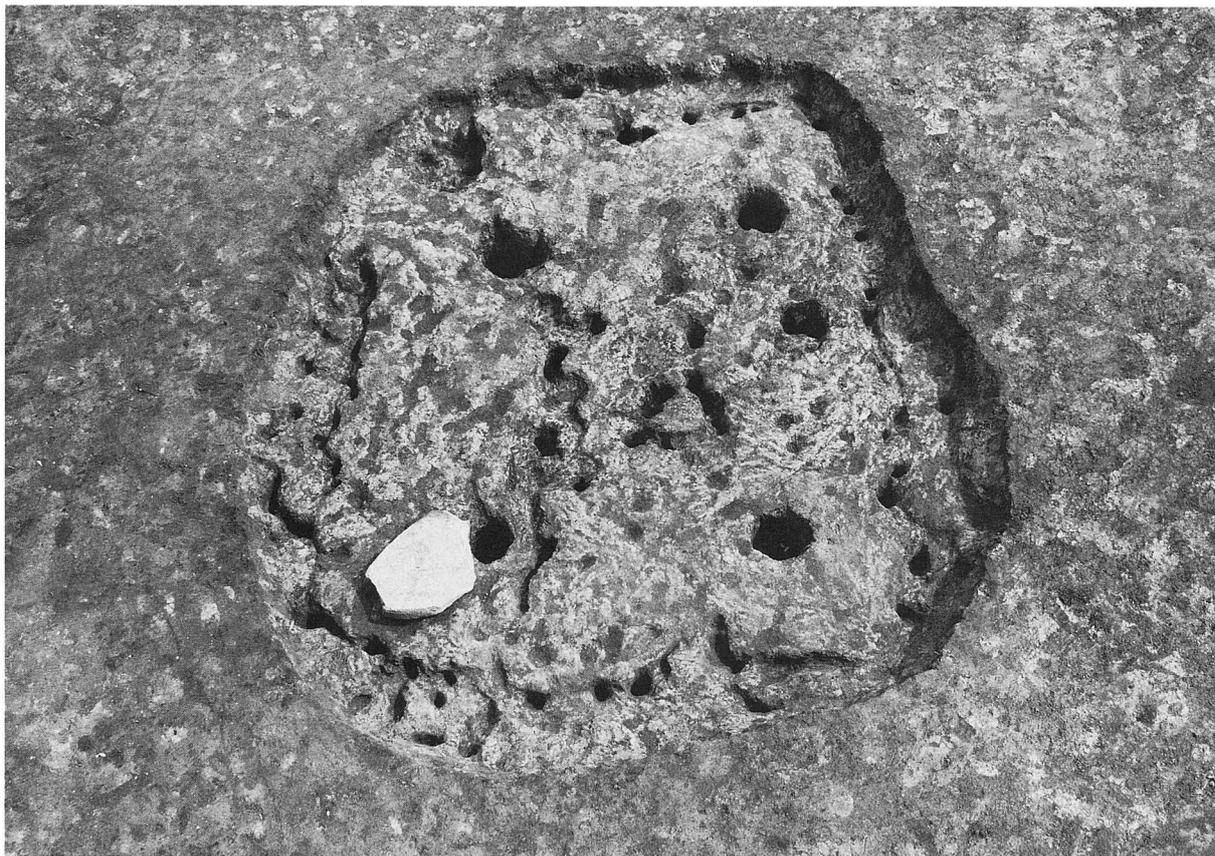
1 1号住居址(西から)



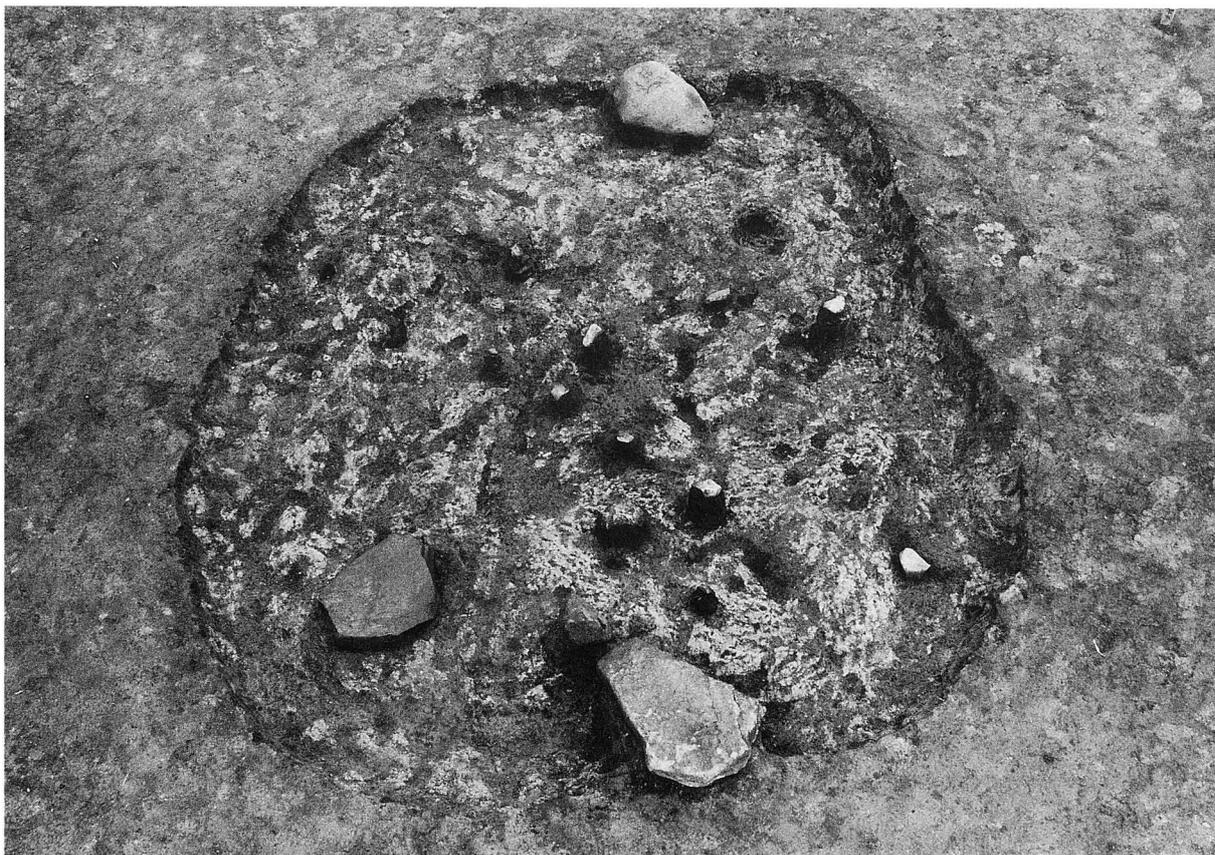
2 1号住居址遺物出土状況(西から)



3 32号土坑(北西から)



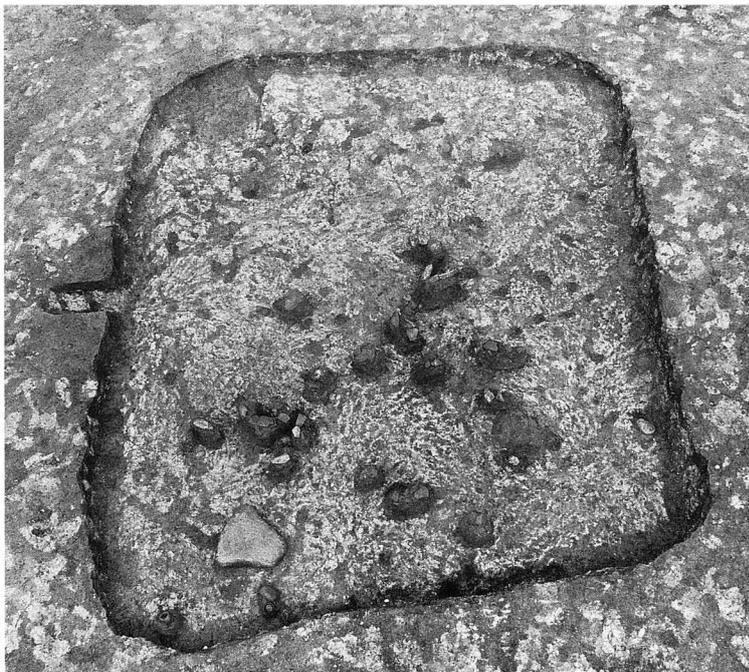
1 2号住居址(南西から)



2 2号住居址遺物出土状況(南西から)



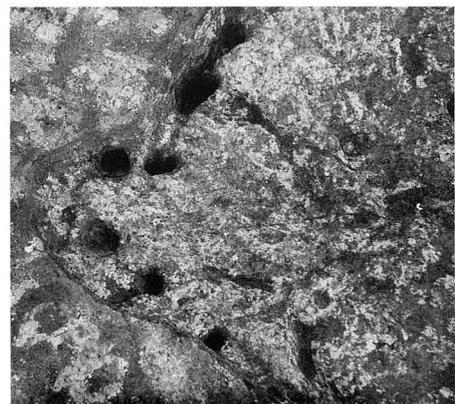
1 3号住居址(南西から)



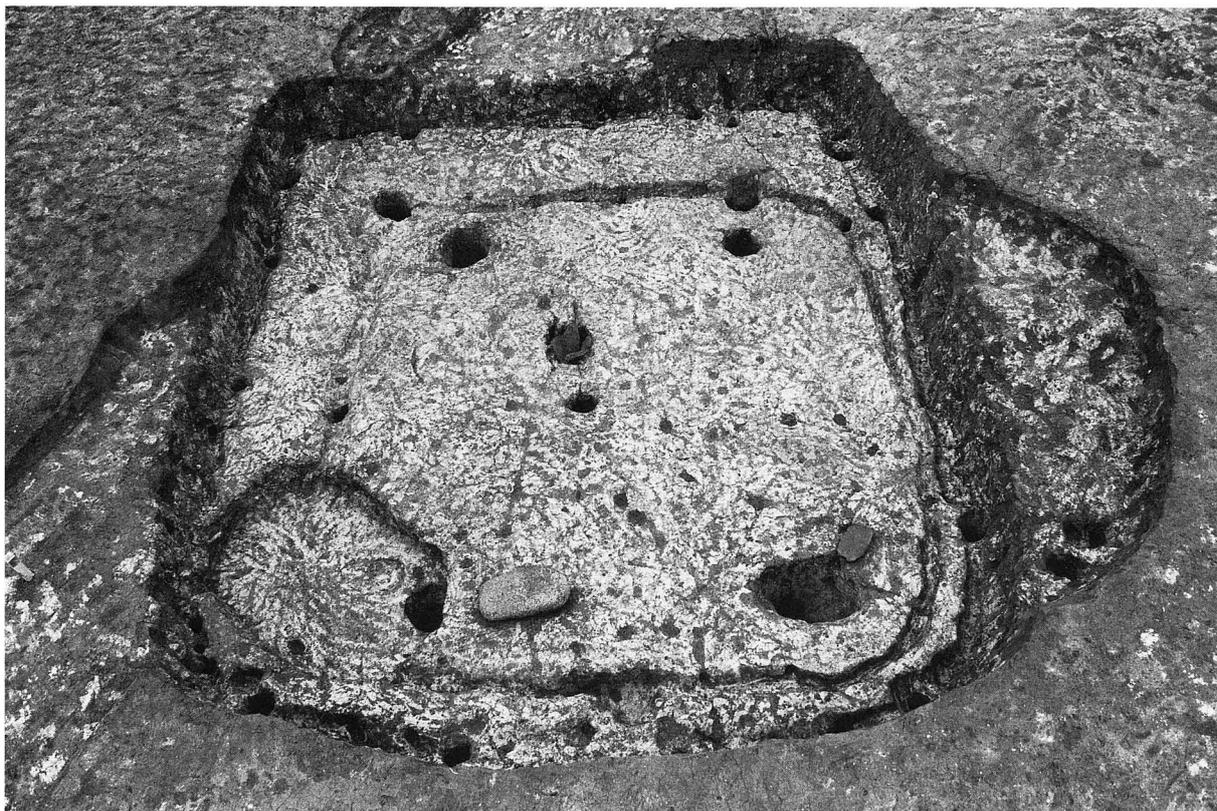
2 3号住居址遺物出土状況①(南西から)



3 3号住居址遺物出土状況②



4 47号土坑(西から)



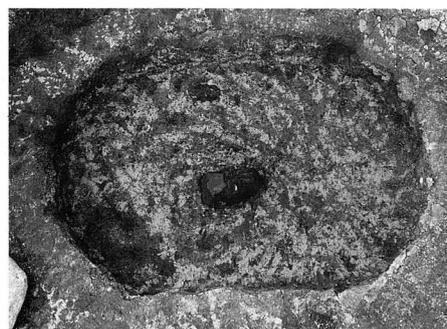
1 4号・10号住居址(南西から)



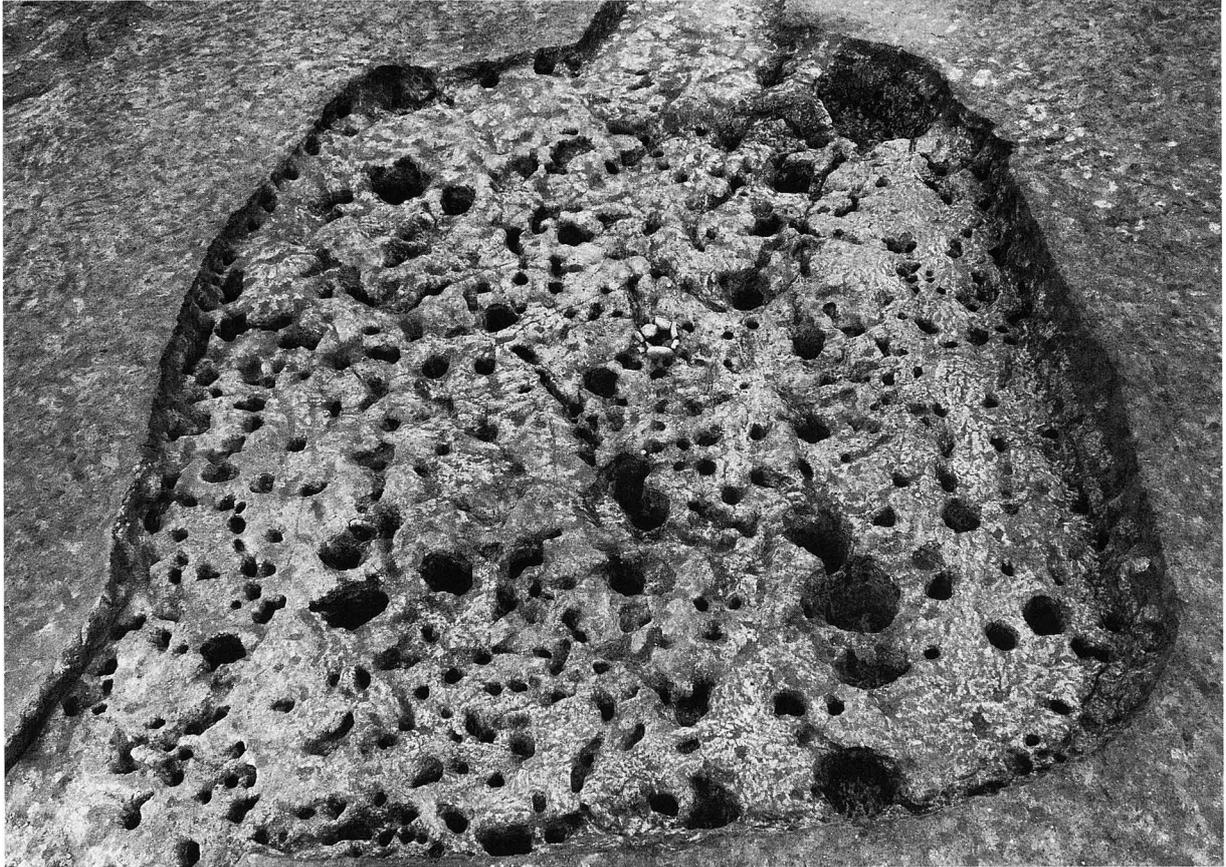
2 4号住居址遺物出土状況(南西から)



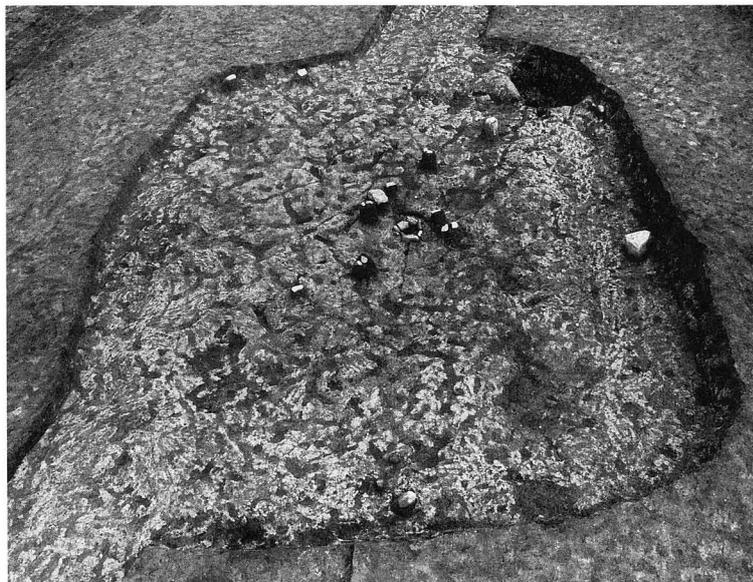
3 4号住居炉址(南西から)



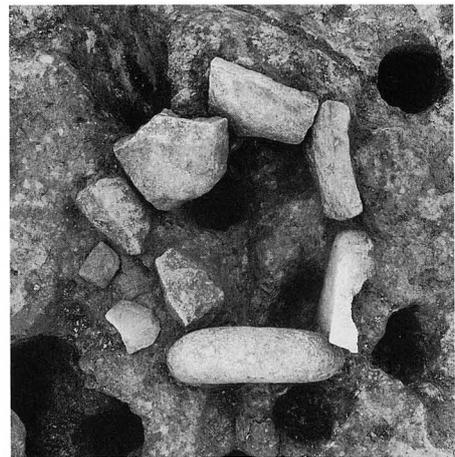
4 50号土坑(東から)



1 5号住居址(南西から)



2 5号住居址遺物出土状況(南西から)



3 5号住居炉址(南西から)



4 49号土坑(東から)



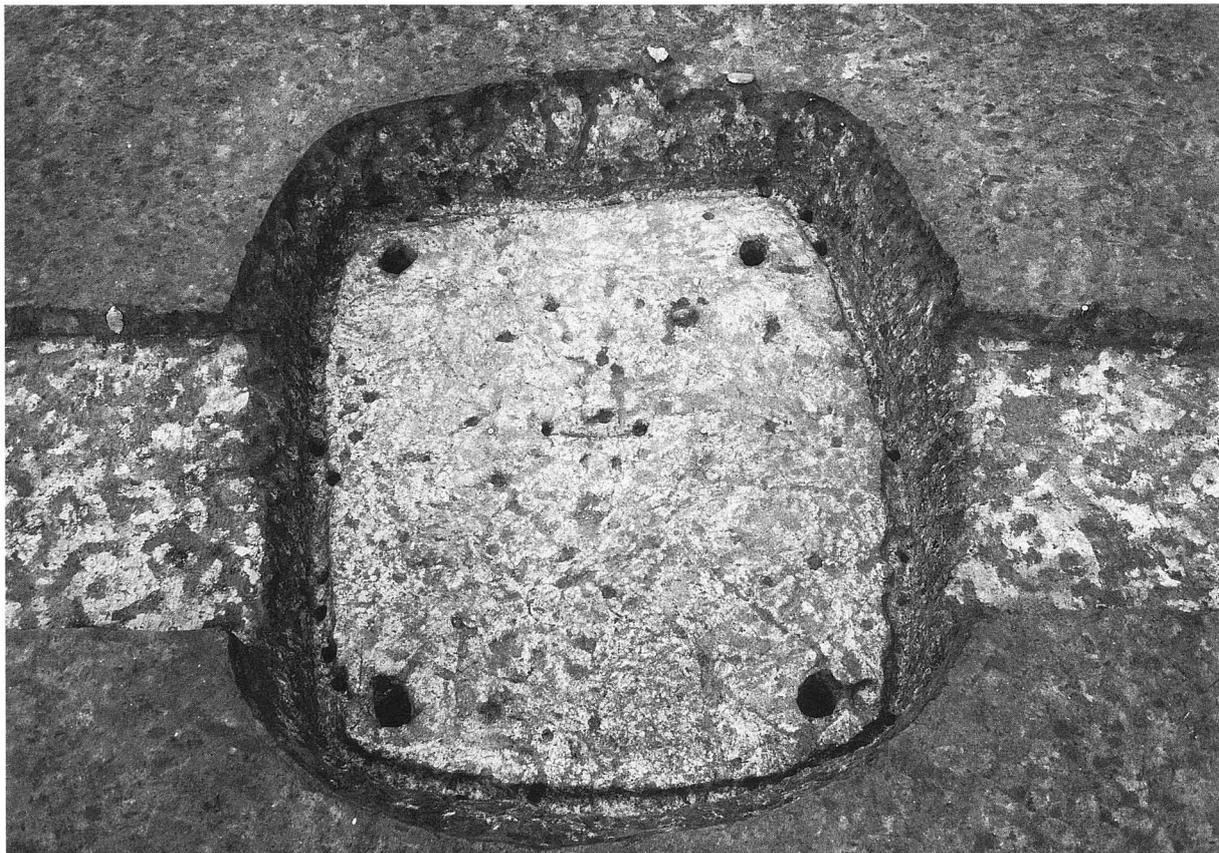
1 6号住居址(南西から)



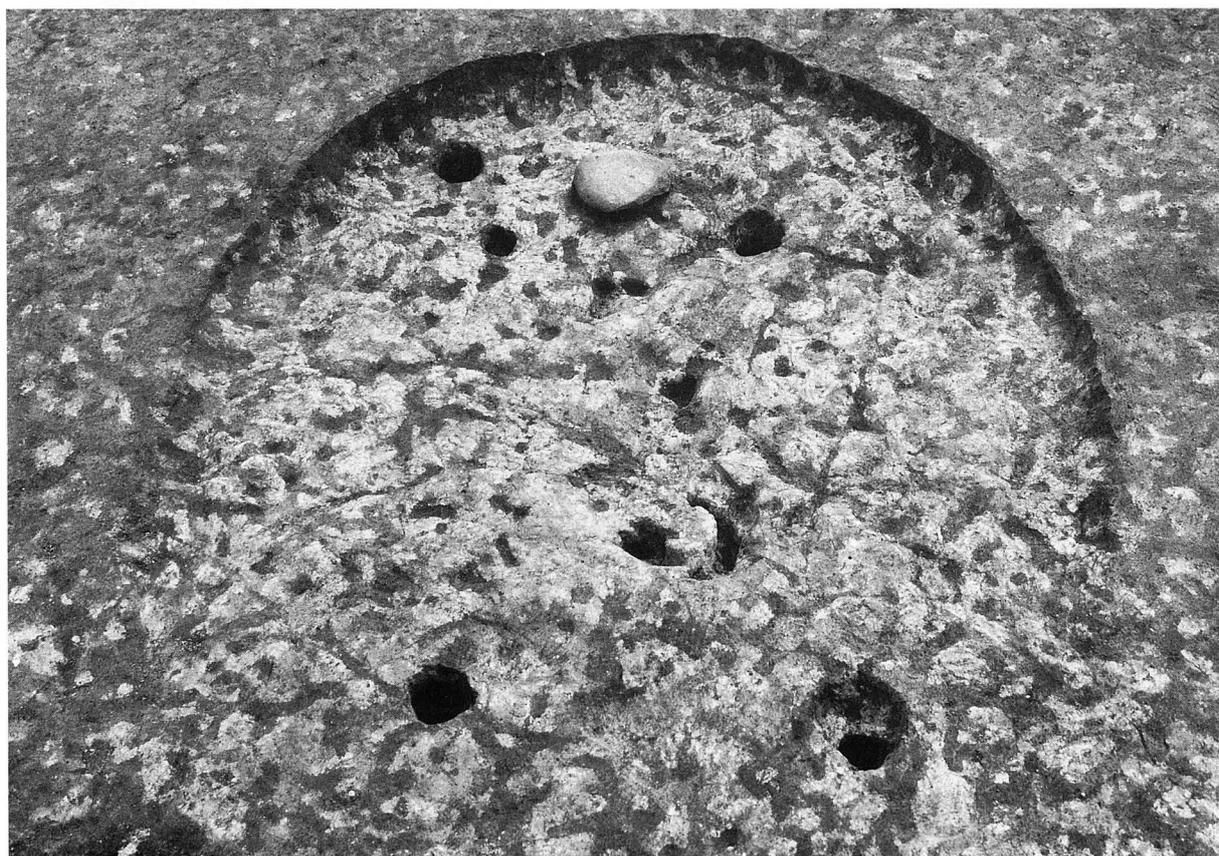
2 6号住居址遺物出土状況(南西から)



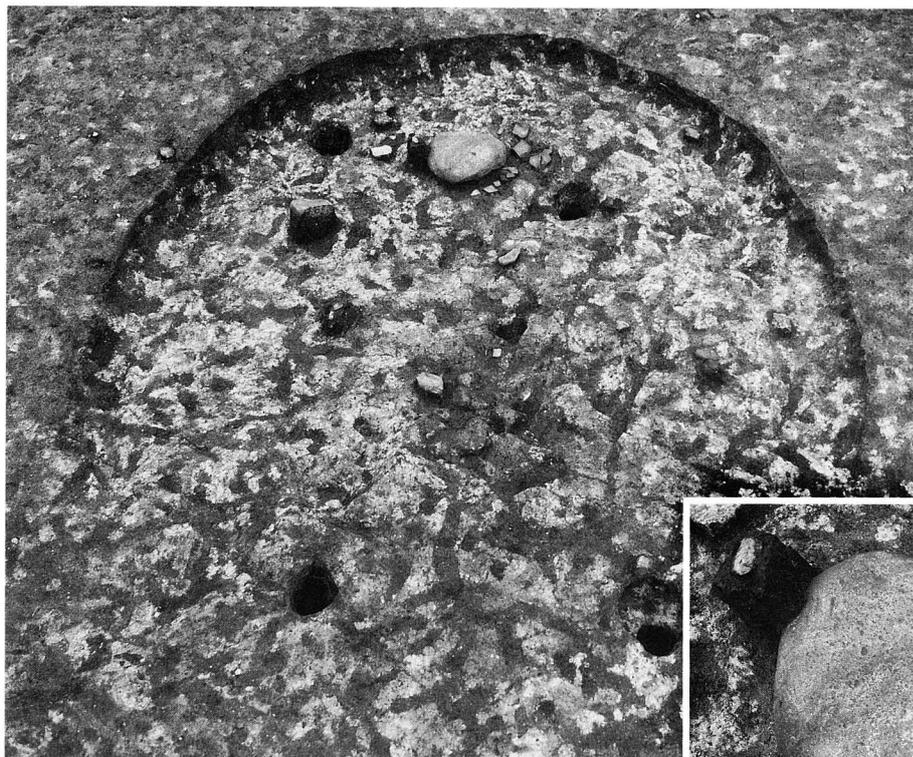
3 75号土坑(南から)



1 7号住居址(南から)



2 8号住居址(北西から)



1 8号住居址遺物出土状況(北西から)



2 8号住居址盤状石皿周辺



3 9号住居址(北から)



4 9号住居址盤状石皿



1 1号竖穴状遺構(南東から)



2 1号土坑(東から)



3 1号土坑土層断面(東から)



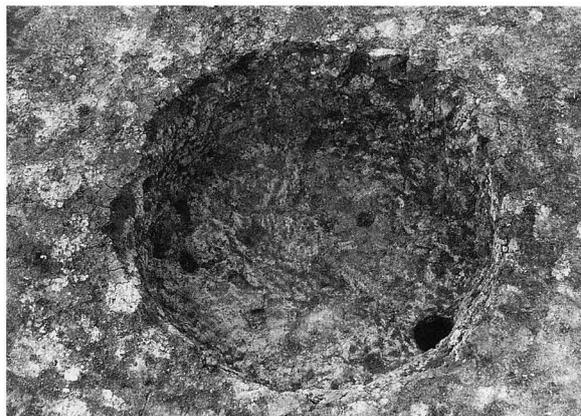
4 2号土坑(南東から)



5 22号土坑(東から)



1 23号土坑(東から)



2 24号土坑(東から)



3 25号土坑(南東から)



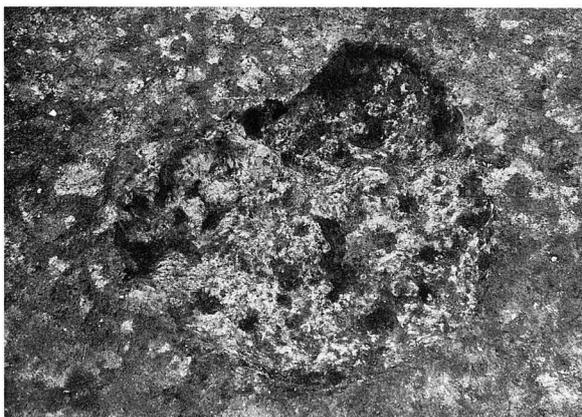
4 26号土坑(南東から)



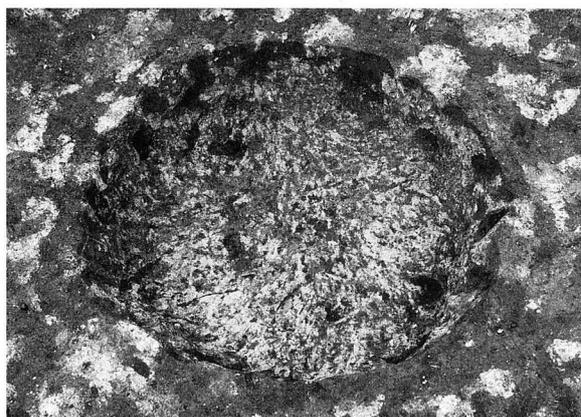
5 27号土坑(北東から)



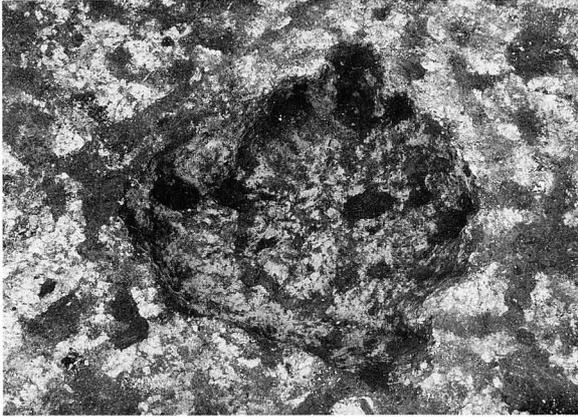
6 39号土坑(南から)



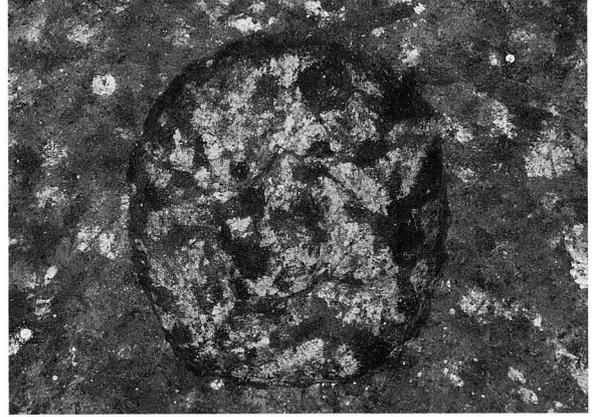
7 45号土坑(北東から)



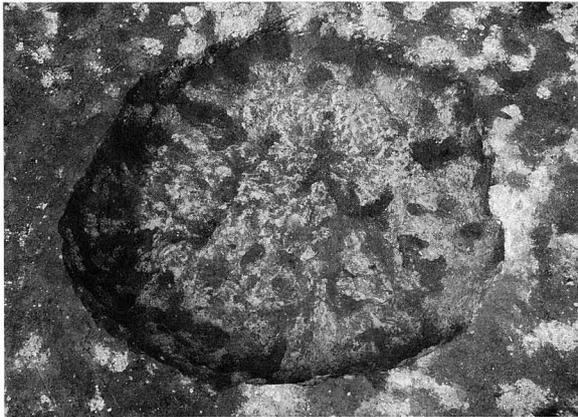
8 52号土坑(南から)



1 53号土坑(南東から)



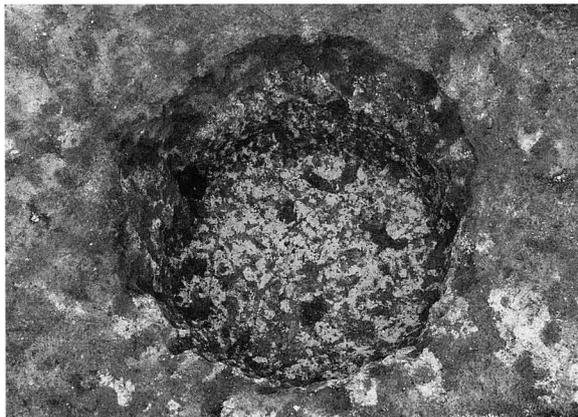
2 54号土坑(南から)



3 56号土坑(南東から)



4 57号土坑(南東から)



5 59号土坑(北から)



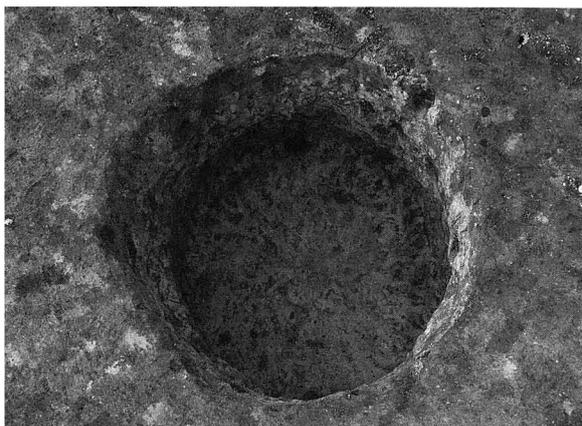
6 64号・65号土坑(南から)



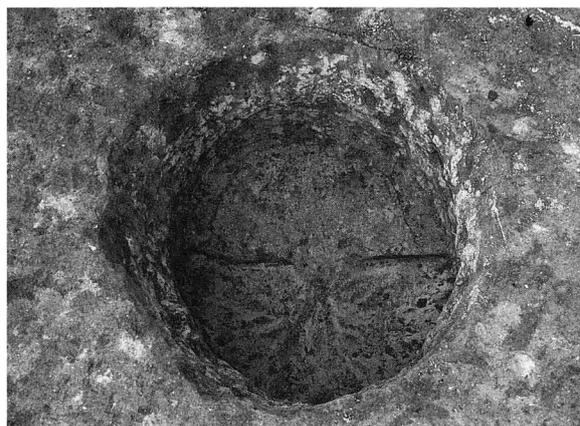
7 66号土坑(南から)



8 66号土坑底部検出状況(南から)



1 67号土坑(南東から)



2 67号土坑底部検出状況(南東から)



3 69号土坑(北から)



4 73号土坑(北東から)



5 遺跡より蓼科山を臨む

## 報告書抄録

ふりがな	ひろいでいせき							
書名	広井出遺跡							
副書名	平成6年度県営圃場整備事業芹ヶ沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林健治							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 長野県茅野市塚原2丁目6番1号 Tel 0266-72-2101							
発行年月日	西暦1995年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ひろいで 広井出	ちのしひがしかなやま 茅野市湖東金山	20214	236	36度 1分 22秒	138度 14分 7秒	19940726～ 19941121	4,825m <sup>2</sup>	県営圃場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
広井出	集落跡	縄文時代前期前半	竪穴住居 10軒 竪穴状遺構 1基 土坑 22基	先土器時代石器 (ナイフ形石器・有樋 尖頭器) 縄文時代早期土器 (押型文・貝殻沈線 文・絡条体圧痕文・条 痕文) 縄文時代前期前半土器 縄文時代前期前半石器 縄文時代前期末土器 縄文時代後期土器		縄文時代前期前半の研究に関する優良な資料を提供した。		

